

平成二十六年名古屋大学大学院文学研究科

学位（課程博士）申請論文

『左氏會箋』の基礎的研究

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻中国文学専門

竹内 航治

平成二十六年十二月

凡例

- 一、本論文における『左氏會箋』の引用には原則として『左氏會箋』上・下（富山房漢文大系増補版第十・十一巻、一九七四年）を用いる。他のテキストに拠る場合はその都度注記する。
- 二、『左傳』経文・伝文の引用には『左氏會箋』を用いる。
- 三、漢文資料の引用には原文・書き下し文・現代語訳を適宜使用する。
- 四、漢文資料の引用には正字を用いるが、フォントの関係上常用漢字で代用する場合がある。また、句読点等を補って表記する。
- 五、『左傳』の現代語訳は主に『左氏會箋』の解釈に従う。また『左氏會箋』と相違しない範囲において、楊伯峻編著『春秋左傳注（修訂本）』（中華書局、一九八一年）および小倉芳彦訳『春秋左氏伝』上・中・下（岩波文庫、一九八八～一九八九年）を参照する。

【目次】

序	1
第一章 『左氏會箋』の概略	
はじめに	4
一 竹添進一郎と『左氏會箋』	4
二 『左氏會箋』の注釈内容	8
三 『左氏會箋』の刊本	10
四 島田翰と『左氏會箋』	16
おわりに	18
第二章 『左氏會箋』に関する先行研究	
はじめに	21
一 注釈の内容に関する先行研究	24
二 先行注釈との関係に関する先行研究	26
三 上野賢知の『左氏會箋』研究	38
おわりに	41

第三章 『左氏會箋』の稿本

はじめに	43
一 稿本が残された経緯	43
二 稿本の概要	50
三 稿本の作成順序	53
四 『春秋經傳集解』テキストとしての変遷	68
五 文章表現に関する注の変遷	71
おわりに	73

第四章 『左氏會箋』の準備稿

はじめに	75
一 『左傳集説』の概要	75
二 『左傳集説』に引用される注釈書	79
三 『左傳集説』の中心となる注釈書	89
おわりに	94

第五章 『左傳輯釋』『左傳續考』と『左氏會箋』

はじめに	97
一 安井息軒『左傳輯釋』と『左氏會箋』	97

二	『左傳續考』に関する先行研究	101
三	亀井昭陽と『左傳續考』	103
四	『左傳續考』の特徴と『左氏會箋』における受容	105
おわりに		113
第六章 『左氏會箋』以前における竹添進一郎の『左傳』評注書		
はじめに		115
一	竹添進一郎『左傳鈔』と高塘『左傳叢鈔』	115
二	『歴代古文鈔』刊行の目的	123
三	『左氏會箋』稿本に取られる『左傳鈔』	126
おわりに		130
第七章 「文法」解説書としての『左傳鈔』と『左氏會箋』		
はじめに		132
一	『左傳鈔』『左氏會箋』に見える「文法」解説（一）―伝文の分節化―	132
二	『左傳鈔』『左氏會箋』に見える「文法」解説（二）―伏線の指摘―	135
おわりに		142
結語		143

序

『左氏會箋』（以下、『會箋』）は、明治三十六年（一九〇三）の刊行以来広く行われている。竹添は宮内省図書寮（現宮内庁書陵部）所蔵の旧鈔卷子本『春秋經傳集解』を底本として、『左傳』定本の作製を企図した。該卷子本は隋唐写本の流れを汲む貴重な善本であり、これを底本に採用したことは竹添の一大見識として認められている。また、中国日本における『左傳』注釈を広く集めて考証を加えており、明治期に至る『左傳』注釈の集大成でもある。

膨大な先行注釈を取り入れた『會箋』が持つ注釈内容は極めて豊富である。そもそも、『左傳』そのものが思想書・歴史書・文学作品といった複数の側面を持っており、『左傳』注釈書もそれに応じて様々な注釈内容を有するようになった。それは単独の注釈書の中で全ての問題が論じられるというものではむしろなく、各々の注釈者が専門とする方面で注釈を施していったのである。だが筆者は『會箋』を読み、竹添は『左傳』に対してこれまで施されてきた注釈内容を一堂に集め、いわば『左傳』の総合注釈書を作ろうとしたのではないかと考えている。『會箋』が持つ注釈内容の豊富さは特記すべきものであり、論ずるに値する問題は多い。だが『會箋』の注釈内容を論じるためには、一つの課題を乗り越えねばならない。それは、注の出処の問題である。竹添は先行注釈書を引用する際にその出処をほとんど記さず、先行注釈と竹添自身の説とが区別しがたくなっている。その分別を行わなければ研究が進まず、そのためには先行注釈書の網羅的な調査が求められる。その評価の割に『會箋』に関する研究は十分進んでいるとは言いがたく、その理由の一つに出処調査の困難さがあると思われる。上野賢知氏がかつて『會箋』全体に渡る出処調査を行ったが、その成果は未

公表のままである。同氏の研究を調べた上で、それを発展させねばならない。

とはいえ先行注釈の網羅的な調査には時間がかかり、直ちに終えられるものではない。そこで本論文では、注釈内容の研究に進む前の基礎的研究として、『會箋』が成立するまでの経緯を明らかにすることを主な目的とする。『會箋』には稿本が数種類現存しており、これらを調査して稿本より成本に至る過程を解明する。また、竹添が『會箋』以前に刊行した評注書『左傳鈔』の調査も行う。これらは、竹添が重要視していた先行注釈書を選別するための仕事である。竹添が自らの注釈書を中心に据えることを構想していた注釈書は何か、稿本などに残された情報に基づいて突き止めてみたい。これによつて、『會箋』の注釈内容を論じるためにはどの先行注釈書との関係に着目すべきか、おおよその見通しを立てることができであろう。本論文を『左氏會箋』の基礎的研究」と題するのである。

筆者が着目している『會箋』の注釈内容は、『左傳』の文章表現に関する解説である。この問題について本格的な研究は別に行うこととして、稿本調査などで判明した先行注釈書との関係に絞つて部分的に論じることとする。

第一章では竹添と『會箋』に関する概説を行う。『會箋』成立に至るまでの竹添の経歴と、『會箋』の基本的な情報をまとめる。また、『會箋』の刊本についても付記する。

第二章では『會箋』に関する先行研究を紹介し、残された問題点を示す。

第三章では『會箋』稿本を調査し、稿本が残された経緯や作成順序を明らかにし、稿本の内容がいかに変遷したか具体例を示す。

第四章では『會箋』の準備稿を調査し、竹添が準備段階でいかなる先行注釈書に依拠していたかを明らかにする。

第五章では、『會箋』が多くを拠った先行注釈書『左傳輯釋』『左傳續考』を取り上げてその概要を示すとともに、『會箋』における引用の具体例を提示する。

第六章では、竹添が『會箋』以前に刊行した『左傳鈔』について取り上げ、『會箋』との間に存在する関係について明らかにする。

第七章では、文章表現に関する解説として『左傳鈔』と『會箋』に見える注を比較し、この注釈内容について『會箋』が主に拠った先行注釈を明らかにする。

第一章 『左氏會箋』の概略

はじめに

本章では、竹添進一郎と『左氏會箋』に関する情報の大枠を述べる。『左氏會箋』撰述に至るまでの竹添の経歴と、『左氏會箋』の概略をまとめるものである。また、これまで十分に注意が払われてこなかった『會箋』刊本の種類と、それらの間に存在する差異についても調査した所を述べる。

一 竹添進一郎と『左氏會箋』

竹添進一郎、名は漸、字は光鴻^{こうこう}、号は井井^{せいせい}。進一郎は通称である。天保十三年（一八四二）、肥後天草にて生まれる「①」。大正六年（一九一七）没。彼の父である光強は広瀬淡窓の門下であり、進一郎は幼くして父から漢学の手ほどきを受けた。十一歳で医師・値賀槐南に学び、『左傳』『國語』の講義を受ける。値賀は福岡の儒者である亀井家の門人であった「②」。

安政三年（一八五六）、熊本藩の儒者・木下犀潭^{きのしたさいたん}の門に入る。同門に井上毅^{いのうえこゝし}・松岡甕谷^{まつおかおうこく}などがいた。慶応元年（一八六五）、藩校時習館^{じしゅうかん}に入り、翌二年には訓導（教諭）に任じられる。明治元年（一八六八）には長崎に遊学し英語を学ぶ。廃藩置県後は録を離れ私塾を開いた。

七年（一八七四）、勝海舟の勧めにより東京に上り、修史局ついで法制局に職を得る。

八年（一八七五）、江華島事件が勃発。森有礼が清国公使として天津に派遣される際、竹添はこれに

随行する。天津領事館勤務を経て北京公使館書記官となる。翌九年、四川への旅に赴く。北京より洛陽・西安を経、秦嶺を越えて成都・重慶に至り、長江を下り上海に着いた。この際の日記が後に『棧雲峽雨日記』と題して刊行されている。

十年（一八七七）、清国より帰国。十三年（一八八〇）、清国天津総領事となる。十四年（一八八一）、朝鮮弁理公使となる。十七年（一八八四）十二月、甲申事変が起こる。事件に際し竹添らは一時朝鮮王宮を占拠するも清軍の攻撃を受けて退去し、日本に帰国する。翌十八年、事変の責任を取り朝鮮弁理公使を辞す。

二十六年（一八九三）、文部大臣井上毅の要請によって東京帝国大学教授に就任する。二十八年に退官。その後は小田原に居を構え、著述に専念する。

竹添の著作としては『棧雲峽雨日記』の他、『左氏會箋』・『論語會箋』・『毛詩會箋』があり、これら三種は「三會箋」と総称されている。また、『孟子論文』・『孟子講義』がある。

『左氏會箋』三十巻は、宮内省図書寮（現宮内庁書陵部）に収められた鎌倉時代書写の卷子本『春秋經傳集解』三十巻（金沢文庫旧蔵本）を底本としている。この卷子本は清原家が伝えたものであり、隋唐期の写本の流れを汲むとされている。竹添は卷子本に基づき、開成石経および数種の宋本を用いて校勘を行うことで『左傳』定本の作製を企図したのである。さらに中国および日本における『左傳』注釈を広く集めた上で考証を加え、それを杜注の後に「箋」として付している。本書は明治三十六年（一九〇三）に明治講学会より出版され、後に富山房の漢文大系に収録され広く行われることとなった。

卷子本『春秋經傳集解』が有する価値については、『會箋』自序において竹添自身が述べている。

竹添は卷子本の来歴および装訂について紹介した後、日本に残る旧鈔本をいくつか取り上げ、完本として現存する卷子本『春秋經傳集解』を「絶世之寶」と讃えている。それに続く部分は本論文の内容に関わるので、書き下し文を二つに分けて引用し、筆者が取り上げる問題点について述べておく〔③〕。

試みに宋本を以て對校するに、文字の異同尠ならず。而して印本の脱誤の此れに頼りて補正すべき者は極めて多し。年首の「經」「傳」二字のごときは、是れ始めて經傳を合するの時に題別する所なり。其の欄上に在るは、體例固より當に然るべきなり。開成の石に刻するや既に欄界無ければ、故に之を連書す。而るに北宋以來の刻本は皆な諸れを欄内に入れ、本經と別つこと無し。是れ誤りの尤も大なる者なり。余深く斯の經が爲に焉れを慨く。乃ち卷子本を以て底本と爲し、之に石經と宋本とを參す。而して經注の異同有る者は小圈を右旁に加へ、一一疏明せり。但だ注中の「也」等の字、義理に関はる無き者は則ち焉れを畧するは、其の煩を避くるなり。

竹添は、卷子本と宋本を対校するに異同が少なからず、卷子本によつて通行本の誤脱を補正できる例が極めて多いとしている。たとえば、『春秋經傳集解』では各年の經文・伝文の冒頭に「經」「傳」字が記されるが、これは『春秋經』と『左傳』を一つのテキストとしてまとめる際に区別のために加えたものであり、卷子本がそうであるように欄界の上に置くのが本来の形である。北宋以降の刊本が「經」「傳」字を欄界内に置き、各經文・伝文と連続させたのは大きな誤りであるというのが、竹添の述べる所である（「經」「傳」字の問題については、第三章第四節で再度言及する）。そこで卷子本を底本として石經・宋本で校勘を行い、異同があれば小圈点を加え、注で一々説明する。杜注の「也」など、文義に関わらない異同は注を省く、としている。この問題については次節において触れる。

近儒の左氏に注する者は、予の涉獵する所、皇朝に在りては則ち中井氏積徳・増島氏固・太田氏元貞・古賀氏煜・龜井氏昱・安井氏衡・海保氏元備、皆な定説有り。而して龜井氏最も詳備たり。清に在りては則ち顧氏炎武・魏氏禧・萬氏斯同・萬氏斯大・王氏夫之・毛氏奇齡・惠氏棟・馬氏宗璉・趙氏佑・焦氏循・江氏永・顧氏棟高・雷氏學洪・方氏苞・洪氏亮吉・梁氏履繩・崔氏述・朱氏元英・段氏玉裁・王氏念孫及び引之・姜氏炳璋・阮氏元・沈氏欽韓・錢氏錡・姚氏鼐・張氏自超・高氏澍然・俞氏樾、各おの翔獲有り。其の奇僻を去り、其の精確を取る。其の他、古今諸家の論説の左氏に渉る者、普く搜し博く采り、融會貫通し、之に出だすに己の意を以てし、名づけて左傳會箋と曰ふ。杜氏の集解・朱子の集注の體に仿ふなり。而して其の議論の大義を發揮し其の考據の獨得に出づる者は、特に名氏を擧げて以て之を表異す。亦た朱子の集注圈外の例に仿ふなり。

夫れ經は道を載する所以なり。道は人心の同然なる所に原づく。然らば則ち他人の經を説きて我が心を獲る者、道の斯に在ること知るべし。同然なる所の心を以て、同然なる所の道を求むれば、何ぞ必ずしも彼我の別を其の間に容れんや。衆説を集め之を折衷するは、要するに經旨を闡明するに在り。杜朱二家の解經の法、尤も其の求道の誠にして秉心の公を見るなり。若し夫れ博きを誇り新しきを衒ひ、栩栩として自ら喜ぶ者は、固より與に議するに足らず。人の美を掠むるを以て嫌と爲すに至りては、則ち猶ほ淺丈夫の心のごときなるかな。

明治三十六年六月漸卿竹添光鴻序

竹添はここで依拠した先行注釈者の名を列挙している。自分の仕事は諸注釈を広く集めた上で「融會貫通」する、つまり一つに溶け合わせることで述べ、先行注釈者として特に名を挙げるのは「其の議論の大義を發揮し其の考據の獨得に出づる者」であるとする。竹添は箋文において依拠した先行注釈を一々明記していない。そのような竹添の姿勢に対しては、自序の記載内容をも踏まえた批判が行われている。これらの問題については第二章で触れる。

なお自序の後に卷子本および校勘に利用した宋本に関する考証が付記され、『左傳』に関する総論が載せられているが、引用は省略する。

二 『左氏會箋』の注釈内容

『左氏會箋』の中には、どのような注釈内容が含まれるのであろうか。筆者は、『會箋』の注釈内容を以下のように分けて考えている。全ての箋をこの通りに整然と分けられるというものでもなく、いくつかの要素を兼ね備えた箋も存在するが、便宜的に設けた分類であると理解していただきたい。

- A … 文字の校勘
- B … 訓詁の注
- C … 個別の事物（地理・人物・名物・典礼制度）に関する説明
- D … 『左傳』の句法に関する説明
- E … 歴史的議論
- F … 『左傳』の文章表現に関する解説

次にこれらの具体例を挙げてみよう。

まず、A…文字の校勘について。前節で述べたように、『左氏會箋』は卷子本『春秋經傳集解』を底本とし、開成石經と宋本を用いて校勘することで編まれたもので、箋には各テキスト間の文字の異同が記載されている。たとえば隱公元年の伝文「生莊公及共叔段」について「莊字、卷子本皆作庄。蓋莊之譌。庄、俗字。今從石經及宋本作莊。後皆同」と注するのがその例である。

B…訓詁の注は、たとえば隱公元年の伝文に「夫人將啓之」とあり杜注に「啓、開也」とあるのに対し、「開、猶曰導」と注するのがその例である。

C…個別の事物に関する説明は、たとえば隱公元年の伝文「公曰「姜氏欲之、焉辟害」」に対し「姜氏猶曰母氏。申生稱驪姫曰姫氏、趙盾稱適母曰君姫氏、亦其類也。女子重姓、舉姓可略其氏。母之與子、氏族必異。故呼母爲母氏。言其與己異氏也」と注するのがその例である。挙げた例では、自らの母に対する呼称として『左傳』の中にどんな表現が用いられているかを説明している。

D…『左傳』の句法に関する説明は、たとえば昭公二十年の伝文「君所謂可而有否焉」に対し「襄三十一年「心所謂危、亦以告也」、句法同。言君以爲可敷而其實則否也」と注するのがその例である。語句の用法を把握するため、他の伝文を引用して説明する帰納的な注である。

E…歴史的議論としては、たとえば莊公十五年に例が見える。箋は「方苞曰」として方苞ほうほう『春秋通論』を引き、春秋時代における「霸」の系統について述べる。

F…『左傳』の文章表現に関する解説とは、『左傳』の文章表現に価値を見出しその妙味について解き明かそうとするものである。僖公九年に見える例を一つ挙げよう。この年晋の献公が死去し、晋

国内で後継者をめぐる混乱が起こった。献公は奚斉^{けいせい}に自分の跡を継がせようと考え、死の直前に奚斉を大夫・荀息^{じゆんそく}に託した。荀息はそれに対して「臣竭其股肱之力、加之以忠貞。其濟君之靈也。不濟則以死繼之」（私は全身全霊を尽くし、さらに忠貞の心を捧げましょう。事がうまくいけば、それはわが君のご威光によるもの。もし失敗したならば死んでお詫びいたします）」と答えた。献公の死後、大夫・里克^{りこく}が奚斉を殺そうと謀り荀息を仲間に引き入れようとする、荀息は「將死之」（私は死ぬ覚悟でいるのだ）と答え、あくまで奚斉を守り通そうという意志を示した。奚斉は結局里克らに殺されるのであるが、伝文は「荀息將死之」（荀息は殉死しようとした）と記す。荀息は奚斉の弟を立てようとするもののその弟も殺され、「荀息死之」（荀息は殉死した）。さて、箋は伝文「不濟則以死繼之」に対し「死字一篇之骨」（「死」字がこの一篇の中心にある）と記す。反復して用いられる「死」字に着目し、そこに現れた荀息の覚悟について読者の注意を促すものといえよう。

以上挙げた注釈内容については、それぞれに関係する先行研究を第二章で紹介する。

三 『左氏會箋』の刊本

『會箋』には四種類の刊本が存在する。明治三十六年の明治講学会本、明治四十年の井井書屋本、明治四十四年の漢文大系本、昭和四十九年の漢文大系増補版である。

明治講学会本は初印本であり、全十五冊。扉裏には「明治卅有六季／井井書屋印行」とあり、奥付には発行者として明治講学会の名が見える。井井書屋とは竹添自らが所有していた印刷所であるらしい。明治講学会本の巻末には正誤表が付され、誤字脱字が訂正されている。

井井書屋本は補修本である。明治講学会本の誤脱を訂正し、分冊を変更して全十六冊としている。

扉裏には「明治丁未／井々書屋／重校再印」とある。明治講学会の名は見えず、同会が出版に関わったかははっきりしない。本論文では「井井書屋本」と呼称することで初印本と区別する。井井書屋本では、冒頭に竹添と親交のあった俞樾^{ゆえつ}の序が追加されている。

明治四十四年（一九一）、『會箋』は富山房漢文大系の第十・十一巻として刊行された。漢文大系収録は井井書屋本の刊行よりも遅れるのだが、底本には明治講学会本が採用されている。そのため、俞樾序が収録されていない。明治講学会本の誤脱は同書巻末の正誤表に従って訂正されているが、一部に訂正漏れがある。富山房が明治講学会本を底本に採用した理由について、長澤規矩也^{ながさわきくや}氏は「底本に竹添井々の寄贈本を用いたからであろう」と推測している〔④〕。

昭和四十九年（一九七四）の漢文大系増補版では井井書屋本に基づいて誤脱を再度訂正し、俞樾序を井井書屋本から影印して補っている〔⑤〕。また、増補版には長澤規矩也氏による「左氏會箋解題」が付されている。そもそも、漢文大系各巻には編集責任者である服部宇之吉^{はつとりうのきち}らによる解題が収録され、後に増補版が刊行された際に長澤氏による「解題補」が加えられた。ところが『會箋』にあつてはもとと解題を欠いており、増補版において長澤氏の解説を「解題」として収録したのである〔⑥〕。漢文大系が『會箋』の解題を欠いた理由について、町田三郎氏は明治末年に漢学界の最長老として健在であった竹添に対する遠慮によるものと推測している〔⑦〕。

なお、これより本論文では二種類存在する漢文大系本について、明治四十四年のものを普通本、昭和四十九年のものを増補本と呼んで区別し、必要に応じて大系本と総称することとする。『左氏會箋』の刊本は刊行順に明治講学会本、井井書屋本、普通本、増補本となる。

刊本における本文表記について述べておくと、明治講学会本と井井書屋本には読点が施されるのみ

であるが、大系本には返り点・送り仮名が付される。また、大系本には漢字カタカナ交じり文による頭注が施されている。大系本の訓点・頭注は、凡例によると服部宇之吉の指導を受けて富山房編集部が施したものである。

現在、『會箋』のテキストとして一般的に利用されているのは大系本であり、中でも増補本が最も容易に参照できる。だが筆者が考えるに、大系本を利用する際には次の二点について注意しておかねばならない。

- ・誤植が存在する。
- ・卷子本と開成石経・宋本の異同を示す小圈点が省略されている。

一点目についてだが、長澤氏によると普通本には独自の誤植があり、増補本編集時に富山房編集部が井井書屋本に基づき再校を行ったということである。だが、筆者は修正されずに残った誤植をいくつか発見している。大系本に見える箋の誤植を三つ示してみよう。引用文の傍点は筆者が付したものである。

成公十六年 伝文「文子執戈逐之」に対する箋

明治講学会本「文子受父之杖、今即教子以戈」

井井書屋本「文子受父之杖、今即教子以戈」

大系本（普通本・増補本）「文子受父之杖、今即教子以弋」

ここは伝文に見える「戈」(ほこ)を受けた注であるので「戈」字でなければならず、大系本の「弋」(いぐるみ)では意味が通じない。また、この部分は魏禧『左傳經世鈔』からの引用であり、同書も「戈」に作っている。これは、普通本で起きた誤植が増補本で訂正されなかった例である〔⑧〕。

宣公二年 伝文「趙宣子古之良大夫也。爲法受惡」に対する箋

明治講学会本「韓厥如・瑩皆以宣子爲忠、見後傳」

井井書屋本「韓厥知瑩皆以宣子爲忠、見後傳」

大系本(普通本・増補本)「韓厥如・瑩皆以宣子無忠、見後傳」

この部分は亀井昭陽『左傳續考』からの引用であり、同書は「韓厥知瑩皆以宣子爲忠」に作る。韓厥と知瑩はともに晋の正卿となった人物であるが、明治講学会本では「知瑩」の名を「如・瑩」に誤っており、これは井井書屋本で訂正されている。普通本は明治講学会本の誤植を受け継ぐのみならず、「爲忠」を「無忠」に作るという独自の誤植を起こしており、これらの誤りは増補本でも訂正されていない。

宣公十二年 伝文「軍志曰先人有奪人之心。薄之也」に対する箋

明治講学会本「…然後引詩以明戰陳當先人」

井井書屋本「…然後引詩以明戰陳當先人」

大系本(普通本・増補本)「…然後引詩以明戰陳當先人」

伝文には「詩曰」「軍志曰」とあり、それを受けた注であるので「引詩」でなければならず、大系本の「引時」では意味が通じない。ここは安井息軒『左傳輯釋』さでんしゅうしやくからの引用であり、同書も「引詩」に作る。これも、普通本で起きた誤植が増補本で訂正されなかった例である。

現時点で筆者が気づいた誤植はここに挙げた三例を含めてわずかではあるが、増補本であつてもさらに多くの誤植が残る可能性がある。

二点目の小圈点については前節で自序を引用した際に触れた。前述の通り竹添は卷子本を底本として、開成石経・宋本を用いて校勘を行っている。明治講学会本・井井書屋本にあつては、卷子本と開成石経・宋本の間に異同がある場合は経文・伝文・杜注の右横に小圈点が付され、箋において校勘の注が加えられる。卷子本と宋本以降の刊本との間に存在する大きな違いとしては、杜注の文末における「也」字の有無がある。卷子本においては杜注の文末に「也」字が記されながら、宋本以降のテキストでは見えないという例が『春秋経傳集解』の中に多数存在する「⑨」。これについては文義に関わるほどの異同ではないので小圈点の付記に止まり、校勘の注が一々記されることはない。

井井書屋本に見える小圈点の例を、文公十一年より一つ挙げてみよう。伝文の後に、杜注と箋を（ ）に入れて引用する。

謀諸侯之從於楚者也。〇（九年陳鄭及楚平。十年宋聽楚命也。〇 箋曰楚蔡次厥貉而晉爲此會、中國蓋亦懼矣。者下也字、石経宋本俱無）

伝文末尾の「也」字に小圈点を打ち、石経・宋本にはこれがないことを箋で注記している。杜注末尾の「也」字にも小圈点が付されるが、校勘の注は省略されている。

大系本の問題点は、このような小圈点が脱落していることである。大系本では何の断り書きもなしに小圈点の一切が省略されており、自序で竹添が存在を明記する小圈点がテキストのどこを開いても見つからないという奇妙な事態に陥っている。文義に関わる異同は箋で説明が行われるとはいえ、小圈点が脱落したことにより異同のある箇所が一見して分かりにくくなったことは否めない。また杜注の「也」字については、異同の有無が大系本を見るだけでは識別できなくなってしまった。普通本が小圈点を省略し増補本もそれに従った理由は明らかではないが、テキストとしての価値がこれによっていくらか損なわれたと評するべきである。

大系本には訓点・頭注が付され、上下二冊にまとめられているという利便性はあるが、誤植と小圈点の問題から考えるに、『會箋』を読む際にこれのみに依拠することは望ましくない。井井書屋本が最も信を置くに足るものであるが、現在これを見ることはなかなか難しい。所蔵している機関が少なく、筆者の知る限りデジタル化による公開なども行われていないためである。次善の手段としては、増補本を手元に置きつつ明治講学会本を参照するということになるうか。明治講学会本は国立国会図書館の近代デジタルライブラリーにて公開されており、また二〇〇八年に中国の巴蜀書社より影印本が出版されているので、比較的容易に見ることができる。本論文における『會箋』の引用には広く行われている増補本を基本的に用いるが、必要に応じて井井書屋本を参照することとした。

本節の最後に、竹添手校本『會箋』について紹介しておこう。無窮會に竹添の手校にかかる『會箋』が蔵されている。筆者が閲覧した所によれば、これは明治講学会から出版される前の最終校正段階に

あるものらしく、竹添が朱筆で誤植を訂正している。明治講学会本の正誤表は、この訂正をまとめる形で後から加えられたものである。明治講学会本では文字を一々改めることはせず、正誤表によって印刷時の誤植に対応している。手校本ではその他に、箋の一部を書き改めたり、「木下韓村先生曰」「先生曰」として竹添の師に当たる木下犀潭の説を引くなどしている。木下の説がいかなる文献から引かれているかは未詳であるが、あるいは竹添自身が取っていた講義ノートを用いたものかもしれない。手校本に書き込まれた内容だが、誤植の訂正以外が明治講学会本以降で採用されることなく、木下の説を現行の『會箋』で見えることはできない。

四 島田翰と『左氏會箋』

島田翰（しまだ かん一八七九—一九一五）は、竹添進一郎と親交のあった島田重礼（しまだ ぢようれい）の三男であり、父の遺命によって竹添に従学した。上野賢知氏（うえの けんち）によれば、『會箋』の校勘作業には島田翰が大きく関わっており、「左氏會箋の校勘學的方面の調査研究は一切島田翰が擔當したものと見て誤はない様である」という〔⑩〕。

島田の著述『古文舊書考』（こぶんきゅうしよかう民友社、一九〇五年）には、卷子本『春秋經傳集解』に関連する文章が二篇収められている。卷一「書冊裝演考」（しよさつさうえんかう）および「春秋經傳集解三十卷 卷子本」である。前者では卷子本『春秋經傳集解』の装訂について触れており、後者では件の卷子本に関する考証を行っている。後者の付記によれば、島田は竹添の命を受けて「左氏會箋提要十二篇」を草し、そのうちの二篇を『古文舊書考』に収めたのだという。残りの十篇がいかなるものかは不明。だが、『會箋』

を繙いても島田の名は一切現れない。それは、島田が足利学校の蔵書を私蔵するという事件を起こしたためである〔⑩〕。

前述の付記において島田自身が述べる所によれば、竹添は明治二十三年（一八九〇）の冬に卷子本を三度校合し、翌年に島田がその仕事を引き継いだ。「左氏會箋提要十二篇」が成ったのは明治三十三年（一九〇〇）であり、竹添は提要を『會箋』末尾に載せて島田の名を残そうとしたが、足利学校事件が起こったために取り止めとなった。その代わり、提要の一部を抜粋して自序の後に加えたのであるという。『會箋』自序の後に見える考証には『古文舊書考』と共通する内容が多く、長澤「左氏會箋解題」には「序の後に底本である金沢文庫本及び伝存するわが覆刻本ならびに宋刊本について、竹添氏の名で考証が加えられているが、これは全く島田翰が代作したもの、信じがたいところが多い」と記される。

筆者は『會箋』の稿本を調査しているが、その中に島田の名前や、彼が稿本作成に関わったことを明確に示す証拠は発見できていない。第三章で述べることになるが、稿本の一部は竹添以外の複数人が分担して書写している。島田もその仕事を行った可能性もあるものの、断定することはできない。島田の『古文舊書考』については、『會箋』の稿本を論じる際に再度取り上げる。

さて、ここで一つ極めて基本的な事柄を確認しておきたい。それは、今筆者が研究対象として取り上げている書物の名前は何かという問題である。現在一般的には『左氏會箋』と呼ばれている注釈書であるが、本来の書名は『左傳會箋』であった可能性が存在する。この書物の巻頭題は卷子本に従って「春秋經傳集解」と記されており、テキスト内部に「左氏會箋」という名は見当たらない。ところ

が、竹添の自序には「名づけて左傳會箋と曰ふ」とあり、明治講学会本の正誤表は「左傳會箋正誤」と題されている。また、遡って『會箋』の稿本を調べると、二冊本（第三章参照）の内表紙には「卷子本左傳會箋」と記されている（二冊本の書名は上野賢知氏が指摘しており、筆者も現物を確認した）。

では「左氏會箋」という名がどこにあるかといえば、明治講学会本の題簽が「左氏會箋」となっており、井井書屋本の題簽も同じである。漢文大系収録の際には、この外題を採用したものと考えられる。

書名について、上野賢知氏は「この「左氏會箋」といふ書名は島田翰氏の選定に係る者であることは、富岡謙藏氏撰の島田翰氏の墓誌（未定稿）に述べてであると云ふことである」と記している。実際に前述の『古文舊書考』には「左氏會箋提要十二篇」と表記しており、島田がこれを「左氏會箋」と呼称していたことは肯える。上野氏が伝聞の形で記している島田の墓誌がいかなるものかは未詳。二種類の書名が存在しているのはなぜか。出版直前に島田の意見を受けて「左傳會箋」から「左氏會箋」に書名を変更し、そのために自序および正誤表の表記を修正する時間がなかったのであろうか。それにしても、井井書屋本の自序でも「左傳會箋」のままとなっていることが訝しい（「左傳會箋」表記は刊本全ての自序で同じ）。

竹添と島田の間に書名に関する意向の食い違いがあった可能性も残り、『左傳會箋』と『左氏會箋』のどちらが正式な書名であるかを判断する決め手がない。本論文では、現在の一般的呼称に従って『左氏會箋』と記すこととしたい。

おわりに

本章では『左氏會箋』の概要をまとめ、刊本に関する情報を整理した。次章では本章の内容を踏まえて、『會箋』に関する先行研究を取り上げる。そしてどのような課題が残されているかを示し、筆者が明らかにせんとする問題が何かを述べる。

注

- ① 以下特に引用元を記さない限り、本節における竹添の情報は次の諸文献を参照したものである。町田三郎「明治初年の中国旅行記（その1）―竹添井井『棧雲峡雨日記』―」（町田三郎『明治の漢学者たち』研文出版、一九九八年）、岩城秀夫訳注『棧雲峡雨日記』（平凡社、二〇〇〇年）、古賀勝次郎「安井息軒を継ぐ人々（三）―島田篁村・松岡甕谷・竹添井井―」（『早稲田社会科学総合研究』第十一巻第一号、二〇一〇年）。
- ② 値賀槐南に学んだことは、竹添の弟子に当たる松崎鶴雄が記している。松崎鶴雄『柔父随筆』（座右宝刊行会、一九四三年）一七〇頁。後述するように『左氏會箋』は亀井昭陽『左傳續考』に多くを拠っているが、竹添が亀井門下の値賀より『左傳』を学んだことがその契機となった可能性がある。値賀槐南がいかなる人物であるかは未詳。
- ③ 自序の引用は明治四十年井井書屋本による。本章第三節参照。
- ④ 長澤規矩也「左氏會箋解題補」（『左氏會箋』下 富山房漢文大系増補版第十一巻、一九七四年）。
- ⑤ ただし、漢文大系増補版でも一部に齟齬序が脱落しているものがある。これは何らかの手違いによるものと考えられる。
- ⑥ より細かくいえば、長澤氏による解説が漢文大系増補版『左氏會箋』上下冊に収められ、それぞれ「左氏會箋解

題」「左氏會箋解題補」と題されている。本節の内容は同氏の解題に多くを拠っている。

⑦ 町田三郎『漢文大系』について（町田三郎『明治の漢学者たち』研文出版、一九九八年）。

⑧ 本論文付録参照。

⑨ ただし、筆者が実際に行ったのは卷子本の一部と阮元本の照合であり、諸々の宋本は未見。第三章第四節参照。

⑩ 上野賢知「左氏會箋三稿」（『斯文』第十四号、一九五六年）。

⑪ この事件の経緯は、河野静子「小伝鬼才の書誌学者島田翰」（河野静子『続蘇峰とその時代』徳富蘇峰記念館、

一九九八年）に詳しい。

第二章 『左氏會箋』に関する先行研究

はじめに

本章では、『左氏會箋』に関する先行研究の成果をまとめ、残された課題について示すものとする。序で述べたように『左氏會箋』に対する研究は進んでいるとは言いがたく、同書を取り上げて論じた研究者の数はそれほど多くはない。筆者が確認しえた研究者とその論考について、以下に列挙しておきたい。

○上野賢知

- ・「左氏會箋三稿」(『斯文』第十四号、一九五六年。のち、左記『春秋左氏伝雑考』に収録)
- ・「左氏會箋引用書目」(上野賢知『日本左傳研究著述表并分類目録』東洋文化研究所、一九五七年)

- ・「左氏會箋」引用書について」(上野賢知『春秋左氏伝雑考』東洋文化研究所、一九五九年)

○宇野精一

- ・「左氏會箋三稿」に関する補遺」(『斯文』第十五号、一九五六年)

○李維棻

- ・「竹添光鴻左傳會箋論評」(『大陸雜誌』第二十六卷第十期、一九六三年)

○田宗堯

- ・「讀左傳會箋札記」(『孔孟學報』第九期、一九六五年)

○長澤規矩也

- ・「左氏會箋解題」「左氏會箋解題補」(それぞれ、『左氏會箋』上・下 富山房漢文大系増補版第十・十一卷、一九七四年)

○岡村繁

- ・「竹添井井の『左氏會箋』が剽窃した一つの種本」(『漢語漢文の世界Ⅱ』溪水社、一九八四年)

○柳本實

- ・「『左氏會箋』と『左伝續考』について」(『東方』五十八号、一九八六年)

○林慶彰

- ・林慶彰著、藤井倫明訳「竹添光鴻『左傳會箋』の經典解釈方法」(張寶三、楊儒賓編『日本漢学研究初探』勉誠出版、二〇〇二年)

○孫赫男

- 『《左氏會箋》研究』（光明日報出版社、二〇一一年）
- 『《左氏會箋》「求同存異」方法義例——以隱公元年為主』（《牡丹江師範學院學報（哲學社會科學版）》二〇〇三年六期）——a
- 『《左氏會箋》的校勘特點』（《北方論叢》二〇〇五年一期）——b
- 「掇其精粹 訂補申說——《左氏會箋》影響《春秋左傳注》的幾種方式」（『學習與探索』二〇〇五年三期）——c
- 『《左氏會箋》校讎特點芻議』（《齊齊哈爾大學學報（哲學社會科學版）》二〇〇六年一期）——d
- 『《左氏會箋》訓詁述語淺積』（《牡丹江師範學院學報（哲學社會科學版）》二〇〇六年一期）——e
- 「再論《左傳會箋》影響《春秋左傳注》的幾種方式」（『社會科學輯刊』二〇〇六年一期）——f
- 『《左氏會箋》文字訓詁論略』（《佳木斯大學社會科學學報》二〇〇六年二期）——g
- 「上野賢知《左氏會箋》三稿》發墨」（《遼寧大學學報（哲學社會科學版）》二〇〇六年三期）——h
- 「竹添光鴻《左氏會箋》研究述要」（《北京大學學報（哲學社會科學版）》二〇〇六年三期）——i
- 「竹添光鴻《左氏會箋》與清代考據學關係考述」（『學術交流』二〇〇九年四期）——j
- 「會而通之——《左氏會箋》注疏特點芻議」（《佳木斯大學社會科學學報》二〇〇九年六期）——k
- 『《左氏會箋》述例』（《牡丹江大學學報》二〇一〇年一期）——l
- 「竹添光鴻《左氏會箋》義例淺積」（《重慶文理學院學報（社會科學版）》二〇一〇年四期）——m
- 「竹添光鴻《左氏會箋》的歷史觀淺積」（《甘肅社會科學》二〇一〇年六期）——n

- ・「竹添光鴻『左氏会箋』史学思想述論」(『社会科学戦線』二〇一一年七期)――。
- ・「日本明治時期『左伝』学及其特征――以『左伝輯釈』与『左氏会箋』对比研究为中心」(『北方論叢』二〇一二年一期)――p

本章では、孫赫男氏については著書を除いた論文にアルファベットを付して区別する。

一 注釈の内容に関する先行研究

まずは、『左氏會箋』の注釈内容に関する先行研究を取り上げてみたい。便宜のため第一章第二節で示した注釈内容の分類を再度掲げ、その上で各注釈内容に関する先行研究を簡潔にまとめる。

- A … 文字の校勘
- B … 訓詁の注
- C … 個別の事物(地理・人物・名物・典礼制度)に関する説明
- D … 『左傳』の句法に関する説明
- E … 歴史的議論
- F … 『左傳』の文章表現に関する解説
- A … 文字の校勘。このような注の特徴については李維棻、林慶彰、孫赫男(b、d)各氏が言及し

ており、林慶彰氏は『會箋』に見える校勘の成果を「(一) 各本の異同を明記する」「(二) 古今に正字・俗字の有ることを明記する」「(三) 宋本の誤字を明記する」「(四) 石経の誤字を明記する」「(五) 卷子本が他本よりも優れていることを証明する」「(六) 卷子本の闕誤を明記する」とまとめている。

B…訓詁の注。これについては孫赫男氏(e, g)が詳しく論じており、竹添が「讀如」「某某反」「之言」など伝統的な訓詁のタームを大量に取り入れて活用するとともに、清朝考証学の影響を受け、既存の小学のタームを新しく訓詁のタームとして転用しているという指摘を行っている。

C…個別の事物に関する説明。これについては、林慶彰氏が「竹添氏は、清人の学風の影響の下、文字校勘を重視し、杜預の誤りを補正し、山川地理や法令制度の方面についても詳しい解釈を施した。(中略) 彼が関心を注いだ方面はかなり広範囲に渡っているのだが、仔細に分析してみると、竹添氏は『左伝』中の各種の法令制度を特に重要視していたことが分かる」と述べ、その具体例をいくつか挙げている。

D…『左傳』の句法に関する説明。これについてはあまり研究が進んでおらず、李維棻氏が例をいくつか拾い出している程度である。

E…歴史的議論。これについては孫赫男氏(n, o)が言及している。孫氏によれば、『左傳』には君よりも民を重んずる民本思想や、迷信に反対し人間性を重視する思想などが見られる。『會箋』は『左傳』のそのような思想を宣揚しており、そこに竹添が持つ進歩的な歴史観が反映されていると述べている。

F…『左傳』の文章表現に関する解説。これについては、これまでほとんど注目されてこなかった。言及が皆無というわけではなく、たとえば李維棻氏は竹添が『左傳』の文章に対し論評を加える例を

挙げている。だがそれもまだ断片的な指摘に止まっており、この問題について詳細に論じた先行研究は存在しない。

『會箋』の注釈内容として筆者が最も注目しているのは、F…『左傳』の文章表現に関する解説である。序で述べたように、『左傳』自体が經学・史学・文学といった方面の内容を有する書物であって、その注釈も經学（小学も含む）、史学、文学各方面からのアプローチが行われてきた。『左傳』の文章表現に価値を見出してその妙味を解説し、ひいては『左傳』を作文の手本として読者の前に供せんとする。これが『左傳』注釈の一つの大きな流れとして確かに存在していたのである〔①〕。本論文の次章以下において、このような箋をさらに具体的に取り上げ、検討を加えてみたい。

二 先行注釈との関係に関する先行研究

前章までに述べてきたように、『會箋』は先行する『左傳』注釈書を広く取り入れて編まれた。そこで、『會箋』と先行注釈の関係を論じた先行研究についてもまとめておきたい。

まずは杜注と『會箋』について論じた研究を取り上げる。『會箋』の体裁は、初めに竹添の自序・考証と総論があり、続いて杜預^{どよ}の「春秋左氏傳序」が置かれる。『左傳』の經文と伝文には杜預の注が付けられ、その後で竹添が「箋曰」として自らの注を記すという形になっている。なぜこのような形式が採用されたのであろうか。この問題については、林慶彰氏が次のように述べている。

竹添氏が杜注を基盤として『會箋』を作ったのは、杜注そのものが優れていたということもあ

るが、それ以外に、一つは彼が用いて底本とした隋・唐間鈔の卷子本が杜注であり、これが非常にな完璧な形の古鈔本であったため、杜注を用いない理由がなかったこと、もう一つは竹添氏も、清代の漢学風靡の影響を受け、古注を重んじたことによると思われる。(中略)しかし、竹添氏が杜注を基盤として『会箋』を作ったと言っても、彼は決して「疏は注を破らず」という前人の暗黙の規定を墨守することはなかった。彼は杜注の過誤や種々の不備に対しては、一々それを指摘し、弁証を加えた。ここには彼の一家を墨守しない、实事求是の精神が充分に表明されていると言えよう。

林氏によれば、漢学を崇拜する清朝考証学の気風に影響され、それが竹添に杜注を基盤とした注釈を編ませることになったのである。

『會箋』に見える注釈内容のいくつかについては、「杜注をいかに補正しているか」という観点から研究を行うことができ、たとえば孫赫男氏は訓詁についてそれを行っている。だが、『左傳』の文章表現に関する解説については、杜預が言及しない事柄に箋が触れるという例がほとんどである。文章表現に関する解説と呼ぶべきものは杜注にはほとんど見られず、杜預よりも後に起こった文章表現解説の流れを『會箋』は受け継いでいるのである。では『會箋』に見えるこのような注のうち、どれほどが竹添独自のものであり、どれほどが杜注以降の先行注釈に由来するものなのか。竹添が具体的にどのような注釈を取り入れたのかという問題を検討しなければならない。

第一章第一節で引用した『會箋』自序より、竹添が参照したと明言する先行注釈者を再度挙げてみよう。

皇朝に在りては則ち中井氏積徳・増島氏固・太田氏元貞・古賀氏煜・龜井氏昱・安井氏衡・海保氏元備、皆な定説有り。而して龜井氏最も詳備爲り。清に在りては則ち顧氏炎武・魏氏禧・萬氏斯同・萬氏斯大・王氏夫之・毛氏奇齡・惠氏棟・馬氏宗璉・趙氏佑・焦氏循・江氏永・顧氏棟高・雷氏學淇・方氏苞・洪氏亮吉・梁氏履繩・崔氏述・朱氏元英・段氏玉裁・王氏念孫及び引之・姜氏炳璋・阮氏元・沈氏欽韓・錢氏錡・姚氏鼐・張氏自超・高氏澍然・俞氏樾。

ここに名が見える先行注釈者は日本人七名・中国人二十九名に及び、それ以外にも「古今の諸家の論説の左氏に渉る者」の説を広く取り入れたと竹添は述べている。

自序では具体的な書名が挙げられておらず、竹添は箋で先行注釈を引用する際にも氏名のみ記して書名を省くことが多い。書名そのものの情報は、『會箋』の中でほとんど欠落しているのである。この問題については上野賢知氏が『會箋』を詳しく調査し、「左氏會箋引用書目」を残している。この書目は、箋が「何某曰」として引用する注釈書について、氏名に書名を加えて列挙したものである。書名は上野氏が一々調査して突き止めたものであって、次節で紹介する『左氏會箋溯源』のいわば副産物としてできた書目であろう。その冒頭を引用してみよう。

皇清經解

顧炎武 左伝杜解補正

日知録

閻若璩 四書釈地

潜邱劄記

胡渭 禹貢錐指

万斯大 学春秋随筆

……

このように、『會箋』および先行注釈書のどこに該当部分が見えるかまでは記しておらず、情報は氏名と書名のみである。同書目より自序が記す注釈者に関わる箇所を抜き出し、自序で挙げられる順序に合わせて引用してみよう。引用に当たり、人名に号を加えるなどの手直しを行っている。

中井 積徳（履軒）『左傳雕題略』〔②〕

増島 固（蘭園）『讀左筆記』

大田 元貞（錦城）『左氏傳杜解糾謬』

古賀 煜（侗庵）『左氏探賾』

亀井 昱（昭陽）『左傳續考』

安井 衡（息軒）『左傳輯釋』

海保 元備（漁村）上野は書名を挙げない。

顧炎武 『左傳杜解補正』・『日知録』

- 魏禧 『魏叔子文集外篇』・『左傳經世鈔』
- 万斯同 『勝說』・『群書弁疑』卷一・『讀儀礼』二
- 万斯大 『學春秋隨筆』
- 王夫之 『春秋稗疏』
- 毛奇齡 『春秋毛氏傳』・『經問』・『西河合集』・『竟山樂錄』
- 惠棟 『春秋左傳補注』
- 馬宗璉 上野は書名を挙げない。
- 趙佑 『春秋三傳雜案』・『讀春秋存稿』
- 焦循 『春秋左傳補疏』
- 江永 『春秋地理考實』・『群經補義』
- 顧棟高 『春秋大事表』
- 雷学洪 『介菴經說』
- 方苞 『左傳義法舉要』・『春秋通論』・『春秋直解』
- 洪亮吉 『洪北江詩文集』・『更生齋文甲集』・『卷施閣文甲集』・『曉讀書齋雜錄』
- 梁履繩 『左通補釋』
- 崔述 『崔東壁先生遺書』
- 朱元英 『左傳博義拾遺』
- 段玉裁 『經韵樓集』・『春秋左氏傳五十凡』
- 王引之 『經義述聞』・『經傳釋詞』

姜炳璋 『讀左補義』

阮元 『春秋左氏傳注疏校勘記』

沈欽韓 『春秋左氏傳補注』

錢錡 上野は書名を挙げない。

姚鼐 『左傳補注』

張自超 『春秋宗朱弁義』

高澍然 上野は書名を挙げない。

俞樾 『群經平議』・『第一樓叢書』・『曲園雜纂』

これ以外に、自序で触られない注釈者についても上野は多くの書名を挙げている。日本人の著作のみ取り上げておこう。

豬飼彦博（敬所）『西河折妄』

松崎復（慊堂）『左氏經傳校譌』

吉田漢宦（篁墩）『近聞寓筆』

山本信有（北山）『左傳杜解駁義』

近藤元粹（南洲）『増註春秋左氏傳校本』

伊藤馨（鳳山）『左傳章句文字』

自序で氏名が言及されるにも関わらず上野氏が書名を挙げていない例があるのは、箋の中にはその氏名が見えないためであろう。上野賢知「『左氏会箋』引用書について」では馬宗璉『春秋左傳補註』の名を挙げ、また未見としながらも海保元備『左傳補證』『左傳正義校勘記補正』『杜氏春秋義』『漁村書入春秋左氏傳』を挙げている。自序で言及されないものを含めると、この書目に挙げられる注釈書は中国八十八家百五部、日本十二家十二部に上る。上野氏は竹添が孫引きをしたと考えられる注釈書についても名を挙げているが、書目からそのような例を除いて数えると、上記の百五部、十二部という数字が出る。

上野氏の書目を利用すれば、竹添が氏名を明記して引用した注釈に関する限りは、その出処まで辿って調べる程度は可能になるだろう。ところが実際に箋を調べてみると、竹添が氏名をも記さないまま先人の注を引用する例がしばしば見える。このことは上野賢知「左氏會箋三稿」・李維棻・長澤規矩也・岡村繁・柳本實・林慶彰・孫赫男(h・i)各氏が等しく指摘するところである。李維棻氏や岡村繁氏はそのような竹添の姿勢を批判しているが、岡村氏のそれは特に手厳しい。

岡村氏は『左傳續考』解説(『亀井南冥昭陽全集』第三卷 葦書房、一九七八年)の中で、竹添が亀井昭陽の『左傳續考』を盗用して自説のように注解した箇所は枚挙に暇がないと述べている。また、岡村氏は「竹添井井の『左氏會箋』が剽窃した一つの種本」で、亀井南冥の『左傳考義』と『會箋』の関係について論じている。亀井昭陽は父・南冥の『左傳考義』を継承して『左傳續考』を撰述したものであり、『左傳續考』には割注の形で『左傳考義』が引用される。岡村氏によれば『左傳續考』に見える『左傳考義』引文と『左傳考義』そのものの伝本には字句の異同が多い。同氏はその違いを利用することで竹添が『左傳續考』から『左傳考義』を孫引きしたことを明らかにし、孫引

きの例を隠公・桓公より五十余条挙げている。岡村氏は、「このように『左氏会箋』の注解の由つて来たところを一一丹念に洗い出してゆくと、著者竹添が前人の美を掠めて自説とした箇所は相当な分量に上るようである」と述べ、竹添の自序を引用した上でさらに批判を加えている。第一章第一節で引用した自序であるが、岡村氏の書き下しに従い再度掲げておこう。

夫れ經は道を載する所以なり。道は人心の同然なる所に原もとづく。然らば則ち他人の經を説いて我が心を獲し者、道の斯に在ること知る可きなり矣。同然なる所の心を以て、同然なる所の道を求むれば、何ぞ必ずしも彼我の別を其の間に容れんや。衆説を集めて之れを折衷するは、要するに經旨を闡明するに在り。杜朱二家の經を解するの法は、尤も其の道を求むるの誠、而して心を乗るの公を見るなり。若し夫れ博きを誇り新しきを銜ひて、栩栩として自ら喜ぶ者は、固より與に議するに足らず。人の美を掠むるを以て嫌と爲すに至つては、則ち猶ほ淺丈夫の心なるかな。

(傍点岡村氏)

竹添の言説に対する岡村氏の批判は次のようなものである。

なんと大袈裟で、くどくどしい著者の自己弁護であることか。衆説を集めて之れを折衷する目的は、要するに經旨を闡明することに在るのだから、他人の学説に自分が共鳴した以上、彼我の別を明らかにする必要はないし、他人の美を剽掠したとする非難などは取るにも足らぬ小人のたわごとだ、と著者井井はいう。しかし、この井井の論理は、どう考えてもすこぶる乱暴であり

武断であつて、『左伝』という経書の学問的な研究を、その宗教的な求道精神の実践とすり替えた暴論というほかはない。思うに、井井は、経旨聖道の宗教的究明を隠れ蓑にして、『会箋』編述の際における前人学説の頻繁な剽掠の事実を強引に正当化し、予想される将来の批判に対して前もって口封じをしておこうと意図したのではなかったろうか。

柳本實氏は岡村氏の論考を引いてその妥当性を認めつつも、竹添が引用に際して行つた工夫を指摘している。亀井昭陽の『左傳續考』は注文の中に割注を多く混じえており、『左傳考義』の文も割注の形で引用されている。また、『左傳續考』は初稿脱稿後の補訂のために叙述の順序が混乱している。柳本氏によれば、竹添は『左傳續考』の文に多少の加除増減を加えつつも忠実に、なおかつ『左傳續考』そのものよりも分かりやすくなるように引用しているのであり、「このように「續考」の文を、己の意をもつて融会貫通させた「会箋」の箋文に「亀井昱曰」を冠すべきか否か、井井も迷つたであろうが、結局省略してしまつたのである」という。

また林慶彰氏は、李維棻氏と岡村繁氏の論考に言及した上で次のように述べる。

竹添氏は、「左伝会箋自序」の中で、彼の書が杜預の『集解』及び朱子の『集注』の体裁に倣つたものであり、「而して其の議論は大義を發揮し、其の考據は獨得に出づる者は、特に名氏を擧げて以て之を表異するも、亦朱子『集注』圈外の例に仿うなり。」と述べている。これはつまり、引用した諸説のうち、能く大義を發揮し、その考據も独自のものであるような説であつて、はじめて名前を掲げるといふことであり、もしそれが一般的な議論、或いは普通の常識程度の問題で

あるならば、必ずしも名前を標榜するようなことはしないということである。前文のように李維棻と岡村繁の両氏は、竹添氏の剽窃を認めているけれども、竹添氏の理解では、必ずしも名前を表記するには及ばないということであつたのかもしれない。この点、あるいは竹添氏と後代の学者との間に、認識上の食い違いがあつたのかもしれない。

以上のように、出処を明記しない竹添の態度に対する理解は論者ごとに差異がある。柳本氏の意見は『左傳續考』からの引用に限ってはある程度の説得力を持つが、箋がそれ以外の注釈もしばしば出処を記さずに引用している理由を説明していない。たとえば、次のような例はどうだろうか。昭公元年の伝文「請瑱聽命」に対して、箋は「去廟爲祧。去祧爲壇。去壇爲瑱。昏禮壻受婦於廟、子産不欲圍入城、欲除地擬豐氏之廟、以令行昏禮。故云請瑱聽命也。瑱音善」という。これは、最後の音注三文字を除き、安井息軒『左傳輯釋』の注文を、何の手も加えずそのまま引き写したものである。少なくともこの例に関しては、竹添が引用に当たって工夫をこらしたと認めることはできない。音注がオリジナルであることを示したいのならば、たとえば「箋曰、瑱音善。安井衡曰、去廟爲祧。去祧爲壇。去壇爲瑱。昏禮壻受婦於廟、子産不欲圍入城、欲除地擬豐氏之廟、以令行昏禮。故云請瑱聽命也」とすることもできたはずである。柳本氏の理解は、箋全体に適用させることはできない。林慶彰氏は、氏名を挙げるか否かの基準が自序で示されているとするのであるが、筆者の考えるところでは竹添が出処を記さず引用する注の中にも「一般的な議論」あるいは「普通の常識程度の問題」とはとも見なせない独自の説がしばしばあり、自序で述べられる基準が箋全体で貫徹されているとは思えない。たとえば、次のような例はどうだろうか。成公十六年、晋と楚の間で行われた

鄢陵^{えんりよう}の戦いの場面である。開戦に先立ち、楚王が晋軍を遠望し伯州犁^{はくしゅうり}に問いを發する。

楚子登巢車、以望晋軍。子重使大宰伯州犁侍于王後。

王曰「騁而左右、何也」。

曰「召軍吏也」。

（皆聚於中軍矣）

曰「合謀也」。

（張幕矣）

曰「虔卜於先君也」。

（徹幕矣）

曰「將發命也」。

（甚囂、且塵上矣）

曰「將塞井夷竈而爲行也」。

（皆乘矣、左右執兵而下矣）

曰「聽誓也」。

「戰乎」。

曰「未可知也」。

「乘而左右皆下矣」。

曰「戰禱也」。

引用文中の（ ）で括った部分について、楚王の台詞とする説と地の文と見なす説とがある。宋の林堯叟は「皆聚於中軍矣」に「王又問、今皆聚會於中軍何也」と注し、これ以降の（ ）もすべて王の問いと見なしている〔③〕。また、安井息軒『左傳輯釋』も「皆聚於中軍矣」に「王問也。下放此」と注している〔④〕。一方、中井履軒『左傳雕題略』は「聚中軍」「張幕」「徹幕」「甚囂」「皆乘」「皆下」、並是敘事矣。非問辭。唯「聘而左右何也」及「戰乎」二語、爲王之問辭而已。林註有謬解、故詳焉」と注し〔⑤〕、林堯叟に反駁して（ ）の部分在地の文であると主張する。また、増島蘭園『讀左筆記』は次の通り『左傳雕題略』をほぼそのまま引用する。「皆聚中軍矣」「張幕矣」「徹幕矣」「甚囂且塵上矣」「皆乘」「左右執兵而下」、皆是敘事。但「張而左右何也」及「戰乎」二語、王問之之辭。中間數語皆省之。林皆以爲問辭、誤甚」〔⑥〕。これらの伝文について、林堯叟・安井は台詞説、中井・増島は地の文説である。

この部分における竹添の箋は次の通り。「聚中軍」「張幕」「徹幕」「甚囂」「皆乘」「皆下」、並是敘事。非問辭。唯「聘而左右何也」及「戰乎」二語、爲王之問辭。中間數語皆省之」〔⑦〕。これは中井と増島の説を引用したものと考えられるが〔⑧〕、竹添は中井の名も増島の名も記していない。方向性が似通ったいくつかの注から一つを選ぶならばともかく、ここで竹添は対立する説が存在する中であえてその一方を選んでいるのである。これは「普通の常識程度の問題」で済まされるものではない。ろう。林慶彰氏の理解も、全面的に納得できるものではない。

結局、竹添がいかなる基準によって出処明記の有無を決定したかを知るには、『會箋』全体に渡って竹添が依拠した出処を調査しなければならない。その上で、帰納的に結論を導く必要がある。筆者は上野賢知氏の研究に基づき出処の一部を明らかにしているが、『會箋』全体の調査には及んでいな

い。全体の調査については今後の課題として残し、本論文では以上のように先行研究の問題点を指摘するのみに止めておく。

出処を明記しない竹添の姿勢に対して評価を下すのは、上述の調査を終えて初めてできることであると筆者は考える。本論文では、竹添の姿勢について何らかの評価を下すことはしない。竹添がいかなる先行注釈からどのような注を引用し、いかに手を加えて自らの注釈を作っているかという問題に絞って論を進めてみたい。

三 上野賢知の『左氏會箋』研究

筆者はこれまで上野賢知氏による先行研究をしばしば引用してきた。上野氏は『左氏會箋』のみならず日本の『左傳』注釈書に関わる重要な論考を残しており、筆者の研究は同氏の研究に多くを拠っている。本節では、上野氏とその研究についてまとめて紹介する。

上野賢知氏は明治十七年（一八八四）生。広島高等師範学校教諭・長岡女子師範学校教諭を経、昭和二年（一九二七）より武蔵高等学校教授。同年には無窮會東洋文化研究所の講師となり、その後同会の理事などを務める。昭和三十四年（一九五九）没。

上野氏は日本における『左傳』受容と春秋学に関する研究を行い、その成果は『日本左傳研究著述年表並分類目録』（東洋文化研究所、昭和三十二年。以下、『年表』）と『春秋左氏伝雑考』（同、昭和三十四年。以下、『雑考』）にまとめられている。『年表』には奈良初期より昭和に至るまでの『左傳』研究と著述を追った「左傳研究著述年表」と、各著述を分類整理した「左傳分類目録」が収録される。『雑考』は江戸・明治における『左傳』関係著述とその撰者に関する解説を主とする。同氏の

残した論考はそれほど多くはなく、『年表』は百頁余り、『雑考』は二百頁余りの小冊子である。

上野氏の『會箋』研究としては、前節で引用した「左氏會箋引用書目」(『年表』)の他、「左氏會箋三稿」「左氏會箋引用書について」(ともに『雑考』)がある。「左氏會箋三稿」では『會箋』著述の目的について指摘し、『會箋』の稿本に関する調査結果を記している。「左氏會箋引用書について」では竹添が『會箋』自序で挙げる注釈者にどのような著述があるかを調査するとともに、いくつかの箋についてその出処を論じている。

前節末尾において、『會箋』全体の出処調査が必要である旨を述べたが、実はこの仕事は上野氏がすでに行っている。上野氏は『會箋』以前における『左傳』注釈書を調査し、『會箋』の出処を逐一突き止めるといふ気の遠くなるような作業を成し遂げたのである。同氏はその結果を『會箋』刊本の中に書き込み、『左氏會箋溯源』(以下、『溯源』と名付けた。残念ながらこれが公表されることはなく、上野氏が理事を務めた無窮會に保管されたままとなっている。

『溯源』については、原田種成氏が書き込みを数例挙げて紹介したことがあり^{〔9〕}、平勢隆郎氏がその内容のごく一部を画像データに再現しウェブサイト上で公開しているが^{〔10〕}、詳細に取り上げられたことはなく、その存在はあまり知られていない。孫赫男氏が『溯源』についても言及しているが⁽ⁱ⁾、実物を見たことはないようである。

筆者は無窮會に赴き『溯源』の調査を行った。使用されているのは明治講学会本で、朱筆と藍筆により括弧を付し(朱と藍をどのように使い分けているかは不明)、竹添が依拠した先行注釈をその都度書き込んでいる。注釈者の名のみ記することが多いが、所々に書名も加えている。例を一つ挙げてみよう。桓公二年伝文「召莊公于鄭而立之、以親鄭」に対する箋に、上野氏は以下の通り括弧と書き込みを加

えている。

亀井

箋曰「傳提親鄭二字、以見諸侯之畏莊公也」「馮入宋不書、杜云不告、非也、公親與其事、何必

待告」姜氏補義

このようにして、括弧の中それぞれが亀井昭陽『左傳續考』と姜炳璋『讀左補義』からの引用であることを示している。

その他に上野氏は、第一章第三節で言及した竹添手校本『會箋』に基づいて明治講学会本の誤植を訂正し、また木下犀潭の説などを書き写している。竹添手校本に拠ることは『溯源』第一冊目の巻末に上野氏自身が述べる所であるが、この点に関してはこれまで指摘されることがないようである。

『溯源』の各巻末に残された日付を見るに、上野氏は一九五一年から一九五二年にかけて書き込みを行ったようだが、それ以前に出処調査のために膨大な時間が費やされたと思われる。『會箋』研究に大きく寄与するはずの労作が、六十年以上も公表されずに保管されたままであるのは、はなはだ残念なことといわねばならない。筆者は『溯源』に基づき、『會箋』の一部について出処調査を行っている。本論文の付録は、その成果である。

以上の研究の他、上野氏には自筆の『春秋左氏傳序解義』があり、『東洋文化』に増島蘭園『讀左筆記』の校勘を連載したということだが、筆者はともに未見である。

上野氏が残した研究の重要性は、『會箋』全体の出処調査を行ったということの他に、『會箋』の稿本を調査して成書までの過程を大まかにではあるが示したということにある。上野氏の「左氏會箋三稿」は、『會箋』稿本を取り上げた唯一の先行研究である。だがその内容はいまだ簡略なものであ

って、稿本により詳しい検討が望まれる。次章以下において、それを行ってみたい。

おわりに

本章では、先行研究で論じられてきた問題を取り上げ、筆者自身が明らかにしようとする問題を提示した。それは、『會箋』がいかにも『左傳』の文章表現を解説しているかという問題である。『會箋』は膨大な先行注釈を取り入れており、注釈内容を論じるためには注の出処を逐一突き止めなければならない。筆者はその作業を、上野賢知氏の『左氏會箋溯源』を参照することである程度は行っているが、『會箋』全体の調査にはまだ時間がかかる。そこで本論文では、『會箋』成本に見える個別の注を検討する前に、竹添が『會箋』を完成させるまでの経緯を時間的に辿ってみたい。

第三章・第四章では『會箋』稿本について主に論じ、稿本から成本に至るまでの過程を明らかにする。

注

① 李衛軍『《左傳》評点研究』（中国社会科学出版社、二〇一四年）には、『左傳』の文章表現の解説書としての性格を持つ明清期の評注書に関する情報がまとめられている。

② 上野書目には「左傳雕題」とある。中井履軒の『左傳雕題』は『左傳』刊本への書き入れの形で残された注釈であり、その要点を摘録することで『左傳雕題略』が編まれた。中井の『左傳』注釈として刊行されたものは『左傳

『左傳雕題略』であり、竹添は『左傳雕題略』を引用している。『左傳雕題』と『左傳雕題略』については古賀芳枝「中井履軒『春秋左氏伝』関連諸本の考察」（『懷徳』第六六号、一九九八年）参照。また、竹添が『左傳雕題略』を引用することについては井上了「中井履軒の『春秋』観」（『懷徳』第七三号、二〇〇五年）参照。

③ 林堯叟の注は奥田元繼『春秋左氏傳評林』（寛政五年有文堂）に拠った。同書は、上野賢知『春秋左氏伝雑考』六十一頁によれば林注の完本である。

④ 『左傳輯釋』の引用は明治十六年山中出版舎本による。

⑤ 『左傳雕題略』の引用は弘化三年廓然堂蔵版による。

⑥ 『讀左筆記』の引用は崇文叢書第二輯所収本（一九二七〜一九二八年）による。

⑦ 野間文史氏がこの場面を取り上げ、竹添が安井息軒とは異なる解釈をしたことに言及している。ただし、竹添の注が中井履軒と増島蘭園を引用したものであることには触れていない（『春秋左氏伝 その構成と基軸』研文出版、二〇一〇年 十四頁）。

⑧ 本論文付録の該当箇所を参照。

⑨ 原田種成「知られざる左伝の研究書」（『新釈漢文大系季報』五十三 明治書院、一九七七年）。

⑩ 「江戸・明・古代プロジェクト」<http://kande0.ioc.u-tokyo.ac.jp/kande/hirase/>

第三章 『左氏會箋』の稿本

はじめに

『左氏會箋』には稿本が五種現存しており、せい静嘉堂文庫に四種、とう東京都立図書館もろはし諸橋文庫に一種蔵される。これらの稿本については半世紀前に上野賢知氏が紹介しているが、研究対象として取り上げられることはそれ以降久しくなかった。本章では、筆者が行った稿本調査に基づき、これらの稿本が残された経緯とその作成順序について明らかにする。あわせて、稿が進むにつれてその内容がいかに変遷していったか、その具体例を示してみたい。

一 稿本が残された経緯

静嘉堂文庫の稿本について、『静嘉堂文庫漢籍分類目録續』（一九五一年）に見える記載は次の通りである

・春秋左傳補解不分卷（左氏會箋第一稿本）

竹添光鴻撰 寫（二十五冊）

・春秋左傳補解八卷（以下缺）（稿本）

竹添光鴻撰 寫（八冊）

・春秋經傳集解存卷一・二（稿本）

竹添光鴻撰 寫（二冊）

・左傳集說一五卷（卷二・五・八・九・一〇・一三・一五缺）

（稿本）竹添光鴻撰 寫（七冊）

説明の便宜のため、以上の稿本をそれぞれ「二十五冊本」「八冊本」「二冊本」「集說」と称すること
としたい。東京都立図書館諸橋文庫には三十一冊の稿本が蔵される。『東京都立日比谷図書館蔵諸橋
文庫目録』（一九六二年）では「春秋經傳集解三〇卷首一卷」の書名で取られ、「清原俊隆書写本の
転写に竹添井々が会箋を付したもの」と注記される。これは「三十一冊本」と称することとする。
静嘉堂文庫の稿本に比べ都立図書館諸橋文庫の三十一冊本は残された経緯が明確であるので、まず
はこちらから取り上げてみたい。

諸橋文庫には諸橋轍次もろはしつぐの旧蔵書約二万冊が収められている。戦時中、東京都が民間から買い上げ
疎開させた戦時特別買上図書の一つである。『東京都立日比谷図書館蔵諸橋文庫目録』に諸橋自身が
記す所によれば、昭和二十年の初夏に日比谷図書館より打診を受け、「百國春秋樓藏書」以外の蔵書
を譲渡したという。この日比谷図書館の後身が東京都立図書館である。「百國春秋樓藏書」なるもの
は後に静嘉堂文庫に収めたと諸橋は述べるが、これについては後述する。諸橋文庫には、『左氏會箋』
とあわせて「三會箋」と総称される『毛詩會箋』『論語會箋』の竹添自筆稿本も収められている。諸
橋はどのような経緯で三會箋の稿本を入手したのであろうか。

諸橋は三會箋との関わりを回想録や対談の中で述べている〔①〕。それによると、彼は東京高等師範

学校在任中の大正初年、同校校長の嘉納治五郎かのうじごろうより話をもちかけられ、『毛詩會箋』の校訂に従事した。この時期『左氏會箋』はすでに出版されていたが、残る『毛詩會箋』『論語會箋』の整理に当たる人物の周旋を、竹添は娘婿の嘉納に依頼していたのである。諸橋による校訂を経、『毛詩會箋』は大正九年（一九二〇）より刊行されている。諸橋は『論語會箋』の校訂も行っており、これは昭和五年（一九三〇）に刊行が始まっている。『左氏會箋』の稿本（三十一冊本）をどのように入手したか諸橋自身ははっきりと述べてはいないが、『毛詩會箋』『論語會箋』校訂の仕事を引き受けたことが縁となり、『左氏會箋』稿本も竹添から譲られたのであろう。諸橋は竹添の没後も嘉納を通じてその家族と連絡を持っていたので、竹添本人ではなく遺族から譲られた可能性もある。

上野賢知氏は『日本左傳研究著述年表並分類目録』で「左氏會箋の第一稿本とも言ふべき春秋左伝補解二十五冊は静嘉堂文庫の蔵する所、その完稿と言ふべき左氏會箋の最後の原稿は諸橋轍次博士の蔵する所である」と述べる〔②〕が、この「最後の原稿」とは諸橋文庫の三十一冊本を指していると考えられる。上野著書の刊行は昭和三十二年であり、この時点で稿本はすでに諸橋の手を離れていたはずだが、日比谷図書館に譲渡されたという情報が上野氏には伝わっていなかったであろう。上野氏は後述するように静嘉堂文庫の稿本について論じているのだが、諸橋文庫の稿本についてこれ以上触れてはいない。諸橋文庫の三十一冊本について具体的に取り上げるのは、管見の限りでは筆者が初めてである。

次に、静嘉堂文庫の稿本が残された経緯について述べよう。静嘉堂文庫には竹添の旧蔵書が収められており、それらは静嘉堂文庫の主要な収書の一つである。竹添は生前に蔵書を松方正義まつかたまさよしに売却しているが、高野静子氏によればそれは一九〇三年十二月以前のことであるという〔③〕。松方はその

後竹添旧蔵書を静嘉堂文庫に譲渡しており、『静嘉堂文庫漢籍分類目録』によればそれは一九〇七年のことである。松方が収めた竹添旧蔵書は「松方本」とも称され、「松方文庫」という蔵書印が確認できる。

しかし、松方を経て収められた竹添旧蔵書の中に『左氏會箋』の稿本は含まれていなかったと考えられる。これらの稿本は一九三〇年刊行の『静嘉堂文庫漢籍分類目録』正編には記載されず、一九五一年の続編に初めて見える。また、稿本に残る印記は静嘉堂文庫のものであり、「松方文庫」の印は見えない。静嘉堂文庫の稿本は一九五一年に至るまでに、松方とは別ルートを経て収められたと考えられるのである。

稿本を収めた人物や時期について明確な記録は残されていないが、可能性のある人物としてやはり諸橋轍次を挙げることができる。諸橋は三會箋の稿本について、「こんなわけで、竹添先生の三會箋の中、毛詩・論語の二つの会箋は私が校訂したのであります。ついでながら三會箋の最初の原稿は今静嘉堂文庫に収まっていますし、私の頂いた第二稿は今、日比谷図書館の諸橋文庫の中に収まっています」「④」「この原稿（引用者注…三會箋の稿本を指す）はただいまは皆静嘉堂文庫に収めておる」「⑤」と述べているが、静嘉堂文庫に稿本を収めたのが諸橋自身かあるいは別人か、この言い方から断定することはできない。

しかし筆者は稿本調査によって、諸橋が収めたことを間接的に示す証拠を発見した。それは、三會箋の装訂である。諸橋文庫の『毛詩會箋』稿本は、紺色の厚手の表紙を用いて装訂されている。諸橋が受け取った『毛詩會箋』の原稿が未整理の状態であったことを考えれば、装訂は整理後に諸橋が行ったのであろう。そして静嘉堂文庫の『左氏會箋』稿本四種にも、同じ紺色の表紙が使われ

ている。静嘉堂文庫の『左氏會箋』稿本ももとは諸橋が所持しており、彼が装訂を行ったと考えられる。もっとも諸橋は一九二一年に静嘉堂文庫長に就任し同文庫蔵書の整理に当たっているの
で、別人が収めた『左氏會箋』稿本を、自分が『毛詩會箋』装訂の際に使ったものと同じ表紙で装
訂したという可能性もないわけではない。しかし、諸橋自身が所有していたと見なす方が自然であ
ろう。

諸橋が日比谷図書館に譲渡せず静嘉堂文庫に収めたという「百國春秋樓藏書」についても、ここ
で改めて触れておきたい。諸橋の回想録や、鎌田正^{かまたただし}『左傳の成立と其の展開』（大修館書店、一九
六三年）に寄せた序によれば、春秋研究を志した諸橋は資料として春秋関係書を収集し「百國春秋
樓藏書」と名付けたものの、専著の執筆には至らずそれらを静嘉堂文庫に収めたのだという。『静嘉
堂文庫の古典籍 第三回日本の貴重書』（静嘉堂文庫編纂発行、一九九八年）によれば百國春秋樓藏
書の譲渡は一九五九年のことで、『左氏會箋』稿本の記載がある目録続編の刊行（一九五一年）よりも
遅れる。よって、諸橋が一九五九年に収めた春秋関係書の中に『左氏會箋』の稿本は含まれない。
筆者は静嘉堂文庫にて百國春秋樓藏書のごく一部のみについて閲覧を行ったが、それらには全て「止
軒」「百國春秋樓圖書記」という印が捺されていた。一方、前述の通り静嘉堂文庫の『左氏會箋』稿
本にある印記は同文庫のものだけである。このことから、『左氏會箋』稿本が百國春秋樓藏書に含ま
れないことは一層明らかとなった。

本節の内容をまとめておこう。諸橋は大正初年に『毛詩會箋』『論語會箋』稿本を竹添より渡され
ているが、『左氏會箋』の稿本も譲られていたと考えられる。『左氏會箋』稿本のうち、一種は昭和
二十年（一九四五年）に諸橋より日比谷図書館に譲渡され、現在は東京都立図書館諸橋文庫に蔵され

ている。稿本のうち四種は、一九五一年に至るまでのある時点で諸橋が静嘉堂文庫に収めた可能性が高い。

本章の事項に関連する略年表を以下に掲げておく。

関連略年表

一九〇三年

『左氏會箋』初印本（明治講学会本）刊行。

一九〇三年十二月以前

竹添、蔵書を松方正義に売却。

一九〇七年

松方、竹添旧蔵書を静嘉堂文庫に譲渡。

大正初年

諸橋轍次、『毛詩會箋』『論語會箋』の校訂に当たる。この際に『左氏會箋』の稿本も入手したか？

一九二〇年

『毛詩會箋』刊行開始。

一九二一年

諸橋、静嘉堂文庫長に就任。

一九三〇年

『静嘉堂文庫漢籍分類目錄』正編刊行。

一九三〇～一九三四年

『論語會箋』刊行。

一九四五年

諸橋、藏書を日比谷図書館に売却。現東京都立図書館諸橋文庫。三會箋の後期稿本が含まれる。

一九五一年以前

諸橋、『左氏會箋』稿本四種を静嘉堂文庫に譲渡？

一九五一年

『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』続編刊行。『左氏會箋』初期稿本の記載あり。

一九五九年

諸橋、春秋関係書「百國春秋樓藏書」を靜嘉堂文庫に譲渡。

二 稿本の概要

靜嘉堂文庫の稿本については、上野賢知氏が「左氏會箋三稿」〔⑥〕で論じている。この論文は、管見の限りにおいて『左氏會箋』稿本を取り上げた唯一の先行研究である。孫赫男氏が上野氏の論文に言及している〔⑦〕が、稿本そのものの情報について上野氏に付け加えているものはない。

上野氏は論文の前半で、竹添が『左氏會箋』を著した目的、および島田^{しまだ}翰^{かん}と『左氏會箋』の関わりについて論じており、稿本そのものに触れる部分は三頁ほどである。『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄續』を引いた後、稿本調査の結果を記している。少し長くなるが、それを引用しておこう。

今はその二十五冊本補解には諸橋氏の筆らしく「左氏會箋第一稿本」と表題してあつた。その第一枚目の表紙を開くと、井々翁の見事な筆蹟で「左傳補解」と題してある。中には「左傳杜解補義」と題してある所もある。全文、翁の自筆であつて、句點・返點が全部施してある。成本の左氏會箋に較べると、内容は甚しく異なつてゐる者である。

八冊本補解にも句點・返點はあるが、本文は自筆ではない。訂正・追加は皆自筆である。そ

の用紙は、杜序と總論とだけは「卷子本左傳、井々書屋」と刷入れの原稿紙で、その他は「左傳補解・奎文堂藏」と印刷してある。(中略)

二冊本春秋經傳集解には翁の自筆で、表紙に始めて「卷子本左傳會箋」と題してある。杜注の後に述べてある諸説は、補解には「補」といふ字を冠してあつたのが「箋曰」と改まつてゐる。尚ほ句點・返點が附いてゐる。この二冊本稿本で最も眼を驚かしたのは、始めの三枚だけは、修道館本の體裁で、本文は大文字で、杜註と箋曰とは五號活字で印刷になつてゐたことである。或は體裁を見るために活字に組んで印刷して見たものであるかも知れない。五號活字では餘りに小さいので成本の大きさに改められた者と察せられる。

此の書の書名は初め「春秋左傳補解」或は「春秋左傳補義」と題し、中頃「卷子本左傳會箋」と改め、最後に「左氏會箋」と定まつたことが、この三種の稿本によつて知られる。そしてこの「左氏會箋」といふ書名は島田翰氏の選定に係る者であることは、富岡謙藏氏撰の島田翰氏の墓誌(未定稿)に述べてであると云ふことである。

以上述べ來つた内容に依つて察するに、この三種の稿本は二十二冊本(引用者注…二十二は誤植で、二十五が正しいと考えられる)が第一稿本で、次に八冊本(未完)、次に二冊本(未完)といふ順序に書かれたものであることは靜嘉堂の目録が記載してゐる通りであらう。七冊本左傳集説は、會箋を作る準備として諸説を書き留めて置いた備忘録の類で、所謂「長箋」にも當るべき者であるが、是は疎枝大葉なもので、途中で中止してゐる。

以上のように紹介した後、上野氏は稿が進む度に添削が行われた注の例を二つ挙げている。ただし

これは、竹添が引用する先行注釈者の変遷を、その名を挙げて指摘するのみであり、稿本の具体的な引用までは行っていない。

以下、筆者が行った稿本調査に基づき、上野氏の論文を補足する。なお本章では、経文・伝文・杜注・竹添の注全てを含めて、原稿に初めから記されている部分を「本文」と称する。後から施された追加訂正部分と区別するための呼称であると理解していただきたい。また、稿本に記される魯公十二人の名を取り上げることになるので、便宜のために即位順に名を記しておこう。隠公・桓公・莊公・閔公・僖公・文公・宣公・成公・襄公・昭公・定公・哀公。

二十五冊本は『左傳』全体に渡って作成され、第一冊の冒頭には杜預序が付される。本文に対し行間と余白に膨大な訂正追加が施され、追加を記した紙が各所に糊付けされている。引用する先行注釈の出处を明記しないことが『會箋』の欠点としてしばしば指摘されるが、二十五冊本の段階ですでに出处に関する情報がほとんど記されない。

八冊本は卷八文公までで終わっており、綴じられているのは文公十二年の半ばまでである。上野氏の述べる通り、第一冊の冒頭に杜預序と總論が付される。本文は異なった筆跡が混じり、複数人が書写したものである。竹添の弟子たちが作業に当たったと考えられるが、具体的に誰が関わったかは未詳。上野氏は自筆ではないと述べるが、二十五冊本と同一の筆跡が多少あり、竹添も書写の一部は行ったものであるらしい。竹添自身による訂正追加が多く残されている。

二冊本は、卷一隠公と卷二桓公のみである。杜預序と總論はない。訂正追加はいまだに多く、その筆跡はやはり竹添のものである。上野氏がいう修道館本とは山田栄造の修道館より印行された書籍のことであるが、上野氏が言及する三枚以外にも、活字が大きく体裁は異なるが全て印刷されたも

のである。内容を調べるに、桓公までを一旦印刷し訂正を施した後、それに基づき隠公の冒頭部分三枚のみを修道館本の体裁で印刷し直したものと考えられる。三枚以外では竹添による注の頭に「補」字が冠され、そこに「箋曰」と記した紙片を一々貼り付け訂正しており、冒頭三枚では初めから「箋曰」と印刷されている。

集説について、上野氏は「途中で中止してゐる」と述べるが、隠公より定公に至るまで残っており、所々に欠巻があるといった方が正確である。欠巻部分は初めから作成されなかったものか、あるいは作成はされたが七冊に綴じられる以前に失われたものかは不明。経文・伝文の語句を標示し、その下に諸家の説を抜き書きしてある。二十五冊本と同じ筆跡であり、竹添本人によるものとわかる。作成された時期は不明であるが、稿本の中で最も早く作られた準備稿であると考えられる。抜き書きの中心にあるのは安井息軒『左傳輯釋』と亀井昭陽『左傳續考』であり、『左傳輯釋』を介して清朝考証学者の説が多く孫引きされている。集説に関しては次章で詳しく論じてみたい。

諸橋文庫の三十一冊本は『左傳』全体に渡って作成され、本文は竹添と他者の筆跡が混じる。杜預序と總論のみを綴じて第一冊としている。訂正追加はやはり多く、別紙を挟み込んで長文の追加を行う場合がある。注の頭には初め「補」とあり、それが「箋曰」に直されているが、手書きの紙片と印字された紙片が一々貼られている。

三 稿本の作成順序

『左氏會箋』稿本の中に日付などは残されておらず、その作成順序は内容から判断しなければな

らない。本節では、これらの稿本がどのような順序で作成されたかを検討し、さらに稿本と成本がどのような関係にあるかを明らかにする。

静嘉堂文庫の目録には二十五冊本を第一稿本と記してある。上野氏は二十五冊本↓八冊本↓二冊本の順に書かれたと考え、この順序について「静嘉堂の目録が記載してゐる通りであらう」と述べているが、目録に二十五冊本・八冊本・二冊本の関係が明記されているわけではない。

諸橋文庫の三十一冊本を含めた作成順序について、稿本に記された竹添の注を比較検討することにより詳細に論ずる。稿本では「補」字もしくは「箋」字が冠され、成本で「箋」とされた部分である。二十五冊本・八冊本・三十一冊本の冒頭に配される杜預序については後に回し、まずは隠公以下を取り上げる。

初めに、二十五冊本と八冊本との関係を明らかにしたい。隠公の冒頭に配される、隠公の名に関する注を見てみよう。二十五冊本からの引用は、訂正の際に抹消された部分は中線を引き、追加された部分は（ ）で括弧して示すこととする。八冊本からの引用は、訂正追加を取り除き、原稿に初めに書かれた本文のみを抽出する。稿本には読点が施されているが、新しく句読点を適宜補う。

二十五冊本

名息姑。伯禽七世之孫。惠公弗皇之（子母聲）子。以平王四十九年即位。（伯禽七世之孫。據魯世家、自伯禽至隱凡十三君。以兄弟相及者五人。故止七世。七者世次。十三者傳位之次也）諡法不尸其位曰隱。又隱拂不成曰隱。魯實侯爵而稱者公、公者諸侯在國之通稱。亦猶大夫之稱子非爵也。周家盛時齊。（聘禮大射儀燕禮五等諸侯皆稱公、而食大夫禮、又以名篇、則謂君爲公、周制也。故

外諸侯亦卒各以其爵、而葬必稱公。第、次也。一者數之始。此卷於次第當其一也。

八冊本

名息姑。惠公弗皇之子。母聲子。以平王四十九年即位。伯禽七世之孫。據魯世家、自伯禽至隱凡十三君。以兄弟相及者五人。故止七世。七者世次。十三者傳位之次也。諡法不尸其位曰隱。又隱拂不成曰隱。魯實侯爵而稱公者、公者諸侯在國之通稱。亦猶大夫之稱子非爵也。周家盛時齊。聘禮大射儀燕禮五等諸侯皆稱公、而食大夫禮、又以名篇、則謂君爲公、周制也。故外諸侯亦卒各以其爵、而葬必稱公。第、次也。一者數之始。此卷於次第當其一也。

見ての通り八冊本の本文は、訂正追加後の二十五冊本と一致する。二十五冊本と八冊本の大部分に渡って、この関係が成り立っている。以下、例をいくつか示そう。

先経の伝「生桓公而惠公薨」に対する注

二十五冊本

桓年雖不可的知、然即位三年始娶於齊、則此時蓋不過主叩（二三）歳也。（諸侯死、其國自稱曰薨。薨之爲言薈也。日月無光之象。臣子失所瞻仰、薈若日月無光）

八冊本

桓年雖不可的知、然即位三年始娶於齊、則此時蓋不過二三歳也。諸侯死、其國自稱曰薨。薨之爲言

菅也。日月無光之象。臣子失所瞻仰、菅若日月無光。

同「隱公立而奉之」に対する注

二十五冊本

立、謂隱公攝立爲君。與公立而求成焉之立相應。立爲太子、不可單由立。下傳云、不書即位、攝也。即位二字、承此立字。若解爲立桓太子、與下傳不相接、非左氏文例也。下傳又云、惠公之薨也、有宋師、太子少、葬故有闕。是以改葬。是惠公生時、既立桓爲太子矣。故云奉之。言不敢弟蓄之也（杜云隱公繼室之子、當嗣世。夫聲子爲孟子之姪娣、妾也。隱公妾之子。桓公夫人之子。是當嗣世者桓也、非隱也）桓年尚少、隱恐其危社稷、故攝立。而齊則此時盡【以下五文字判読不能】奉之、危社稷、故攝立而奉之。

八冊本

立、謂隱公攝立爲君。與公立而求成焉之立相應。下傳云、不書即位、攝也。即位二字、承此立字。若解爲立桓太子、與下傳不相接、非左氏文例也。下傳又云、惠公之薨也、有宋師、太子少、葬故有闕。是以改葬。是惠公生時、既立桓爲太子矣。故云奉之。言不敢弟蓄之也。杜云隱公繼室之子、當嗣世。夫聲子爲孟子之姪娣、妾也。隱公妾之子。桓公夫人之子。是當嗣世者桓也、非隱也。

隱公十一年伝「州」に対する注

二十五冊本

州、今懷慶府（河内縣）東南五十里。後屬晉。鬼昭三年七年。州有二。此傳州、王畿也。桓十一年隨絞州蓼伐楚師、州國也。

八冊本

州、今懷慶府河内縣東五十里。後屬晉。州有二。此傳州、王畿也。桓十一年隨絞州蓼伐楚師、州國也。

桓公の名に関する注

二十五冊本

史記名允。世族譜名軌。惠公之子。隱公之弟。（母仲子）以桓王九年即位。諡法辟土服遠曰桓。又克敬勤民曰桓。文辟土兼國曰桓。未知本以何行而爲此諡。他皆放此。

八冊本

史記名允。世族譜名軌。惠公之子。隱公之弟。母仲子。以桓王九年即位。諡法辟土服遠曰桓。又克敬勤民曰桓。未知本以何行而爲此諡。他皆放此。

以上の例より、二十五冊本と八冊本の関係は明らかであろう。八冊本は二十五冊本に基づいて作成されており、八冊本の本文は二十五冊本の本文と訂正追加を転写したものである。二十五冊本を『左氏會箋』の第一稿とすれば、八冊本は第二稿といえる。

八冊本への転写は前述の通り竹添を含めた複数人によって行われているが、その際の作業の様子を伺うことのできる例を一つ取り上げたい。関公の名に関する注である。まずは二十五冊本を引く。

（関公）名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位。史記云名開。（者避景帝諱也）諡法在國遭難曰閔。

ここに見える「史記云名開」は、引用では再現しなかったが訂正時に抹消されている。しかし一字ずつ横に○を打ち、その側に「イキ」と書き入れてある。これは抹消を取り消して元の文字を生かすという意味である。関公の名が『史記』魯周公世家では「開」に作られることを竹添は本文でまず記し、それが漢の景帝の諱「啓」を避けるための措置であったことを追加で示しているのである。この部分は、八冊本の本文では次のようになっている。

関公名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位者避景帝諱也。諡法在國遭難曰閔。

ここは竹添以外の手によって記されている。おそらく筆写者は二十五冊本に書き込まれた「イキ」印を見落とし、転写の際に「史記云名開」を誤って削ってしまったのであろう。「以惠王十六年即位者避景帝諱也」では意味を成さず、竹添は八冊本訂正の段階で再び「史記云名開」を追加している。このことから、竹添以外の筆写者の少なくとも一人にとっては、八冊本への転写は文字通りの作業であり、関連文献の調査などを伴っていなかったということがわかるのである。

次に、八冊本と三十一冊本の関係について検討する。八冊本は文公で終わっているので比較できるのはそこまでであるが、八冊本の本文・訂正と三十一冊本の本文はその多くが一致する。以下、例を挙げる。八冊本、三十一冊本の順に引用し、先ほど本文のみ取り出した八冊本は訂正追加も再現し、三十一冊本は本文のみ抽出する。

隠公の名に関する注

八冊本

(隠公) 名息姑。惠公弗皇之(長)子。母聲子。以平王四十九年即位。伯禽七世之孫。據魯世家、
由伯禽至隱凡十三君。以兄弟相及者五人。故止七世。七者世次。十三者傳位之次也。諡法不尸其位
曰隱。又隱拂不成曰隱。魯實侯爵而稱公者、公者諸侯在國之通稱。亦猶大夫之稱子非爵也。周家盛
時齊。聘禮大射儀燕禮五等諸侯皆稱公、而食大夫禮、又以名篇、則謂君爲公、周制也。故外諸侯亦
卒各以其爵、而葬必稱公。第、次也。十者數之始。此卷於次第當其十也。

三十一冊本

隱公名息姑。惠公弗皇之長子。母聲子。以平王四十九年即位。伯禽七世之孫。諡法不尸其位曰隱。
魯實侯爵而稱公者、公者諸侯在國之通稱。亦猶大夫之稱子非爵也。周家盛時齊。聘禮大射儀燕禮五
等諸侯皆稱公、而食大夫禮、又以名篇、則謂君爲公、周制也。故外諸侯亦卒各以其爵、而葬必稱公。

先経の伝「隱公立而奉之」に対する注

八冊本

立、謂隱公攝立爲君。與公立而求成焉之立相應。下傳云、不書即位、攝也。即位二字、承此立字。若解爲立桓太子、與下傳不相接、非生氏文例也。下傳又云、惠公之薨也、有宋師、大子少、葬故有闕。是以改葬。是惠公生時（蚤已）、旣立桓爲大子矣。故云奉之。言不敢弟蓄之也。（是傳爲隱元先經始事之文）杜去隱公繼室之子、當嗣世。未聲子爲孟子之姪娣、妾也。隱公妾之子。桓公夫人之子。是當嗣世者桓也、非隱也。

三十一冊本

立、謂隱公攝立爲君。與公立而求成焉之立相應。下傳云、不書即位、攝也。即位二字、承此立字。下傳又云、惠公之薨也、有宋師、大子少、葬故有闕。是以改葬。是惠公蚤已立桓爲大子矣。故云奉之。言不敢弟蓄之也。是傳爲隱元先經始事之文。

閔公の名に関する注

八冊本

閔公名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位。（史記云名開）者避景帝諱也。諡法在國遭難由閔。

三十一冊本

閔公名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位。史記云名開者避景帝諱也。

以上より、八冊本に残されている文公までに關していえば、三十一冊本は八冊本に基づいて作成され

ていることが確認できる。三十一冊本は、第二稿たる八冊本に続く第三稿である。だが、八冊本は文公までで終わっており、宣公以降が綴じられていない。三十一冊本の宣公以降は、どのようにして作成されたのだろうか。宣公以降について、第一稿たる二十五冊本の本文・訂正追加と三十一冊本の本文を比較したところ、この二つは一致していた。その例を以下に示す。

宣公の名に関する注

二十五冊本

(宣公) 名倭。一名接。又作委。文公庶長子。母敬嬴。以匡王五年即位。諡法、善聞周達申軍。

三十一冊本

宣公名倭。一名接。又作委。文公庶長子。母敬嬴。以匡王五年即位。

成公元年伝「劉康公徼戎、將遂伐之」に対する注

二十五冊本

出要戎還、將又伐其邑也。杜不す。

三十一冊本

出要戎還、將又伐其邑也。

襄公の名に関する注

二十五冊本

名午。成公子。母定姒。以簡王十四年即位。諡法、因事有功曰襄、辟土有德曰襄。

三十一冊本

名午。成公子。母定姒。以簡王十四年即位。

三十一冊本は、文公までは八冊本に、宣公以降は二十五冊本に基づいて作成されている。第二稿たる八冊本の作成は文公までで中断し、稿を改めて三十一冊本すなわち第三稿の作成が開始されたと考えるべきであろう。

ここまで取り上げた三種の作成順序は二十五冊本（第一稿）↓八冊本（第二稿）↓三十一冊本（第三稿）であり、宣公以降は二十五冊本と三十一冊本が直接繋がっている。

さらに三十一冊本と『會箋』成本について述べよう。前述の通り、上野賢知氏が「最後の原稿」と称しているのはおそらく三十一冊本のことである。では、三十一冊本と成本はどのような関係にあるのか。調査の結果、隱公・桓公を除いた莊公以降についていえば、成本は三十一冊本に基づいていることが判明した。以下、それを示す例を挙げる。

莊公元年経「三月夫人遜于齊」に対する注

三十一冊本

釋言遜遯也。哀二十六年傳昔成公孫於陳。杜注傳二十八年衛成公奔楚、遂適陳。又二十七年傳公如公孫有陘氏、因孫于邾。據此二文、則孫只是逃遁、非遜讓、亦非諱辭也。：

成本

釋言遜遯也。哀二十六年傳昔成公孫於陳。二十七年傳公如公孫有陘氏、因孫于邾。據此二文、則孫只是逃遁、非遜讓、亦非諱辭也。：

莊公四年經「紀侯大去其國」に対する注

三十一冊本

去而不反曰大去。(與夫人歸于齊大歸也之大同)猶歸而不復申大歸。婉而成章、亦內辭也。自桓五年經書紀事汔詳、蓋亦我壻故也。朱國不名、與譚子弦子似而異矣。

成本

去而不反曰大去。與夫人歸于齊大歸也之大同。婉而成章、亦內辭也。自桓五年經書紀事汔詳、蓋亦我壻故也。

閔公の名に関する注

三十一冊本

閔公名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位。史記云名開(方)者避景帝諱也。

成本

閔公名啓方。莊公之子。母叔姜。以惠王十六年即位。史記云名開方者避景帝諱也。

僖公三十二年經「鄭伯捷卒」に対する注

三十一冊本

鄭文與魯十餘同盟。非主同盟。詳見于正義。(前此莊厲皆會葬。今始不葬。蓋憚晉也。鄭)自三十年背晉與秦盟。晉之所惡(也)故魯不會葬。捷在接床。

成本

鄭文與魯十餘同盟。詳見于正義。前此莊厲皆會葬。今始不葬。蓋憚晉也。鄭自三十年背晉與秦盟。晉之所惡也。

『會箋』成本の莊公以降は、三十一冊本の本文・訂正を活字に組んだものである。つまり、三十一冊本のうち莊公以降の部分は、『會箋』の最終稿と見なすことができる。では、ここまで取り上げてこなかった二冊本はいかなるものであるのか。実は、隱公・桓公については三十一冊本と成本が直接繋がらず、その間に二冊本が位置しているのである。以下、それを示す例を挙げよう。三十一冊本、二冊本、成本の順に並べ、三十一冊本と二冊本の訂正追加を再現する。

隱公元年伝「亟請於武公」に対する注

三十一冊本

亟請者、不一也。弗許見武公之賢。（緇衣美武公、其賢可知、所以弗許也）

二冊本

亟請者、不一也。弗許見武公之賢。緇衣美武公、其賢可知、所以弗許也。

成本

亟請者、不一也。弗許見武公之賢。緇衣美武公、其賢可知。

桓公の名に関する注

三十一冊本

桓公史記名允。世族譜名軌。惠公之子。以桓王九年即位。諡法辟土服遠曰桓。又克敬勤民曰桓。

二冊本

桓公史記名允。世族譜（本）名軌。惠公之子（隱公之弟。母仲子）以桓王九年即位。

成本

桓公史記名允。世本名軌。惠公之子。隱公之弟。母仲子。以桓王九年即位。

桓公二年伝「昭其數也」に対する注

三十一冊本

度（中有數、數中有度、不必拘泥。此左氏脩辭）與數唯大概分之、以不過取其文字比耦、音節和諧者。

二冊本

（君上所御五路之纓旌旗之旒、各有定數。而數之登降、則繫乎德之大小。故昭其數即所以表明其德也）~~度中有數、數中有度、不必拘泥。此左氏脩辭。取其文字比耦、音節和諧者。~~

成本

君上所御五路之纓旌旗之旒、各有定數。而數之登降、則繫乎德之大小。故昭其數即所以表明其德也。

以上より、隱公・桓公については三十一冊本に基づいて二冊本が作られ、二冊本に基づいて成本が作られていることが確認できる。二冊本は第四稿に当たり、隱公・桓公に関してはこれが『會箋』の最終稿である。

三十一冊本の訂正が終わった後、竹添は体裁を見るために隱公・桓公のみ試し刷りをし、印刷した原稿にさらに訂正追加を施したのであろう。莊公以降については試し刷りをせず、これ以上手を加えることはなかったと考えられる。『會箋』刊行に際し、隱公・桓公については印刷原稿（二冊本）に拠り、莊公以降は三十一冊本に拠ったものであろう。しかし隱公・桓公の印刷原稿が前段階の原稿とともに綴じられることはなく、『會箋』の最終稿は二冊本・三十一冊本として、結果的に静嘉堂文庫と東京都立図書館諸橋文庫とに分散することになったのである。

五つの稿本の作成順序は次の通り。集説（準備稿）↓二十五冊本（第一稿）↓八冊本（第二稿）↓三十一冊本（第三稿）↓二冊本（第四稿）。各稿本についても簡単にまとめておこう。

準備稿

『左傳』の語句を標示し、先行注釈書の説を抜き書きする。所々に欠巻あり。静嘉堂文庫集説。
第一稿

『左傳』全体に渡って作成し、訂正を施す。静嘉堂文庫二十五冊本。
第二稿

第一稿に基づいて本文を作成、訂正を施す。文公までで中断。静嘉堂文庫八冊本。

第三稿

文公までは第二稿、宣公以降は第一稿に基づいて本文を作成し、訂正を施す。莊公以降についてはこれが最終稿。諸橋文庫三十一冊本。

第四稿

第三稿に基づき隱公・桓公のみを印刷、訂正を施す。隱公・桓公についてはこれが最終稿。静嘉堂文庫二冊本。

最後に、杜預序について触れておこう。二十五冊本、八冊本、三十一冊本には冒頭に杜預序があり、竹添はそこにも注を付けている。注の異同を調べた結果、杜預序の書写順序は二十五冊本↓三十一冊本であることが判明した。八冊本の杜預序は三十一冊本よりも後に記されたと考えられるが、

三十一冊本の本文・訂正追加と直接繋がらない部分があり、この間に他の原稿が作られた可能性がある。

杜預序の二十五冊本↓三十一冊本↓…↓八冊本という順序は隠公以降と異なり、装訂の際に何らかの混乱が起こった疑いがある。また、八冊本と成本の杜預序を比べると注の異同がなお目立ち、杜預序については現在残る稿本の中に最終稿と呼ぶべきものが存在しない。

四 『春秋經傳集解』テキストとしての変遷

『左氏會箋』稿本がどのように変遷していったか、これよりさらに詳しく検討してみたい。前節にて作成順序が明らかになったので、これより集説を準備稿、二十五冊本を第一稿、八冊本を第二稿、三十一冊本を第三稿、二冊本を第四稿と呼称する。本節では、『春秋經傳集解』のテキストとしての『會箋』稿本について述べる。

第一章で述べたように、竹添が『會箋』成本において底本としたのは宮内省図書寮所蔵の卷子本『春秋經傳集解』三十巻であり、島田翰の協力を得て校勘を行ったものである。竹添が初めて卷子本に着目した時期は詳らかではないが、『古文舊書考』には竹添が明治二十三年（一八九〇）の冬に卷子本を三たび校合し、その後島田が仕事を引き継いだことが記してある。

それでは、『會箋』は稿本の段階からすでに卷子本が底本として用いられているのだろうか。第三稿と第四稿の各巻末には卷子本の奥書が転写してあり、上野氏が指摘するように二冊本（第四稿）の表紙には「卷子本左傳會箋」と記される。この二つが卷子本に拠っていることは疑いない。

だが第一稿と第二稿の中には、調査した限りでは底本の情報は明記されていない。八冊本（第二稿）の杜預序と總論に「卷子本左傳、井々書屋」と印刷された原稿用紙が使われていることを上野氏が指摘するが、前節末尾で述べたように八冊本の冒頭には装訂時の混乱が疑われる。第一稿・第二稿の底本については、竹添が利用した諸々のテキストを照合して判断する必要がある。

筆者は宮内庁書陵部にて卷子本の閲覧を行った（カラー写真による複製本）ものの、調査しえたのは全体のごく一部である。また、竹添が用いた数種の宋本は未見であり、この問題について確定的なことは言えない。だが現在広く通行する阮元本と宋本『左傳』との間に存在する差異はそれほど大きなものではないという指摘がある〔⑧〕ので、筆者はさし当たって卷子本の調査が及んだ範囲と阮元本を比較してみた。その結果、稿本初期段階の底本は卷子本ではなかったという可能性が浮上してきた。

『會箋』成本を繙くと、各年の經文・伝文の冒頭にある「經」「傳」の文字が欄上に置かれていることに目が止まる。この体裁は卷子本を再現したものである。これらの文字は阮元本では欄内に置かれ、各經文・伝文と連続している。竹添の自序によれば、欄上に置く卷子本の体裁が『春秋經傳集解』本来のものであり、それを採用したという。欄内に置く宋代以降の刊本は誤りだと述べている。ところが第一稿と第二稿を調べると、「經」「傳」字がみな欄内に記されている。しかし第二稿の訂正時に欄内の「經」「傳」字を抹消して欄上に書き直してあり、第三稿では初めから欄上に置かれている。

また、稿本に記される經文・伝文・杜注の文字が卷子本と一致しない場合がある。たとえば僖公二十八年伝文で、阮元本が「曹人兇懼」に作る箇所を、成本は「曹人兇兇懼」に作る。成本に付き

れた箋では石経・宋本が「曹人兇懼」に作ることを述べた上で、卷子本の「曹人兇懼」が正しいとしている。この箇所が稿本でどうなっているかといえば、第一稿・第二稿では「曹人兇懼」に作り、第二稿の訂正時に「兇」字を追加して「兇兇」に直している。そして第三稿では初めから「曹人兇懼」と記される。

僖公三十三年伝文、阮元本が「不替孟明、孤之過也」に作る箇所を、成本は卷子本に従い「不替孟明、曰孤之過也」に作り、箋では石経・宋本は「曰」字を脱していると指摘する。ここもやはり第一稿・第二稿では「不替孟明、孤之過也」とあり、第二稿の訂正時に「曰」を追加することで卷子本と一致し、それが第三稿に及んでいる。

右に挙げた「經」「傳」字の位置および僖公二十八年・同三十三年の例は、島田が卷子本の善本たる所以を示すために『古文舊書考』で特に取り上げているものである。竹添が卷子本を底本と定めた上で稿本の作成を開始したと仮定するならば、これらの例で第一稿および第二稿の本文が卷子本と一致しないのは訝しい。思うに卷子本は初めから『會箋』の底本として採用されていたわけではなく、稿が進むにつれてその重要性に気づいた竹添が途中の段階で底本に据えたのではないか。第一稿・第二稿が既存の何らかのテキストに拠ったものか、あるいは竹添と島田による校訂本であるかはさらに検討する必要がある。また、第二稿本文の作成までに竹添がすでに卷子本を調査していたか否かも、現時点までの筆者の調査からは判断できない。だが少なくとも、第一稿・第二稿本文の中心に卷子本が置かれていないことは確かである。

これまで挙げた例を初めとして、第二稿の訂正によって卷子本と一致する箇所が増加している。またその際には、石経・宋本との異同を示す注が多く追加されている。このことから、卷子本が底

本に定まっていたのは第二稿訂正の時点であると推測できる。

五 文章表現に関する注の変遷

前節では『春秋經傳集解』テキストとしての稿本に触れたが、本節では注釈書としての稿本の変遷について述べる。

前章までで述べたように、『會箋』の中には『左傳』の文章表現に関する解説が散見される。そのような性格を持つ注がどのように付けられていったのか、稿本を検討してみたい。調査対象として僖公二十八年に見える城濮じやうぼくの戦いを取り上げる。城濮の戦いは晋と楚が争い、勝利者である晋の文公に覇権をもたらした重要な戦いである。

僖公は第四稿以外の稿本に見える。文章表現に関する注として成本に見える例を、まずはいくつか挙げてみよう。僖公二十八年伝文は、楚との戦いに先だって晋の元帥たる卻穀げきこくが死去し、先軫せんしんが席次を飛び越してそれに代わったことを記した上で、その人事が「徳を上たつとぶ」ことにより行われたと述べる。また戦いの記事の後には「君子」の言葉を載せ、城濮の戦いにおける晋を「能く徳を以て攻む」と評している。さて、『會箋』成本は伝文「上徳也」に「徳字直貫篇末能以徳攻。晋侯惟有徳、故能上徳也」と注し、戦いの前後に配された「徳」字の対応関係を指摘する。これは方苞ほうぼう『左傳義法舉要』に拠ったものであり、準備稿の段階では方苞の名前のみがメモされている。方苞の評は第一稿・第二稿では取られず、第三稿の訂正時に初めて実際に引用されている。

城濮の戦いは、楚が晋の同盟国である宋を攻めその都を包囲したことがきっかけとなって行われ

た。晋は楚に従う衛と曹を攻めることで宋を救おうとする。楚の成王は晋との戦いを望まず撤兵するが、開戦を主張する令尹子玉しぎよくの率いる部隊が城濮にて晋と激突したのである。晋の臣下たちは策を巡らせて子玉を戦いに引きずり出すのであるが、伝文は会戦を前にした文公の心情を「晉侯患之」「公疑焉」「是以懼」と三度に渡って記すとともに、文公を励まし戦いを促す子犯しはんの言葉を載せる。これについて成本の箋は「將戰、又作數折。見勝楚之難。篇中患字疑字懼字、層層點出」と記し、屈折する叙述によって楚に勝つことの困難さを示しているとする。これは魏禧ぎき『左傳經世鈔さでんけいせいしやう』に見える彭士望の評に拠るものであり、第一稿より記されている。

また成本の箋は、開戦を予想させる叙述と、戦いが回避されるかに見える叙述が僖公二十八年全篇に渡って交互に現れ、子玉の挑戦に対し翌朝相まみえようと答えた文公の言葉で会戦が決したと記し、その叙述を「千山萬壑忽斷忽續、眞奇觀也」と評する。これは姜炳璋きやうへいしやう『讀左補義とくさほぎ』に拠ったもので、第一稿の訂正以降に記される。

以上が文章表現に関する注として成本に見える例だが、実は稿本の初期段階ではこのような性格の注がさらに多く記されている。たとえば楚の成王が「有徳不可敵」と述べ、晋との戦いを避けようとしたことについて、第一稿は『讀左補義』に拠り「又借楚子口中、提唱徳字。首尾照應」と記し、篇の冒頭および末尾に配された「徳」字との対応を指摘している。前述の通り方苞が冒頭部分に付けた「徳字直貫篇末能以徳攻」という評は第一稿・第二稿の時点では引用されていないのだが、第一稿ではそのかわりに『讀左補義』に拠って「以原軫將中軍上徳也爲綱。篇末徳攻、正與此應」と記してある。つまり第一稿本文の段階では『讀左補義』に基づき、三回現れる「徳」字についてその対応関係を指摘しているのである。ところが『讀左補義』は第一稿訂正時に削られており、第

三稿訂正時に方苞の評を新しく追加して篇の冒頭と末尾の「徳」字についてのみ指摘する形に直したのである。

この他、たとえば伝文は開戦直前の晋軍の状況を「晋車七百乘、轡鞞鞞」と記すが、第一稿ではこれに対して『左傳經世鈔』に拠り「轡鞞鞞。板填四字、更無餘語。是禿句法」と記す。これは訂正の際に追加されたものだが、抹消を意味する記号が原稿に書き込まれており、第二稿以降取られていない。

第一稿で記されながら後に削られた注の例はこの他にも見える。竹添は第一稿の段階で主に『左傳經世鈔』『讀左補義』から文章表現に関する注を取り入れているが、稿が進む中でそれらのいくつかは削除され、整理が行われているのである。

おわりに

以上、本章では『左氏會箋』の稿本について検討した。

東京都立図書館諸橋文庫に残る稿本一種は諸橋轍次の旧蔵書であり、諸橋が竹添本人もしくはその遺族から譲られたものと考えられる。静嘉堂文庫の稿本四種も、諸橋が同文庫に収めた可能性が高い。

注の異同を調べることで稿本の作成順序が明らかとなり、『左氏會箋』の最終稿が三十一冊本、二冊本として諸橋文庫と静嘉堂文庫に分散していることが判明した。

竹添は宮内省図書寮蔵の卷子本『春秋經傳集解』を『左氏會箋』の底本に採用しており、そのこ

とは竹添の一大見識として評価されている。しかし第一稿と第二稿にはテキストとして成本と一致しない部分があり、改稿が進んだ時点で卷子本を底本に定めたという可能性がある。第四章で言及することになるが、竹添は『會箋』の稿が進む中で文献調査の範囲を広げていった。しかし、稿が進むごとに単に新しい注を追加していったわけではなく、注を刈り込み整理する作業も行われていたと、本稿で城濮の戦いを対象に行った調査から判断できる。

注

- ① 諸橋の回想録や対談集は『諸橋轍次著作集』第十卷（大修館書店、一九七七年）に収められている。
- ② 東洋文化研究所、一九五七年 六十頁。
- ③ 高野静子『統蘇峰とその時代』（徳富蘇峰記念館、一九九八年）三百十八頁。
- ④ 注①前掲書二百七十二頁。
- ⑤ 注①前掲書三百五頁。
- ⑥ 『斯文』第十四号、一九五六年。後に上野賢知『春秋左氏伝雑考』（東洋文化研究所、一九五九年）に収録。
- ⑦ 孫赫男「上野賢知〈左氏会箋〉三稿」『遼寧大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇六年三期。
- ⑧ 鎌田正『春秋左氏伝 一』（明治書院新釈漢文大系、一九七一年）二頁参照。

第四章 『左氏會箋』の準備稿

はじめに

前章で論じた『左氏會箋』稿本のうち、本章では準備稿に当たる静嘉堂文庫蔵『左傳集説』さでんしゆうせつを取り上げる。

稿本に関する先行研究を行った上野賢知氏は『左傳集説』について、「七冊本左傳集説は、會箋を作る準備として諸説を書き留めて置いた備忘録の類で、所謂「長箋」にも當るべき者であるが、是は疎枝大葉なもので、途中で中止してゐる」^①と述べるのみである。しかし、本書に抜き書きされる注釈書を検討することで、竹添の初期構想を伺うことができるであろう。その意味で、本書はまことに貴重な資料といえる。『左傳集説』について調査し、竹添がこれを作成した方法や、中心として選んだ先行注釈書について検討してみたい。

一 『左傳集説』の概要

『左傳集説』（以下、『集説』）を含む静嘉堂文庫の稿本について、『静嘉堂文庫漢籍分類目録續』（一九五一年）に見える記載を再度引用しておこう。

・春秋左傳補解不分卷（左氏會箋第一稿本）

竹添光鴻撰 寫 (二十五冊)

・春秋左傳補解八卷(以下缺) (稿本)

竹添光鴻撰 寫 (八冊)

・春秋經傳集解存卷一・二(稿本)

竹添光鴻撰 寫 (二冊)

・左傳集說一五卷(卷二・五・八・九・一〇・一三・一五缺)

(稿本) 竹添光鴻撰 寫 (七冊)

すでに明らかにしたように、右に挙げた稿本それぞれが『會箋』の第一稿、第二稿、第四稿、準備稿に当たる。前章では、『集説』が第一稿の前に位置する準備稿であることの論証を省略した。『集説』は『左傳』經文伝文の語句を標示し、その下に先行注釈書の説を抜き書きするという体裁を取っている。この体裁を見るだけでもこれが上野氏の述べるように「會箋を作る準備」として作られたものであるということは見当がつくのだが、そのことをよりはっきり示す証拠を一つ提示しておきたい。隠公元年經「公子益師卒」について、『集説』は亀井昭陽『左傳續考』を引く。竹添は抜き書きの後で文の一部に添削を加えている場合があり、ここでもそれが行われている。その竹添の抜き書きを、添削も含めて左に引用してみたい。抜き書きの横に後から添えられた文字があり、それが単なる追加なのか文字を置き換えているのか不明確であるが、() に入れて示すこととする。■で示すのは、塗りつぶされた文字である。なお『集説』には読点が施されているが、引用に際し新しく句読点を加える。

第一冊 卷一 隱公

第二冊 (卷二欠) 卷三 莊公 卷四 閔公

第三冊 (卷五欠) 卷六 僖公二十七年～文公十二年

第四冊 卷七 文公十三年～宣公十八年

第五冊 (卷八・九・十欠) 卷十一 襄公二十八年～昭公三年

第六冊 卷十二 昭公四年～十一年

第七冊 (卷十三欠) 卷十四 昭二十六年～定十五年 (卷十五欠)

書名については第一冊本文の冒頭に「左傳集説卷一」、第二冊に「左傳集説」と記され、それ以降「集説」という名は見えなくなる。欠巻については遊紙に「桓公第二闕」などと記されている。欠巻部分は作成されたものの七冊に綴じられる以前に失われたのか、あるいは初めから作成されなかったのかは不明である。

前述の通り、『集説』は先行注釈の抜き書きから成り立っているが、基本的には人名または書名を記した上で引用が行われている。「鴻こうあんずるに案」として竹添が自説を記す部分も少しある。第一稿より成本に至るまで、依拠した先行注釈の出処をほとんど明記しない竹添であるが、『集説』の中には引用元の情報が保存されているのである。ただし常に名を明記しているわけではなく、誰の説であるか一見して判断できない場合もしばしばある。

『集説』は、大きく三つの部分に分けることができる。まず、抜き書きを行った本文がある。そ

して余白および行間に追加の抜き書きをした部分があるが、本稿ではこの部分を便宜上「追記」と称する。この本文と追記に対して、先に述べた通り添削が行われる場合がある。ただし添削は巻一より後ではほとんど見えなくなる。また本文と追記の傍らに、添削とは別に朱筆で記された箇所もあるが、これは先行注釈の書名のみをメモしたものである。この部分を「補記」と称することとする。

二 『左傳集說』に引用される注釈書

竹添はどのような先行注釈書を参照して『集說』を作成したのであろうか。『左傳』読解の基礎となるものは杜注だが、これが独立して抜き書きされることはない。服虔・『經典釋文』・『左傳正義』の名は各所に見える。それ以外の人名・書名について、『集說』本文と追記に記された竹添の表記を左に列挙し、その下に各書の情報を記してみたい。ただし一見して他書からの引用と分かる形で記されているものや、書誌情報が判明しなかったものについては除く。

彫題、彫 ↓中井履軒『左傳彫題略』

續考、續、考 ↓亀井昭陽『左傳續考』

輯釋、輯 ↓安井息軒『左傳輯釋』

春秋大事表、大事表 ↓顧棟高『春秋大事表』

補義、姜炳璋 ↓姜炳璋『讀左補義』

説文
↓許慎『説文解字』

考義
↓龜井南冥『左傳考義』

魏禧、魏、彭家屏、彭、魏禮、丘維屏、丘

↓魏禧評点、彭家屏参訂『左傳經世鈔』
魏禮、丘維屏は同書に引く。

顧炎武、顧
↓顧炎武『左傳杜解補正』

宇士新、宇氏、宇鼎↓宇野明霞『左傳考』

沈彤
↓沈彤『春秋左傳小疏』

惠棟、惠
↓惠棟『春秋左傳補注』

王引之
↓王引之『經義述聞』

萬斯大、萬
↓萬斯大『學春秋隨筆』

毛奇齡
↓毛奇齡『春秋毛氏傳』

傳遜
↓傳遜『春秋左傳註解弁誤』

秦鼎、秦
↓秦鼎『春秋左氏傳校本』

馮
↓馮李驊『左繡』

陸粲、陸
↓陸粲『左傳附註』

阮元
↓阮元『春秋左氏傳注疏校勘記』

齊召南
↓齊召南『春秋左傳注疏考證』

馬宗璉、馬
↓馬宗璉『春秋左傳補註』

臧琳 ↓臧琳『經義雜記』

廬文弨 ↓廬文弨『鍾山札記』

ここに挙げた先行注釈書について、竹添がその全てを実際に見ていたのかといえそうですが言い切れず、むしろ孫引きを行ったと考えられるものも多い。

その例として、まずは『左傳考義』(以下、『考義』)を取り上げてみたい。第二章で述べたように、『會箋』成本が『左傳續考』(以下、『續考』)から『考義』を孫引きしていることを岡村繁氏が指摘しているが、筆者の調査によれば『集説』においてもそれは同様である。『集説』の中には「考義」という書名が十二カ所に見える。その中の一例、昭公二年伝「淫生六疾」に対する抜き書きでは、「考云考義六氣之淫生疾、故曰六疾、下所言是也」と『續考』からの引用であることが示されている。残りの十一カ所も、明示されてはいないが、やはり『續考』から引かれていると考えられるのである。以下に例を三つ取り上げ、『考義』〔②〕、『續考』所引『考義』〔③〕、『集説』の順に並べてみる。『集説』に付した傍点は筆者によるものである。

隱公元年伝「大叔又收貳」

『考義』「又貳於己」。

『續考』「考義上曰貳於己、故曰又」。

『集説』「考義云上曰貳於己、故曰又」。

昭公二十六年伝「將以厭衆」

『考義』「言使衆心厭足也。成衆或不欲降、故使戰鬪。厭意也。註誤」。(岡村繁氏によれば一本は「註」を「杜」に作る)

『續考』「考義言使衆之心厭足也。成衆或不欲降、故使先戰鬪而厭其意也。杜誤」。

『集説』「考義言使衆之心厭足也。成衆或不欲降、故使先戰鬪而厭其意也。杜誤」。

定公八年伝「喜於徵死」

『考義』「陽虎在魯、則魯人將取死。今聞其出、是始免死也。故言喜於徵死。杜註似未穩」。

『續考』「考義陽虎在魯、則魯人常有徵死之懼。今聞其出、是始免死也。故曰喜於徵死。杜似未穩。案此説明矣。曰死曰死、播然有是善也」。

『集説』「考義陽虎在魯、則魯人常有徵死之懼。今聞其出、則殆免死也。故云喜於徵死。杜似未穩。案此説明矣。曰死曰死、播然有是善也」。

右の第一例は、岡村氏も取り上げたものである。第一例と第二例は、『續考』と『集説』が一致する。第三例は文字の異同が二つある(「是」と「則」、「曰」と「云」)ものの、『集説』は『考義』そのものよりも『續考』に近い。また『續考』にある昭陽の案語を写していることから、竹添はここでも『續考』より抜き書きをしていると考えられる。この他、『考義』と『續考』の間に異同がある場合、『集説』は『續考』と一致する。このことから、『集説』の段階でも竹添は『考義』そのものには拠らず、『續考』から孫引きを行っているとは判断できる。

このような孫引きの例は『集説』の随所に見られる。その際、引用元として最も多く用いられているのは、おそらく安井息軒の『左傳輯釋』(以下、『輯釋』)であろう。『輯釋』の形式は、漢より清に至る諸家の説を引用した後に安井が案語を記すというものであり、竹添はこの諸家の説を『集説』に多く写している。隠公八年伝「胙之土」に対する抜き書きを見よう。

陸粲曰周語胙以天下。韋注胙祿也。此云胙之土、謂祿以土田爾。阮元曰文選陸士衡詩注引胙作祚、土上有以字。案胙者祚之俗。輯云土上有以字、似是。疑今本脱耳。

この例は一見すると陸粲『左傳附註』、阮元『春秋左氏傳注疏校勘記』、『輯釋』の三つをそれぞれ引用しているように思われるが、実際はそうではない。陸粲と阮元は安井がすでに引いており、竹添の抜き書きはその範囲を出るものではない。同様の例をもう一つ、顧炎武について示そう。隠公五年伝「叔父憾於寡人」に対するものである。

顧曰僖伯孝公之子、惠公之弟、故曰叔父。杜解乃通稱之辭、當移在莊十三年上大夫之事吾願與伯父圖之之下。輯云憾可訓恨。然其義微別。恨者怨之甚也。憾者心有所懊惱也。

「顧曰」以下は『輯釋』が引く顧炎武『左傳杜解補正』と一致する。文中の「杜解乃通稱之辭」は、『左傳杜解補正』そのもの(皇清經解本)では「杜解諸侯稱同姓大夫長曰伯父少曰叔父、此乃通稱之辭」とあり、安井が引用に際し一部を省略したのである。『集説』が『輯釋』と同じ文になっている

ことから、竹添がここで『左傳杜解補正』に直接拠っていないことは明らかである。

馬宗璉ばそうれんも取り上げておこう。これについては上野氏が、

清の馬宗璉には皇清經解にも収めてある春秋左伝補註三卷があつて我国の学者は随分引用してをるのであるが、会箋は氏名は一回も挙げてゐないが、安井息軒の左伝輯釈、近藤元粹の増註左氏伝校本からは可なり引用してゐるのである。なぜ馬氏の氏名を挙げなかつたのであらうか。

と述べている〔④〕。また、李洛旻氏は『會箋』が馬宗璉を引く例を六十七条挙げ、竹添が原典に拠らず『輯釋』から『春秋左傳補注』を引く例があることを指摘している〔⑤〕。『集説』には「馬宗璉」もしくは「馬」という名が若干見えるが、それらは『輯釋』が引いているものばかりであり、やはり孫引きと考えられる。

総じていえば、『集説』の中で「某曰……」。某曰……。輯云……。輯云……。『集説』のように、一人ないし複数人の説を引いて末尾に『輯釋』が置かれている場合、「某曰」の部分も『輯釋』から孫引きされたものと見てほぼ間違いない。

また、「某曰」のみで「輯云」がなくても、『輯釋』から引かれていると考えられる例がある。たとえば隠公十一年伝「辱在寡人」に対しては「王引之曰……」おういんしと記されるだけで『輯釋』の名は見えない。しかし、王引之の『經義述聞』けいぎじゆつぶんそのもの（皇清經解本）、『輯釋』所引『經義述聞』〔⑥〕、『集説』を左に並べてみよう。

『經義述聞』「…引之謹案爾雅曰在存也。存問之也。周官大行人歲徧存、三歲徧覘、五歲徧省。

大戴禮朝事篇存作在。聘禮記曰子以君命在寡君。鄭注曰在存也。襄二十六年傳曰吾子獨不在寡人。杜注曰在存問之也…」。

『輯釋』「王引之云爾雅曰在存也。存問之也。周官大行人歲徧存、三歲徧覘、五歲徧省。大戴禮朝事篇存作在。聘禮記曰子以君命在寡君。鄭注曰在存問之也」。

『集說』「王引之曰爾雅云在存也。存問之也。周官大行人歲徧存。大戴禮朝事篇存作在。聘禮記曰子以君命在寡君。鄭注■在存問之也」。(■は塗りつぶされた文字)

この例では、『輯釋』が『經義述聞』を不適切な形で引いている。王引之は、『儀禮』ぎらい聘禮篇に「子以君命在寡人」、その鄭注に「在存也」とあり、『左傳』襄公二十六年に「吾子獨不在寡人」、その杜注に「在存問之也」とあると述べている。『儀禮』『左傳』を確認したところ確かにそうになっていた(細かくいえば杜注の「也」はない)。ところが『輯釋』では「鄭注曰」の次の字より下の二十字が脱落しており、『儀禮』鄭注に「在存問之也」とあるというように見える誤った記述になってしまっている。おそらく、前後それぞれに「注曰在存」とあるために文字を飛ばしてしまったのであろう。『集說』が『輯釋』の誤りをそのまま襲っていることから、ここでも竹添は『經義述聞』に遡って確認はせず『輯釋』に拠っているということが分かる。これは『輯釋』にたまたま誤りがあったために孫引きと明らかになったものだが、単に「某曰」としながら『輯釋』より引く例は他にも相当数あ

る。右に挙げた誤りは第一稿にも受け継がれているが、訂正追加の際に「鄭注曰在存南也」と直されている。『集説』の段階では参照していなかったにせよ、竹添が稿を進める中で原典の確認も行ったことを示す例といえるだろう。

『集説』には引用とも竹添自身の説とも見分けがつかない部分があると先に述べたが、そこにもやはり『輯釋』からの孫引きがある。隠公六年伝「蒞崇之」に対して「積之高曰崇。蘊俗字。石經宋本並作蒞」とあるが、この前半部分は『輯釋』に引く陸粲、後半部分は同じく阮元である。

『輯釋』から孫引きされる人名の例を、ここまで見てきたものを含めて挙げれば、次のようになる。陸粲、傳遜ふそん、阮元、顧炎武、馬宗璉きよしん、許慎、沈彤しんとう、惠棟けいとウ、王念孫おうねんそん・王引之ばんしだい、万斯大ばんしだい、毛奇齡もうきれい、齊召南せいしょうなん。

この中で、許慎は漢の人、陸粲と傳遜は明の人である。それ以外はみな清人であり、その著作は皇清經解こうせいけいかいに収められるが、安井息軒は皇清經解でこれらを見ていたと考えられる。斯道文庫しどうぶんこには安井息軒旧蔵の皇清經解が現存している。高橋智氏によれば、安井は皇清經解をその成立よりそれほど下らない時期に入手しており、「清朝の考証学の成果をまとめた形でいち早く吸収した人でもあった」という⑦。竹添は『集説』において、皇清經解所収の注釈書を『輯釈』より抜き書きしており、皇清經解もしくはその他のテキストで原典を参照した形跡が見つかからない。『集説』では確認を省き、稿が進む中で原典を参照して追加訂正を行ったものと考えられる。

ここまでは『輯釋』を見てきたが、『輯釋』だけが孫引きの引用元というわけではない。たとえば、僖公三十三年伝「遂墨以葬文公」に対しては、「顧曰喪事有進無退、亦所以誇克敵之功、如楚之乘廣自郢戰而先左也」と記される。『左傳杜解補正』には、

喪事有進無退、已墨則不復反衰、故遂墨以葬文公也。後遂以墨爲常則失禮甚矣。蓋以誇克敵之功、猶楚之乘廣自郢之師而先左也。

とあり、これを節録しているわけだが、『輯釋』の該当箇所は顧炎武の引用はない。『集説』の中に名が挙げられている先行注釈書を調べたところ、馮李驊『左繡』に同一の節録が見つかった。これは『左繡』から孫引きが行われた例と考えられる。

このようにして本文・追記の中から孫引きとおぼしきものを消していき、竹添が実際に参照した可能性が高い注釈書を残し、抜き書きが多い順で大まかに並べると、それは次のようになる。ただし参照したか否か明確に判断ができないものは除いた。

安井息軒『左傳輯釋』

亀井昭陽『左傳續考』

姜炳璋『讀左補義』

魏禧『左傳經世鈔』

中井履軒『左傳影題略』

顧棟高『春秋大事表』

秦鼎『春秋左氏傳校本』

馮李驊『左繡』

『輯釋』『續考』の抜き書きが最も多く、『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』がそれに次ぎ、『春秋大事表』はさらに引用回数が減る。『春秋左氏傳校本』『左繡』はまれに取られる。

ここに残った注釈書の数は、『會箋』成本に引かれるものに比べるとはるかに少ない。引用元が明記されない以上、成本にどれほどの先行注釈が引かれているかというのは厄介な問題であるのだが、第二章で取り上げた上野賢知氏の『左氏會箋溯源』および「左氏會箋引用書目」〔⑧〕からある程度は何うことができる。第二章第二節で述べた通り、『會箋』成本に「何某曰」と記して引用される注釈書は、中国では八十八家百五部、日本では十二家十二部に上る。この他、竹添が「何某曰」と一度も記さないまま引用しているものもかなりあるということが、『溯源』を参照すると判明する。『集説』は『會箋』の準備稿というべきものではあるが、成本完成までに竹添はさらに多くの先行注釈調査を行ったと考えられる。ただし、竹添が成本でも多くの孫引きを行った可能性があり、上野氏が『溯源』と「左氏會箋引用書目」で挙げる書名よりも、竹添が実際に参照した数は少なくなると思われる。成本における孫引きの問題については、上野氏自身が前述の馬宗璉を含めていくつか指摘している〔⑨〕。

さて、『集説』には実際に抜き書きがなされた本文・追記の他に書名のみ記した、前章末尾で述べたところの「補記」がある。そこには「彫」「魏」など前述の名が記される場合もあるが、本文・追記にはない書名も新しく加えられている。たとえば以下のようなものが見える。

補釋、補↓梁履繩『左通補釋』

雜案 ↓趙佑『春秋三傳雜案』

存稿 ↓同『讀春秋存稿』
 翼 ↓周大璋『左翼』か？
 詒 ↓洪亮吉『春秋左傳詒』
 俞樾 ↓俞樾『群經平議』

『集説』が引く注釈書の数は成本に比べてはるかに少ないと先ほど述べたが、成本で引用される回数が多いものについてのみ考えると、『集説』の本文・追記・補記はその書名のほとんどを尽くしている。『集説』本文・追記に抜き書きされる『輯釋』『續考』以下に、補記の『左通補釋』などを加えると、『會箋』成本が特に多く引用する文献の書目ができる。

『溯源』を調査して判明したことだが、成本が最も多く引くのは『續考』であり、『輯釋』『左通補釋』がそれに次ぎ、『左傳彫題略』『左傳經世鈔』『讀左補義』『春秋三傳雜案』『讀春秋存稿』『左翼』などの引用も目立つ。これらの書名は、本稿ですでに取り上げたものばかりである。つまり、竹添が自らの注釈書に取り入れようとした基本文献は『集説』作成の時点ですでに定まっております、それらでカバーできない部分を補足しうる諸文献を成本に至るまでに集めていったということができます。作成順で『集説』の次に位置するのは先に述べた二十五冊本（第一稿）だが、『集説』以降に集められた諸文献は二十五冊本に直接書き込まれていったのか、あるいは『集説』と二十五冊本の間に位置する未発見の稿本が想定しうるのか、現時点では判断できない。

三 『左傳集説』の中心となる注釈書

ところで『集説』は、終始一貫した方針の下で作成されたわけではない。その形式には変遷が見られる。それについて少し説明しておきたい。

卷一、三、四は『續考』『輯釋』『春秋大事表』『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』を中心に書かれ、数百字を超える長文の引用がいくつか見える。追記は少なく、必要最小限のもののみ後から追加したという印象を受ける。補記は初め少なく、卷三の半ばからはしばしば記されるようになる。

卷六では、本文で実際に抜き書きされる大半が『輯釋』となる。『春秋大事表』の名はほとんど見えなくなり、『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』はごく短い引用もしくは書名のメモに止まるようになっている。『續考』は本文に全く全て追記として書かれており、それによって追記の量が非常に多くなっている。

卷七、十一、十二では『續考』が再び本文に取られる。本文に抜き書きされるものは『續考』『輯釋』の二つにほぼ絞られ、その他の注釈書は補記に書名を記される場合がほとんどである。全体に長文の引用は減っている。

卷十四では本文から書名が削られて引用元が分からなくなっているが、ほとんどが『續考』の文である。『輯釋』の抜き書きは本文から消え、その他の書名とともに補記に記されるだけとなっている。

以上の変遷は、竹添が情報量と読みやすさを秤にかけながら試行錯誤していった結果であろう。ただし『續考』の扱い方が二転三転している理由はよく分からない。第五章で述べるが『續考』は

文章量が際立って多く、その処理に竹添が苦心したことが推測できる程度である。巻六では『輯釋』を基礎としながら『續考』の要点のみを追記にまとめようとしてかえって見づらいものになったため、巻七以降では『輯釋』と『續考』を並記する形に直した。そして巻十四では『續考』のみを基礎として他の情報を加えることを試みた、ということなのではなからうか。ともかく、『集説』が『輯釋』と『續考』を中心として作成されていることはその形式から判断できる。

そして、『會箋』成本でも、『集説』に抜き書きされた『輯釋』『續考』が活用されている。以下、それを示す例を宣公十二年から取り上げておく〔⑩〕。宣公十二年は『集説』巻七にあり、『輯釋』と『續考』が並記されている。ここでは経文伝文の後に『集説』、成本の順で並べ、『輯釋』と『續考』からの引用部分はそれぞれ「【】」で括って示すこととする。

○得國無赦

『集説』輯曰「言必得鄭國、無赦其罪」。

成本「言必得鄭國、無赦其罪」。

○衛人救陳

『集説』考云【宋曰師、衛曰人、此貶衛之意矣】。

成本【宋曰師、衛曰人、貶衛之意見矣】。

右の二例は、竹添が『集説』に記した『輯釋』『續考』の文を、そのまましくはわずかに手を加えて成本に利用したものである。また、次のように『集説』で引いた『輯釋』『續考』を一つにまとめる場合もある。

○使輓車逆之

『集説』考云【二子經宿不反、故迎之】。「服云輓車屯守之車」。輯云「晉人意不在戰、故使輓車逆之。服說是也」。

成本【二子經宿不反、故迎之】。「輓車屯守之車。晉人意不在戰、故使輓車逆之」。輓徒溫反。

また、次の例では『集説』にはない部分が成本では加えられている。

○且巷出車

『集説』輯云「出車於巷、城陷將巷戰也、其臨于大宮、亦示必死耳。若爲將見遷、既降之後出車未晚也」。

成本「下言師退、鄭人修城、則出車於巷、城陷將巷戰也、其臨于大宮、亦示必死耳」。

この例で成本にある「下言師退、鄭人修城、則」という部分は『集説』には見えないが、実はこれも『輯釋』から引かれたものである。これは『輯釋』に引く惠棟『春秋左傳補注』であり、『集説』の段階では引かなかった惠棟の注文を、成本で採用したものである。竹添が稿を進める際、単に『集説』の抜き書きを使うだけではなく『輯釋』そのものの再確認を行っていることがこれでわかる。次の『續考』も同様である。

○百官象物而動

『集説』考云【此寓軍政於常職者也。物、物官之物也。官有其事、事有其類、不易方而動、軍政存其中、故不戒而備也】。

成本【物、物官之物也。官有其事、事有其類、不易方而動、軍政存其中、故不戒而備也。此寓軍政於常職者、即楚國之令典、而薦敖之所酌古以施於今。故曰擇】。

これは成本の注文が『續考』本来の形であり、『集説』では順序を入れ替えて一部省略したものを、成本で元に戻したのである。

『集説』に抜き書きされた『輯釋』『續考』が『會箋』成本に取られない場合もあるが、概して例えば竹添は『集説』に抜き書きした両書の注文をできる限り利用しようとしている。よって、『集説』に止まらず成本の基本を構成する先行注釈書としては、この二つをまず挙げるべきであろう。

おわりに

『左氏會箋』の準備稿である『左傳集説』を作成する際、竹添の手元には『左傳輯釋』『左傳續考』『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』『春秋大事表』『春秋左氏傳校本』『左繡』などが置かれていたと考えられるが、中心として抜き書きを行ったのは『左傳輯釋』と『左傳續考』であった。これらの先行注釈書を『會箋』成本に至るまで基礎として用いつつ、さらに多くの注釈書を竹添は取り入れていったのである。

『左傳輯釋』と『左傳續考』を中心として取り入れたことが『會箋』に何をもたらしたかという問題については、次章で論じることとしたい。

本章の最後に、竹添が見た先行注釈書のテキストについて、現時点までの調査で判明したことを付記しておく。竹添の旧蔵書は静嘉堂文庫にまとまって収められるほか、いくつかの機関に断片的に残されているが、『春秋』関係書が際だって多いというほどではない。本章で名を挙げた注釈書のうち、以下のものは竹添旧蔵書が現存している。

静嘉堂文庫

趙佑^{ちようゆう}『春秋三傳雜案』『讀春秋存稿』

国立国会図書館

宇野明霞^{うのめいか}『左傳考』

東京都立図書館市村文庫

梁履繩^{りようりじよう}『左通補釋』

『左傳考』『左通補釋』は実物を閲覧したが、書き込みなどは皆無であった。これらについては『左傳集說』に残された情報も少なく、現存する二つが『左傳集說』作成時に用いられたものであるかは判断できない。

趙佑の書は、『靜嘉堂文庫漢籍分類目錄』（一九三〇年）では「讀春秋存稿四卷附春秋三傳雜案十卷」の書名で取られている。これには朱筆の傍点が付され、読み込んだ形跡がある。『左傳集說』で趙佑の書は補記に名が見えるだけだが、『讀春秋存稿』に関しては「存稿三ノ廿四」「存稿四ノ十」などと、巻数に加え葉数を記す場合がある。同書は『春秋』の年代順ではなく項目別にまとめられており、細かい場所をメモしておかなければ後から見返す際に不便であるためと考えられる。『左傳集說』に残された巻数葉数は、靜嘉堂文庫の実物と一致していた。これだけでは決定的な証拠とはならないが、靜嘉堂文庫の『春秋三傳雜案』『讀春秋存稿』が、『左氏會箋』著述に当たって竹添の手元にあった現物そのものという可能性はある。

注

① 上野賢知「左氏會箋三稿」（『斯文』第十四号、一九五六年）。のち、上野賢知『春秋左氏伝雑考』（東洋文化研究所、一九五九年）に収録。

② 『左傳考義』の引用は『亀井南冥昭陽全集』第一卷（葦書房、一九七八年）による。これは岡村繁氏による校訂

本である。

③ 『左傳續考』の引用は『亀井南冥昭陽全集』第三卷（葦書房、一九七八年）による。これは昭陽自筆本の再影印である。引用に際し異体字は改める。

④ 上野賢知「左氏会箋引用書について」（注①前掲書所収）。

⑤ 李洛旻「清代以至近代學者引用馬宗璣《春秋左傳補注》的若干考察」（『經學研究集刊』第九期、二〇一〇年）。

⑥ 『左傳輯釋』の引用は明治十六年山中出版舎本による。

⑦ 高橋智「安井家の蔵書について―安井文庫研究之二―」（『斯道文庫論集』第三十五輯、二〇〇一年）。

⑧ 上野賢知『日本左傳研究著述年表並分類目錄』（東洋文化研究所、一九五九年）。

⑨ 注④前掲論文。

⑩ 本論文付録参照。

第五章 『左傳輯釋』『左傳續考』と『左氏會箋』

はじめに

前章において、『左氏會箋』の準備稿たる『左傳集説』の中心に安井息軒『左傳輯釋』と亀井昭陽『左傳續考』があることを確認した。そして『會箋』成本にあっても、この二つの先行注釈書からの引用が目立つ。本章では、『會箋』が『左傳輯釋』と『左傳續考』からいかなる注を取り込んでいるかを明らかにする。特に『左傳續考』についてはより詳しく論じてみたい。これは、筆者が着目している文章表現に関する注が『左傳輯釋』にはほとんど確認できないのに対し、『左傳續考』にあつてはしばしば見えるためである。

一 安井息軒『左傳輯釋』と『左氏會箋』

安井息軒（一七九九―一八七六）、名は衡、字は仲平、息軒は号である。日向国飫肥藩の藩儒。江戸にて私塾・三計塾を開く。『論語集説』『管子纂詁』『左傳輯釋』などの注釈書を著した。

息軒の『左傳輯釋』（以下、『輯釋』）は明治四年（一八七二）に初めて刊行された。本書については上野賢知氏による簡略な解説がある^①。また、古賀勝次郎氏が息軒の著した注釈書について論じる中で本書を取り上げている^②。上野・古賀両氏は、主に『輯釋』の序を引用することで本書の内容・価値について説明している。以下、両氏の論考を参考にして『輯釋』に見える息軒の注釈方法につ

いて述べる。

息軒は『輯釋』自序で、杜注を「喜びて故訓こくんを廢し以て臆説おくせつを逞たくましくす」と批判している「③」。そして清朝考証学者たちの説について「故訓に原もとき文義に據より、博引廣證、以て其の謬びようを正す」と、杜注を補正するものとして評価しながらも、それぞれに得失があるとする。そして自らの注釈として「非を去り是を收おさめ、務めて至當を求め、備はらざる所有らば附するに管見を以てし、一に故訓を折衷す」と述べている。第四章第二節で述べたように、息軒は清朝考証学者の学説を日本でいち早く受容した人物であり、『輯釋』の基礎にも清朝考証学者の『左傳』説があった。その一方で、邦人の『左傳』注釈書としては中井履軒『左傳彫題略』しか見ることができなかった旨を、息軒は『輯釋』凡例で述べている。

『輯釋』については、訓詁に詳しいという特徴を挙げることができる。杜注の訓詁を補正し、杜注が言及しない字句についても説明をしばしば加えている。たとえば、隱公元年伝「夫人將啓之」について、杜注に「啓、開也」とあるのに対し、『輯釋』は「開、猶言導」と注する。杜注のいう「開」の字義について、補足の説明を行っているのである。また、隱公三年伝「若以大夫之靈、得保首領以没」に杜注はないが、『輯釋』は「靈、猶寵也」と訓詁を加えている。また、同三年伝「取溫之麥、秋又取西周之禾」の杜注「言取者蓋芟踐之也」について、『輯釋』は杜注に対する傳遜ふそんの反駁を引くとともに、「禾」の字義についても説明を加えている。

そして『會箋』は、『輯釋』の訓詁を多く取り入れている。右に挙げた「開、猶言導」「靈、猶寵也」という訓詁は、『會箋』成本にそのまま見える。また、隱公三年伝「取溫之麥、秋又取西周之禾」については、『輯釋』の要点を摘録して記している。

『輯釋』は、『會箋』が出るまでに世に広く行われていた。また、竹添の師に当たる木下犀潭きのしたさいたんは息軒の親友であり、息軒の学問に竹添が影響を受けたことが古賀氏によって指摘されている〔④〕。そのような事情を勘案すれば、竹添が『輯釋』を参照するのは自然であり、見るのも容易だっただろう。だが、『會箋』は訓詁について全面的に『輯釋』に依拠しているわけではない。というのは、竹添は息軒が参照できなかった注釈書をも広く利用して自らの注を作っているからである。『左傳雕題略』しか見られなかった息軒に対し、竹添は邦人の『左傳』注釈書を広く利用している。第二章第二節で挙げたリストを、『輯釋』を除いて再度示してみよう。

中井 積徳（履軒）『左傳雕題略』

増島 固（蘭園）『讀左筆記』

大田 元貞（錦城）『左氏傳杜解糾謬』

古賀 煜（侗庵）『左氏探蹟』

亀井 昱（昭陽）『左傳續考』

海保 元備（漁村）『左傳補證』など

猪飼 彦博（敬所）『西河折妄』

松崎 復（慊堂）『左氏經傳校譌』

吉田 漢宦（篁墩）『近聞寓筆』

山本 信有（北山）『左傳杜解駁義』

近藤 元粹（南洲）『増註春秋左氏傳校本』

伊藤馨（鳳山） 『左傳章句文字』

訓詁に限定して調べても、息軒が参照できなかった注釈書を竹添が引用する例が見つかる。たとえば、宣公十二年伝「守陴者皆哭」について、杜注には「陴、城上僻倪」とあり、補正の必要を認めなかったためだろうが『輯釋』は注を付けていない。しかし『左傳續考』はこの箇所「蓋字从卑。短垣之義。釋名城上垣曰陴。於其孔中陴倪非常。亦云陴裨也。裨助城之高也。案僻倪似後生名。釋名似以通言釋古字。…」と注し、『釋名』を引いて説明を加えている。『釋名』そのものは『左傳正義』ですでに引かれているが、案語は亀井昭陽本人のものである。『會箋』ではこの箇所について、『續考』所引『釋名』と昭陽の案語をあわせて引いている。また、宣公十二年伝「以待不虞、不可謂無備」には息軒の注がないが、『會箋』は伊藤鳳山『左傳章句文字』を引用し「待亦備也。周語況在侈卿乎。其何以待之。韋注待猶備也」と注している。

このように、『會箋』は訓詁については主に『輯釋』に拠りつつ、それ以外の注釈書の説も広く取り入れていったのである。『會箋』と『輯釋』の関係について、鎌田正氏は「『會箋』は邦儒並びに中国左伝家の注をあまねく引用しなかった『輯釋』の不備を補わんがために作られたものではないかと想定する」と述べている^⑤が、この指摘はある程度納得できるものである。しかし『輯釋』に比して『會箋』の注釈内容は豊富であり、『輯釋』がほとんど触れない問題についても『會箋』は言及している。例を挙げれば、『左傳』の登場人物に対する人物評や、『左傳』の文章表現に関する解説などである。『會箋』に豊富な注釈内容をもたらした要因の一つに『左傳續考』の受容がある。以下、『左傳續考』について論じてみよう。

二 『左傳續考』に関する先行研究

『會箋』成本において最も多く引用される先行注釈書は、亀井昭陽の『左傳續考』（以下、『續考』）である。竹添は『會箋』自序において「亀井氏 最も詳備たり」と評しており、本邦の『左傳』注釈書として『續考』を重要視していたことが伺える。本節以下では『續考』について紹介するとともにその特徴を述べ、『會箋』が同書をいかに受容したかを明らかにする。

『續考』に関する先行研究を取り上げておこう。筆者が知りえたものは以下の通り。

- ・岡村繁『『左傳續考』解説』（『亀井南冥昭陽全集』第三卷、葦書房、一九七八年）
- ・阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」（『斯道文庫論集』第十六輯、一九七九年）
- ・岡村繁「竹添井井の『左氏会箋』が剽窃した一つの種本」（『漢語漢文の世界Ⅱ』溪水社、一九八四年）
- ・柳本實「『左氏会箋』と『左伝續考』について」（『東方』五十八号、一九八六年）
- ・坂本慎一「福沢諭吉と亀井学の思想―福沢における「縦に慣れたる資力」とは何か―」（『近代日本研究』第二十巻、二〇〇三年）

『會箋』が『續考』を多く引くことは上野賢知氏の『左氏會箋溯源』を参照することでわかるが、前述の通りこれは発表された研究ではない。この問題について、公表された論考の中で初めて指摘し

たのは岡村繁氏である。第二章および第四章で触れた内容と重複する部分があるが、改めて取り上げておこう。岡村氏は『左傳續考』解説（以下、岡村解説）で次のように述べている。

『會箋』が「亀井昱曰」と標して『續考』の所説を直接援用する箇所は、実に二十二か条にも上る。のみならず、『會箋』が『續考』を長文にわたって盗用し、あたかも自説のごとく注解した箇所に至っては、もはや数うるに暇がないほどであって、甚だしきは隠公元年伝「夷不告、故不書」の箋のごとく、百余字もの長文にわたって『續考』をそのまま引き写したもののさえある。

また同氏は、「竹添井井の『左氏会箋』が剽窃した一つの種本」でも、竹添が『續考』から『左傳考義』を孫引きする例が『會箋』に数多く見えることを指摘する。

岡村氏が竹添に対して行った批判と、柳本實氏が部分的に行った弁護については第二章で触れた。その際も述べたが、本論文は竹添が引用に当たって取った態度をどう評価すべきかという問題には立ち入らない。『會箋』が『續考』をいかに利用したかという点についてのみ検討してみたい。

『會箋』がどの程度『續考』を引用しているかという問題について、柳本實氏が『會箋』の前半部分を対象として大まかな数字を挙げている。それによれば、『會箋』箋文の一割から二割が『續考』からの引用によって占められているということである。筆者は『會箋』一年分、隠公六年についてのみ箋の文字数を数え、『續考』からの引用がどれほどあるかを調べた（その際、『左氏會箋溯源』を利用した）。その結果、六年経文に付された箋は計三百八十二字、そのうち『續考』からの引用は百十四字であった。文字数の約三十パーセントが『續考』からの引用で占められる。伝文の箋は計千五百七十九字、『續考』からの引用は三百四十七字。約二十二パーセントが『續考』の注文である。

三 亀井昭陽と『左傳續考』

亀井昭陽（一七七三～一八三六）は福岡藩儒。亀井南冥の長子であり、南冥・昭陽と連なる学問は「亀井学」と称される。

『左傳續考』は、南冥が残した『左傳考義』を継承発展させ、諸家の説を博く引きつつ論証を行ったものである。岡村解説によれば、昭陽は文政九年（一八二六）に『續考』撰述を開始し、文政十一年（一八二八）六月二日には初稿三十巻を脱稿、翌日には『續考附録』七篇を作成した。さらに七月には初稿の補訂と書き直しに取りかかり、翌年二月までに巻一より巻五の書き直しを終えた。巻六より巻三十については全面的な書き直しはせず、初稿の行間や欄外に補訂を書き込んだ。そのうち巻六より巻十四までは書き込みだけでは追いつかず、『續考補』一卷を別冊として作成した。その後二回目の補訂を経て、天保二年（一八三一）冬に本書は完成した。

『續考』には刊本がなく、写本のみで伝えられている。大正六年に昭陽自筆本が影印されており、『亀井南冥昭陽全集』（以下、『全集』）第三・四巻に収められた『續考』は大正六年本を再影印したものである。岡村解説には昭陽自筆本の行方はわからないと記してあるが、現在これは慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に蔵されている。阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」および慶應義塾大学斯道文庫編『慶應義塾大学附属研究所斯道文庫貴重書蒐選図録解題』〔⑥〕によれば、昭和三十四年に亀井家関係の著述が斯道文庫に寄贈され、その中に『續考』自筆本が含まれていたという。亀井南冥昭陽全集刊行会が『全集』の編集を行う際に斯道文庫は資料提供の協力を行ったというが、『續考』自筆本

については刊行会に情報が伝わらず、全集は大正六年の影印本を用いることになったとおぼしい。

自筆本以外に、写本が無窮會・九州大学・関西大学などに蔵されているが、伝本の数は少ない。

大正六年の影印本だが、これは印刷がやや不鮮明である。また、自筆本に朱筆で施されている傍点・圈点が影印時に文字に被さり、判読しにくくなった部分がある。『全集』所収『續考』は大正六年本を縮小影印したため、さらに読みにくいものとなっている。『全集』に『續考』が収められることで初めて同書を容易に参照しうるようになったのであるが、利用しやすいテキストであるとは残念ながら言いがたい。本論文における『續考』の引用には『全集』を用いるが、判読しにくい文字は大正六年本を参照した。

大正六年影印本に先立ち、『續考』を多く引く『左氏會箋』が明治三十六年に刊行され、同四十四年に富山房漢文大系に収められたことにより、『續考』の内容が初めて人々の目に広く触れることとなった。もっとも、昭陽の名はほとんどの場合記されず、『續考』の注文であることが読者には分からないという形ではあるが。

『續考』の体裁は、『左傳』の語句を標示した上で注釈を施すというものである。『考義』を初めとする先行注釈が割注の形で引用され、昭陽の案語が適宜加えられている。『續考』の外面的特徴としては、まずその膨大な文章量が挙げられる。坂本慎一「福沢諭吉と亀井学の思想―福沢における「縦に慣れたる資力」とは何か―」では、『續考』とその他の注釈書の分量の比較を行っている。それによると、『左傳』本文がなく注釈だけの『續考』が四千七百頁に及ぶのに対し、安井息軒『左傳輯釋』は本文を含めて約二千六百十頁であり、『續考』の分量の方がはるかに多い。また、たとえば清朝の『左通補釋』や『春秋左氏傳注疏校勘記』も、総分量は『續考』の三分の一から四分の一程度だと

いう。まさに竹添が「龜井氏 最も詳備たり」と述べる通りの、詳細極まる『左傳』注釈書である。ちなみに『全集』にあつては、上下二段組みで約千二百頁となっている。

四 『左傳續考』の特徴と『左氏會箋』における受容

第二章第二節および本章前節で取り上げた岡村氏と柳本氏の論考は、竹添が『續考』を引用する際の形式に着目したものであり、『續考』の内容そのものには触れていない。岡村解説と阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」も概説的な記述が中心で、『續考』の個別の注にはほとんど触れていない。『續考』の具体的な内容に踏み込んだ先行研究は、管見の限り坂本氏の論考がほぼ唯一のものである。坂本氏は亀井家の左伝学と福沢諭吉の思想について論じ、『續考』を中心とする亀井家左伝学は「国の独立」を重視する国際政治学であり、福沢の思想には亀井学からの連続性を確認できると述べている。また、坂本氏は『左氏會箋』についてもわずかに言及し、亀井家の政治思想を明治期の外交官たる竹添も継承していたとする。

『續考』の中には様々な性格を持つ注が含まれるが、『左傳』の文章表現に関する注も見える。本節ではそのような性格を持つ『續考』の注を取り上げ、『會箋』がそれらをどのように取り入れているか論じる。

隠公元年に見える著名な一段、鄭の莊公と共叔段の兄弟争いの場面において、『續考』の一側面についてその典型例を見ることが出来る。以下、その場面について『左傳』の現代語訳をまず挙げ、次に原文と『續考』を引用する。『續考』には伝文の語句のみが標示されているので、伝文の引用にも

便宜的に『會箋』を用いる。『續考』で太字にしたのは、『會箋』成本においてそのままの形、もしくは表現を多少変えて引用されているものである。『續考』原本で割注になっている箇所は、引用の際に（ ）で括弧して示す。

その昔、鄭の武公は申より武姜という夫人を迎え、莊公と共叔段が産まれた。莊公は逆子で産まれて姜氏（武姜）を驚かせたため、寤生と名付けられ、やがて憎まれるようになった。武姜は共叔段の方をかわいがり、太子に立てたいと思っていた。たびたび武公に願ったが、公は聞き入れなかった。莊公が即位したとき、武姜は段を制（邑の名）に封じてほしいと請うた。莊公は「制は險阻な邑で、虢叔がここで死んでいます。他の邑ならば仰せの通りにしましょう」と言った。京を請うたので、そこにおらせた。段は京城大叔と呼ばれるようになった。

祭仲（鄭の大夫）は言った。

「大邑の城壁が百雉を越えるのは、国都にとっては害となります。先王の掟では、大邑でも国都の三分の一を越えず、中は五分の一、小は九分の一までとなっています。ところが今、京は広くなりすぎて決まりに則っておりません。わが君はじきに耐えられなくなりましょう」。

公

「姜氏がお望みなのだ。害となることでも避けられぬ」。

答えて言う。

「姜氏は満足というものをご存じない。はやく手を打った方がよろしい。はびこらせてはなりませんぞ。はびこってしまったえば手の打ちようがなくなります。はびこった草でさえ除くことはできず、まし

てや栄えある弟御ですぞ」。

公

「不義のことばかり行っていれば必ず自滅する。まあしばらく待っておれ」。

やがて、大叔（段）は西郊と北郊の邑を公より離反させ自分に従わせた。

公子呂は言った。

「二心を持つ者が多くては国が成り立ちません。わが君はどうなさるおつもりですか。大叔に国を与えるおつもりなら、私はあちらに仕えさせてもらいます。お与えにならないのなら、あれを除かれませ。民に二心を抱かせてはなりません」。

公

「無用だ。あれは自分で禍を招く」。

大叔はさらに西郊と北郊の邑を完全に自分のものにしてしまい、それは麋延にまで到った。

子封（公子呂）

「もうよろしいでしょう。向こうは味方を多く得ようとしていますぞ」。

公

「不義を行えば人はなつかない。多くてもじきに崩れる」。

大叔は城を固め兵糧を集め、武器を補修し、兵卒兵車を率いて鄭の国都を襲おうとした。夫人（姜氏）が手引きする予定であった。公は決行の日取りを聞きつけ、「もうよいぞ」と言い、子封に命じ車二百乗を率いて京を伐たせた。京は大叔段に背き、段は鄆に入った。公は彼を鄆で伐った。五月辛丑、大叔は共に出奔した。

（経文には）「鄭伯、段に鄆に克つ」とある。段は弟としてのあり方を踏み誤ったので、「弟」と

は記さなかったのだ。二人の君主がいるような争いなので、「克つ」と記したのだ。「鄭伯」と呼んだのは、教え導くことができなかった点を批判しているのである。これを、「鄭志」という。「出奔」と記さないのは、そう書くことをはばかったためである。

莊公はその後姜氏を城潁に置き、「黄泉の国に行くまで会うことはしない」と誓ったが、やがてそれを悔いた。潁谷の封人である潁考叔はそれを耳にし、公に貢ぎ物を捧げた。公が彼に食事を与える、と、食べながら肉を取り分ける。公がその訳を尋ねると、「私には母がおりますが、いつも私がしつらえる食事ばかり食べ、わが君の羹などいただいたことがあります。持ち帰ってやりたいのです」と答える。

公

「お前には持ち帰ってやるような母がいる。ああ、私にはいないのだ」。

潁考叔

「それはどういふことでしょう」。

公は彼に理由を語り、悔いていることも話した。潁考叔は答える。

「わが君にはご心配なさいますな。泉が出るまで穴を掘り隧道を作ってお会いすれば、話が違ふなどと誰も言わぬでしょう」。

公はそれに従った。公は隧道に入り詩を賦した。「大隧の中、その楽しさはなごやかに」。姜氏は隧道を出てから詩を賦した。「大隧の外、その楽しさはのびやかに」。こうして元通りの母子となった。

君子はいう。「潁考叔は篤孝の人物だ。自分の母を愛し、それを莊公に及ぼした。詩に『孝子匱しからず、永く爾が類を錫う』とあるのは、このことであろうか」。

初、鄭武公娶于申、曰武姜（1）。生莊公及共叔段。莊公寤生（2）、驚姜氏。故名曰寤生、遂惡之（3）。愛共叔段、欲立之。亟請於武公、公弗許（4）。及莊公即位（5）、爲之請制（6）。公曰「制、巖邑也、虢叔死焉（7）。他邑唯命」。請京、使居之。謂之京城大叔（8）。祭仲曰「都城過百雉、國之害也。先王之制、大都不過參國之一、中五之一、小九之一。今京不度、非制也。君將不堪」。公曰「姜氏欲之、焉辟害（9）」。對曰「姜氏何厭之有。不如早爲之所（10）、無使滋蔓（11）。蔓、難圖也。蔓草猶不可除、況君之寵弟乎（12）」。公曰「多行不義、必自斃。子姑待之（13）」。既而大叔命西鄙北鄙貳於己（14）。公子呂曰「國不堪貳（15）、君將若之何。欲與大叔、臣請事之。若弗與、則請除之（16）。無生民心」。公曰「無庸。將自及（17）」。大叔又收貳（18）以爲己邑、至于廩延。子封曰「可矣。厚將得衆」。公曰「不義、不暱（19）。厚將崩（20）」。大叔完聚、繕甲兵、具卒乘。將襲鄭、夫人將啓之（21）。公聞其期、曰「可矣」。命子封帥車二百乘以伐京。京叛大叔段（22）。段入于鄆。公伐諸鄆。五月辛丑、大叔出奔共。書曰「鄭伯克段于鄆」、段不弟、故不言弟（23）。如二君、故曰克。稱鄭伯、譏失教也。謂之鄭志（24）。不言出奔（25）、難之也（26）。

遂寘姜氏于城潁、而誓之曰「不及黃泉、無相見也」。既而悔之。潁考叔（27）爲潁谷封人（28）。聞之、有獻於公。公賜之食。食舍肉。公問之。對曰「小人有母、皆嘗小人之食矣（29）。未嘗君之羹（30）、請以遺之」。公曰「爾有母遺。繫我獨無」。潁考叔曰「敢問何謂也」。公語之故、且告之悔。對曰「君何患焉。若闕地及泉（31）、隧而相見、其誰曰不然」。公從之。公入而賦「大隧之中（32）、其樂也融融」。姜出而賦「大隧之外、其樂也泄泄」。遂爲母子如初。君子曰「潁考叔、純孝也。愛其母、施及莊公。詩曰『孝子不匱（33）、永錫介類』、其是之謂乎」。

(1) 蓋大雅申伯之女孫歟。

(2) 考義從風俗通（云凡兒墮地能開目視者謂之寤生）。案辨誤取是說。考義似脫辨誤字。（史記評林王世貞亦引風俗通）。

(3) 應「驚」字也。言及成長、遂惡之。（世家生之、難及生、夫人弗愛）。

(4) 武公賢、鄭人所爲賦繙衣也。

(5) 據年表、在春秋前二十一年。

(6) 姜氏似既有志。

(7) 莊公亦有心。佯爲愛弟者而拒之。虢叔怙勢、爲鄭所滅。出鄭語。

(8) 一句極有神采。詩序曰「叔多才而好勇、不義而得衆」、是也。此乃衆人所尊稱、以爲祭仲諫首引。杜似未達。

(9) 莊公心計既決、何等模寫。「害」字受「國之害」也。秦氏不了（或云稱母曰「姜氏」、非人子之言。意是左氏口語耳。非有意也）。申生稱麗姬曰「姬氏」、趙盾稱適母曰「君姬氏」。

(10) 言定其處置也。傅氏得之。

(11) 蔓字義重。猶曰「愈蔓」。

(12) 公不友而有害心。故激之。

(13) 公之心始形於言。亦激也。

(14) 貳而從己也。字例多出。杜何故異說。

(15) 應「君將不堪」。考義當矣（云貳者益多、國非其國。故曰「不堪貳」。疏云「兩屬則賦役倍、

故國人不堪」，似是而非）。

(16) 應「蔓草猶不可除」之「除」。公既有待斃之言。故此語比再祭仲「早爲之所」、則全無忌憚。

(17) 注當作「將自及禍」。不然、失語勢矣。

(18) 「討貳」「勸貳」之「貳」（莊十四年勸貳而可以濟事）。考義、上曰「貳於己」、故曰「又」。

(19) 「義」下插「則」字看。考義確矣（云不義者必失衆心也。應上「多行不義」。杜誤）。

(20) 晉語猶無基而厚墉。其壞也無日矣。此段五「將」字在言語上、二「將」字在敘事上。

(21) 二「將」字、成十三年（子臧將亡、國人將從之。成公乃懼）哀公四年（吳將沂江入郢、將奔命焉）一法也。

(22) 果然崩也。烏合之衆不曜。

(23) 不著段之爲弟也。「不言」「不曰」、字例大異。

(24) 不教而殺、此鄭伯之宿志也。上文鄭伯之四言、並模寫是志者。

(25) 不言其出奔也。與「不曰出奔」大異。

(26) 考義優矣（云難者、難詰也。以鄭伯之志在於必殺、故書曰「鄭伯」、以成其志。段實出奔而如不得出奔者、以難詰其殘忍也。杜注無害、而此說亦不可棄、備爲一說）。克者、獲殺之義。

(27) 考義明矣（云穎、穎谷之穎。八年所謂以邑爲族者。猶祭封人祭足）。

(28) 疏云「祭封人・蕭封人・儀封人、皆以地名。封人、蓋居在邊邑。穎谷・祭・儀、是國邊邑」。秦說好（云城穎、許州臨潁縣潁水出陽城之潁谷。林注、姜氏在考叔治內、故知其困苦）。

(29) 先考云「皆、皆食」、亦通。案襄二十一年「皆有賜於其從者」。

(30) 考義、傳遜以禮食辨杜誤、得矣（案羹亦禮食、不獨賜賤官）。案疏亦可念（云燕食皆有牲體殺馘、非徒設羹而已。此與華元饗士、唯言有羹。故疑之）。內則、羹食、自諸侯至庶人無等。

(31) 考義、**是考叔之宿構。「及」字與前「及」字影應。**用字妙矣。

(32) 考義取疏（疏云蓋所賦之詩有此辭、傳畧而言之）。然所賦止是二句、亦未可知十畝之間孰先孰後。

(33) **德不孤必有隣之謂也。**

ここに挙げた『續考』の注には、『左傳』の文章表現に関わる指摘が見える。たとえば伝文「遂惡之」について(3)「應「驚」字也」と注し、それより前の「驚姜氏」に対応した文字が用いられていることを指摘する。また公子呂の発言「請除之」について(16)「應「蔓草猶不可除」之「除」と注し、祭仲の発言「蔓草猶不可除」に対応していることを指摘する。(9)「「害」字受「國之害」也」、(15)「應「君將不堪」」、(19)「應上「多行不義」」、(31)「「及」字與前「及」字影應」などの例も同様である。『續考』は『左傳』に見える文章表現の対応関係について、主に文字のレベルで解説を加えているのである。

これらの注は、『會箋』の稿が進むにつれてその中に取り入れられている。隠公の範囲は『會箋』稿本の全てに見えるが、上述の注がどの段階で取られたか調査した。その結果を以下に記す。注文の下に記した「集・一・二・三・四・成」は、それぞれ集説・第一稿・第二稿・第三稿・第四稿・成本がそれを取っていることを表す。

(3) 應「驚」字也。言及成長、遂惡之。(集・一・二・三・四・成)

(9) 「害」字受「國之害」也。(四・成)

(15) 應「君將不堪」。(なし)

(16) 應「蔓草猶不可除」之「除」。(二・三・四・成)

(19) 「義」下挿「則」字看。：應上「多行不義」。(集・一・二・三・四・成)

(31) 「及」字與前「及」字影應。(四・成)

(3) (19) は集説より一貫して取られている。(16) は第二稿以降取られる。(9) (31) は第四稿以降取られる。(15) 「應「君將不堪」」のみは成本に至るまで取られていない。

文章表現の対応関係を指摘するこのような注は『續考』全体に渡ってしばしば見え、それには主に「○○應□□」「○○受□□」という形式が用いられる。そしてそのような注の相当数が『會箋』の中に取り入れられているのである。

おわりに

『左氏會箋』は訓詁については、清朝考証学の成果を受け継いだ『左傳輯釋』を基本としながら、安井息軒が参照できなかった諸注釈書を用いてそれを補正していった。また、『輯釋』があまり詳しく論じない問題について諸注釈書を引いており、それによって内容上の膨らみを有している。その際に大きな役割を担ったと考えられるのが『左傳續考』である。

『續考』には、主に文字のレベルで『左傳』の文章表現を解説するという特徴がある。そのような注が『會箋』の中に取り込まれ、『會箋』そのものの特徴にもなっている。

だが『會箋』の中には、文字を超えて段落・篇のレベルで『左傳』の文章表現を説明もしくは批評する箋が存在する。そのような注は、『會箋』よりも前に竹添が刊行した『左傳』評注書の中により顕著に見える。次章では『會箋』以前に遡り、竹添が『左傳』の「文法」に対して行った解説について論じる。

注

- ① 上野賢知『春秋左氏伝雑考』（東洋文化研究所、一九五九年）百四〇～百六頁。
- ② 古賀勝次郎「安井息軒の著作（上）——安井息軒研究（三）——」（『早稲田社会科学総合研究』第八卷第三号、二〇〇八年）。
- ③ 『左傳輯釋』の引用は明治十六年山中出版舎本による。
- ④ 古賀勝次郎「安井息軒を継ぐ人々（三） 島田篁村・岡松甕谷・竹添井井——安井息軒研究（八）——」（『早稲田社会科学総合研究』第十一卷第一号、二〇一〇年）。
- ⑤ 鎌田正「痴人の夢」（『新釈漢文大系』五十三季報、明治書院、一九七七年）。
- ⑥ 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、一九九七年。

第六章 『左氏會箋』以前における竹添進一郎の『左傳』評注書

はじめに

ここまで『左氏會箋』について論じてきたが、本章では『會箋』以前に竹添が刊行した『左傳』評注書を取り上げる。『會箋』明治講学会本の出版を遡ること約二十年、竹添は明治十七年（一八八四）に『左傳鈔』と名付けた『左傳』評注書を奎文堂より刊行している。ただ、これは竹添が独自に編んだものではなく、種本というべき文献が存在していた。

本章では、『左傳鈔』をその種本を比較しつつ、刊行の目的について考察する。あわせて、『左傳鈔』と『會箋』の関係についても調査し、『左傳鈔』が後の『會箋』といかに関係するかを明らかにしたい。

一 竹添進一郎『左傳鈔』と高塘『左傳叢鈔』

明治十七年、奎文堂は竹添の名を冠した『左傳』関係の評注書を四種類刊行しており、『左傳鈔』はその一つである。まずは以下に四種の書誌情報を挙げておく。

『左氏五大戰記事』一卷一冊

竹添井井校閱、竹添利鎌鈔録。明治十七年七月。

『左傳文法舉要』一卷一冊

方苞（望溪）評、竹添井井校閱、竹添利鎌鈔録。明治十七年九月。

『左傳鈔』四卷四冊（『評注歷代古文鈔』の一）

竹添井井鈔録、竹添利鎌訓点。明治十七年九月。

『評注左氏戰記』二卷二冊

竹添井井校閱、竹添利鎌鈔録。明治十七年十二月。

これらは相互に独立して編まれたものではなく、『左傳鈔』以外の三種は同書の抜粹というべきものである。そのため、以下『左傳鈔』を中心として論を進める。

なお、四種全てに関わっている竹添利鎌なる人物については経歴がよくわからない。『左傳鈔』の刊記によれば進一郎と同じ熊本県士族であり、進一郎と同一の住所が記されている。進一郎の身内であることは疑いないが、具体的な関係は未詳である。

さて、竹添は明治十七年から十八年にかけて『評注歷代古文鈔』と題した古文の選集を奎文堂より刊行しており、『左傳鈔』はその第一集である。『左傳鈔』の他に『國語鈔』『國策鈔』『史記鈔』『漢書鈔』が刊行されており、それぞれ『左傳』『國語』『戰國策』『史記』『漢書』を抄録し評注を施している。奎文堂の広告文によれば、さらに『八家鈔』『歸餘鈔』の刊行が予定されていたようだが、この二つは未刊で終わっている。

「はじめに」で述べたように竹添の『左傳鈔』には種本が存在するのであるが、『評注歷代古文鈔』そのものが（清）高塘『高梅亭讀書叢鈔』を抄録したものである。高塘①は乾隆期の人、その『高梅亭讀書叢鈔』も古文の評注書であり、『左傳鈔』『國語鈔』『國策鈔』『史記鈔』などから成っている。両者の関係についてはすでに指摘が行われているので、以下それを紹介してみたい。なお、これより高塘の評注書を『讀書叢鈔』『左傳叢鈔』、竹添のそれを『歷代古文鈔』『左傳鈔』と表記し区別する。『國語』以下についてもそれに準じ、先行研究を引用する際にもこの表記を用いるのでご了承ください。

○市島謙吉（早稲田大学初代図書館長）の指摘

市島謙吉『訪書筭記』②に、高塘『左傳叢鈔』に関する記載が見える（明治四十年十一月起草分）。早稲田大学図書館に『左傳叢鈔』など『讀書叢鈔』の一部が寄贈され、それを市島が調べて記したもの。寄贈された『讀書叢鈔』は竹添進一郎の旧蔵書であり、竹添による校訂・加除が施され、所々が切り取られていたという。

市島は竹添が本書を種本として用いたことには気づいたが、明治十七年刊行の『左傳鈔』には触れずに『左氏會箋』に言及し、『會箋』を『左傳叢鈔』からの「切抜き細工」と称して批判している。後述するように『會箋』は『左傳叢鈔』とは別個の注釈書なのであるが、市島は竹添の『左傳鈔』と『會箋』を混同していたらしい。おそらく『左傳叢鈔』を調べるよりも前に竹添の『左傳鈔』を見てはいたが、それが『會箋』であると誤って記憶していたのであろう。不正確な部分はあるものの、高塘『左傳叢鈔』と竹添『左傳鈔』の関係を指摘したのは市島が初めてである。

○上野賢知の指摘

昭和二十年代末、上野賢知氏は『訪書筭記』を手がかりに、早稲田大学所蔵竹添旧蔵『左伝叢鈔』を調査した。その結果は「左氏會箋三稿」（『斯文』第十四号、一九五六年）に記されている。上野氏は竹添の『左傳鈔』を紹介して市島の記憶違いを正し、『左傳鈔』が『左伝叢鈔』を抄録したものであることを明らかにしている。上野氏の指摘を、以下にまとめてみよう。

・高塘『左傳叢鈔』は『左傳』より三百二十二篇を選び、行間と欄外に評語を記す。各篇末には兪桐川馮李驊『左繡』・魏禧『左傳經世鈔』などの批評を引き、高塘本人のものと思われる評語も付される。

・竹添『左傳鈔』の体裁は『左傳叢鈔』と全く同じだが、取るのは九十九篇と少ない。

・『左傳鈔』中、隠公元年「鄭伯克段於鄆」末の評は、兪桐川魏禧のものは『左傳叢鈔』と同一である。高塘の評は抄録され、帰有光の評が新たに追加されている。

また、上野氏は明治十七年刊行の『評注左氏戰記』『左傳文法舉要』についても指摘しているので、その内容をまとめておく。

・『評注左氏戰記』は『左傳鈔』より二十二篇を取り、『國語鈔』より二篇を抜いて編んだもの。『左傳文法舉要』は、『左傳鈔』より方望溪『左傳義法舉要』に収める六篇を取り出し、方望溪の評を朱刷で追加したもの。

ところで市島・上野両氏が調査した竹添旧蔵の高嶮『左傳叢鈔』だが、これは早稲田大学図書館に現存する。同図書館には他に竹添旧蔵『國語叢鈔』『國策叢鈔』『歸餘叢鈔』も収められる。筆者は同図書館に『左傳叢鈔』の閲覧を申請したが、破損がひどく資料保護の観点から許可できないとの回答を得た。『國語叢鈔』『國策叢鈔』は早稲田大学古典籍総合データベースで画像が公開されているが、現段階で竹添旧蔵『左傳叢鈔』を見ることはできない。高嶮『讀書叢鈔』を所蔵する機関は少ないが、『華東師範大学図書館蔵稀見叢書匯刊』の一つとして二〇〇七年に影印されているので、今回はその影印本によって調査を行った。以下、『左傳叢鈔』と『左傳鈔』をより細かく比較して、市島・上野両氏の指摘を補ってみよう。

高嶮『左傳叢鈔』の体裁を簡単にまとめれば以下のようになる。

- ・割注として杜預および林堯叟りんぎょうそう（『左傳句讀直解』さでんくどうちよつかい）の注を摘録する。それに補足を加える場合もある。
 - ・伝文に段標を打ち、段落分けを行う。
 - ・行間および欄外に文評を付す。行間では『左傳』の用字を主に解説し、欄外では段落ごとに批評を行う。
 - ・各篇末では、篇全体に対する評語が記される。文評に加え、道義的議論・歴史的議論も行われる。
- 上野氏が指摘する兪桐川・『左傳經世鈔』以外に、（清）浦起龍ほきりよう『古文眉詮』こぶんびせんも目立って多く引かれる。

割注で施される補足は杜注・林注の内容を大きく越えるものではなく、割注の部分に高嶮の独自性と称すべきものは見られない。

『左傳叢鈔』の特色は、字句・段落・篇それぞれのレベルにおいて『左傳』の文章表現を詳細に解説するという所にあり、それは行間・欄外・篇末でそれぞれ行われる。

一つ例を挙げてみよう。『左傳叢鈔』が取る第一篇に当たる、隠公元年「鄭伯克段于鄢」である。これは鄭の莊公と共叔段の兄弟争いを描いた著名な篇である。高嶮はこの篇を六つの段落に分けているので、まずはそれに合わせ以下に概要を六段落で簡単にまとめておく。

第一段。隠公元年以前のエピソードとして記される。鄭の夫人・武姜は息子である莊公を嫌い、莊公の弟である共叔段を愛していた。段を太子に立てようとして果たせず、彼を京という大邑に住まわせた。

第二段。祭仲・公子呂は勢力を拡大する段に対して手を打つよう莊公に進言するが、段はじきに自滅すると言って莊公は行動を起こさない。

第三段。段と武姜による反乱計画を察知した莊公は公子呂に段を討伐させ、段は出奔する。

第四段。經文「鄭伯克段于鄢」の解説。

第五段。莊公は黄泉の国に行くまで武姜と再び会うことはしないと誓ったが、それを後悔する。それを聞きつけた潁考叔えいこうしゅくの進言に従い、隧道トンネルを掘ってその中で武姜と再会し、そして和解する。

第六段。潁考叔の孝を讃える「君子」の言葉。

この篇に高嶮が付した注をいくつか取り上げてみよう。まずは行間に施された旁注について。伝文の冒頭には「初」とあるが、ここには「追叙法」と注を付けている。時間を遡り事件の由来を記す技法であることを解説したものである。また、第三段に見える莊公の言葉「可矣」には、「辣手なり。前の『焉避害』以下の四層、全く此の句が爲に勢を聚む」と注する。段の害を説く祭仲・公子呂に対し、莊公は「母の望みなのだ」「段はいずれ自滅する」という返答を四度に渡って返しているのだが、それらはこの「可矣」（もうよいぞ―段を伐て）を導くために置かれているという解説である。

また欄外注についていえば、各段落の上にそれぞれ「第一段。特に武姜を提げて叙入す。是れ篇旨の母に在るを以てなり。云云」「第二段。祭仲・子封兩人の議論を叙し波を生ず。云云」「第三段。段に克つを叙するの正文なり。云云」「第四段。經文の書法に就く。云云」「第五段。穎に眞くの事を補叙す。云云」「末段。贊嘆し結を作す。云云」と記される。

そして篇末では、「叔段の貪癡、祭仲の深隱、公子呂の迫切、莊公の奸狼、穎考叔の敏妙、情狀一一見るがごとし」という『左傳經世鈔』の評や、「叙事議論 相ひ錯して文を成す。古文の妙境なり」という俞桐川の評などが引かれている。また、骨肉の争いを繰り広げた莊公を批判する評も、高嶮自身のものを含めて篇末に記されている。

以上、高嶮『左傳叢鈔』の体裁を確認し、その例として「鄭伯克段于鄆」を見た。では次に、竹添『左傳鈔』が『左傳叢鈔』をどのように利用しているかを見ていきたい。

上野氏がいうように、『左傳鈔』は『左傳叢鈔』三百二十二篇を抜粋し九十九篇としている。『左傳』の中で襄公・昭公の範囲は文章量が多く、『左傳叢鈔』はそれぞれにつき七十篇近くを取る。しかし『左傳鈔』は各公につき十五篇を越えて取ることはなく、そのために篇数が三分の一程度になっている。

『左傳鈔』九十九篇は内容のみならず体裁も『左傳叢鈔』と同一である。市島によれば竹添旧蔵『左傳叢鈔』は所々が切り取られていたということだが、竹添は『左傳叢鈔』に手を入れた上で切り取り、それを直接印刷に回したものと考えられる。『左傳鈔』で手が加えられた部分としては、まず返り点が施され（これは竹添利鎌による）、文字の訂正や欄外評の削除がわずかに行われている。また、『左傳叢鈔』の欄外注を囲む形で上部に匡郭が追加されている。『左傳叢鈔』の段標はやや見にくいだが、『左傳鈔』では分かりやすい形に直してある。

各篇末の評語には、目に見える形で改変が施されている。ただし『左傳鈔』で新しく加えられたのは上野氏が指摘する隠公元年の一例のみで、これは帰有光『文章指南』からの引用。篇末において竹添が行った操作は、評語の削除と摘録にほぼ尽きる。

篇末の評に関して、『左傳鈔』は文章に対する評を主に取っており、『左傳叢鈔』に見える道義的議論は削る傾向がある。たとえば「鄭伯克段于鄆」の例では、鄭の莊公の罪を論ずる評を削除している。『左傳叢鈔』では、「この伝文はなにがしの罪を責めるもの」という類の評がしばしば見えるのだが、『左傳鈔』ではこれをほとんど取っていない。

なお『歴代古文鈔』のうち『國語鈔』『國策鈔』『史記鈔』『漢書鈔』に関して、やはり『讀書叢鈔』を体裁もそのままに抄録したものであることを筆者は確認した。『歴代古文鈔』の中に高塘の名が記されることはなく、原著者の存在を隠そうとしていることは明らかである。竹添利鎌および後述する高木怡荘についても、彼らが『讀書叢鈔』の存在を知らなかったとは考えにくい。竹添進一郎・竹添利鎌・高木怡荘が『歴代古文鈔』刊行に当たって取ったこのような姿勢は非難されてしかるべきであろうが、この点についてはこれ以上立ち入らない。

二 『歴代古文鈔』刊行の目的

『左傳鈔』を含む『歴代古文鈔』は、いかなる目的で刊行されたのであろうか。『歴代古文鈔』の中に竹添進一郎署名の文章は一つも収められておらず、彼の意図を直接知ることとはできない。だが、刊行に至る事情を説明するものとして竹添利鎌の「歴代古文鈔序」および奎文堂の広告文が残されており、そこから刊行の目的をうかがってみたい。

竹添利鎌「歴代古文鈔序」（『左傳鈔』冒頭に収める）

周秦以降の古文を収める従来の選集に言及し、「精にして且つ備はれる者」がないと述べる。『歴代古文鈔』は、奎文堂店主・高木怡莊たかぎいそうが「井々先生の鈔録する所の古文を獲え」て刊行するものであり、「其の文法を論ずるに至りては則ち精詳せいしょうしゅうみつ周密 至らざる所無し。蓋し諸生を教育するに尤も不可欠の書なり」という（原漢文。傍点引用者）。

奎文堂による広告文一（『左傳鈔』に収める）

奎文堂店主の署名で次のようにいう。「右鈔本（『歴代古文鈔』を指す）専ら文を論ず。其の義を講ずるに非ざるなり。蓋し左國以下、卷帙は浩瀚こうかん、學者或いは涉獵しやうりやうを難しとす。是に於いて其の粹を板はんし、録して以て卷を爲し、以て作文の法を示す。其の便なるや大、因りて梓しして以て同好に頒わたん。云云」（原漢文。傍点引用者）。

奎文堂による広告文二（『評注左氏戦記』に収める）

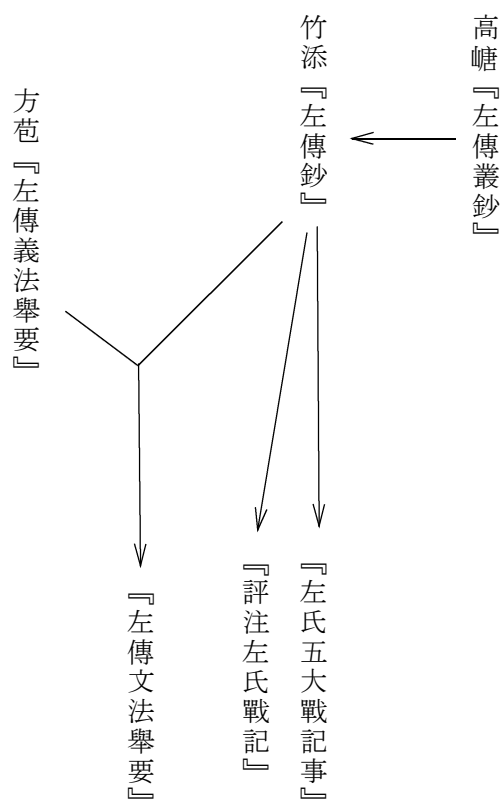
『歴代古文鈔』が左国史漢以下を学ぶために格好の中学教科書であるとし、「歴代文章の粹を抜き精を選び、各家各様の文体聚めて数帙の中に漏さず。又句讀段落を施して素読に便し、科段關鎖・離合斷続を示して以て文の結構を明かにす。學者文法を講ずるに於て大に益することあるべく云云」という（カタカナ交じり文をひらがな交じりに直し、句読点を追加。傍点引用者）。

以上の文章から分かるのは、『左傳鈔』を含む『歴代古文鈔』は学生を讀者として想定し、「文法」「作文の法」を学ぶための教科書として刊行されたということである。文法、つまり文章を構成する技法・修辭法を意味するこの言葉は、『歴代古文鈔』を理解するための重要なキーワードである。前節で『左傳鈔』は高嶂が記す道義的議論は削る傾向があると述べたが、これは「文法」の教科書という目的に沿った操作であり、広告文にある「其の義を講ずるに非ざるなり」の具体例といえよう。『左傳叢鈔』に見える高嶂の序では「文法」について触れつつも、同時に「明道」の文としての『左傳』を強調している。それに対し『左傳鈔』を含む『歴代古文鈔』は、古文の「文法」の解説により重きを置いているのである。

明治十七年刊行の評注書のうち、『評注左氏戦記』『左傳文法舉要』についてもすでに上野氏の指摘を取り上げた。上野氏が言及しない『左氏五大戦記事』も『左傳鈔』を抜粋したものであり、「春秋五大戦」と称される五つの戦いのみを取っている。『評注左氏戦記』と『左氏五大戦記事』には篇の重複があり、『左傳鈔』の版下がそのまま流用されている。『左傳文法舉要』にも『左傳鈔』の版下が用いられ、『左傳義法舉要』より方苞の評を追加している。『左傳鈔』以外の三種に序跋等は記

されていないが、『歴代古文鈔』と同一の目的で編集された、『左傳鈔』のダイジェスト版と考えられる。これら評注書の関係を以下に図示しておこう。

評注書関係図



竹添の『左傳文法舉要』が方苞『左傳義法舉要』から書名を改めていることについて、上野氏は「判り易くしたのであらう」と述べる。同氏はこれ以上の説明を加えていないが、方苞以外にあまり使用例を見ない「義法」という言葉を、竹添がより一般的な「文法」に改めたと言いたいのであろう。方

苞が用いた「義法」とは、青木正児による定義を借りるならば「義理即ち文の内面的理法と文法即ち文の外形的法則」である③。「義法」から「文法」への書き換えは、方苞の立場からすれば「義理」という観点を無視するという意味で問題となろう。だが、この変更からも「文法」の学習に供せんとする意図を読み取ることが可能である。

本節の最後に、明治十七年における竹添進一郎の状況を記しておこう。明治十七年当時、竹添は日本国外にあった。彼は明治十三年（一八八〇）に清国天津領事、十五年（一八八二）に朝鮮弁理公使となり、十七年（一八八四）十二月に起こった甲申事変の後に帰国している。『歴代古文鈔』に関しては渡清前に奎文堂との話し合いがすでに終わっていたのかもしれないが、竹添利鎌「歴代古文鈔序」を読むかぎりでは奎文堂店主・高木怡荘が主導して刊行に至ったとも考えられ、「文法」の教科書として『歴代古文鈔』を編集することには奎文堂の意向が働いていた可能性がある。だが、次節で述べる『左氏會箋』との関係から考えても、竹添が高塘の評注を読み込み、それが彼の著述活動に影響を与えたことは確かである。

三 『左氏會箋』稿本に取られる『左傳鈔』

前節までは高塘『左傳叢鈔』と竹添『左傳鈔』について述べた。本節では、『左傳鈔』と『左氏會箋』の関係について論じてみたい。

竹添がいつごろ『會箋』の著述を開始したか明確な記録は残っていないが、おそらく朝鮮より帰国して以降のことと考えられる。『左傳鈔』が『會箋』の中にどのような形で生かされているか、『會

箋』稿本を含めて検討する。

まずは、『會箋』稿本の中に『左傳鈔』からの引用が見えるかどうか調査した結果を以下に述べる。

- ・準備稿の中に『左傳鈔』の抜き書きはない。
- ・第一稿には、『左傳鈔』隠公・桓公に見える旁注と欄外注の一部が取られている。これらは余白に朱筆で記されており、後から追加したものと考えられる。隠公元年「鄭伯克段于鄆」を例に挙げれば、段落ごとに付された欄外注は全て取られ、旁注の「追叙法」も記される。ただし、莊公以降には『左傳鈔』からの引用はあまり見えなくなる。
- ・第一稿に取られた『左傳鈔』の評注は第二稿にも引き続き取られる。その際、上下二段に分かれた原稿用紙の上段に記されている。
- ・第三稿に至り、『左傳鈔』より引く評注の多くが削られる。第四稿・成本には、『左傳鈔』に拠つたと明確に判断できる注はそれほど多くない。

竹添が第二稿において仕切りのある原稿用紙を使用し、上段に『左傳鈔』の評注を一部写しているという事実は注目に値する。竹添は第二稿の時点で、上下二段に分けた頭注本を企図していたのではないだろうか。『左傳』の頭注本としては馮李驊^{ふうりか}『左繡^{さしゆう}』や秦鼎^{はたかなえ}『春秋左氏傳校本』などの例があり、竹添はそれらに倣ったとも考えられる。だが、第二稿の体裁は『左傳鈔』のそれに近い。『左傳鈔』と第二稿について、隠公元年「鄭伯克段于鄆」の冒頭部分を図1、図2として本節末尾に掲げておくので、参照していただきたい。竹添は直接的には『左傳鈔』の体裁を意識し、文評を頭注として施そうとしていたと筆者は考えている。第二稿の頭注としては、『左傳鈔』の他に『左傳經世鈔』な

どから評語が引かれている。

しかし第二稿の頭注には削除を示す印が訂正時に加えられており、第三稿では原稿に初めから記されなくなる。第三稿では仕切りのない原稿用紙が用いられており、竹添が頭注本の構想を途中で放棄したことが伺える。もともと、第二稿でも頭注の体裁が取られているのは前半部分のみであり、これはいわば実験的な試みであったのかもしれない。頭注本の体裁はその後用いられることはなく、『會箋』成本は割注のみとなっている。現在広く普及する漢文大系本には頭注が施されているがこれは富山房編集部が追加したものであり、明治講学会本・井井書屋本にはない。

『左傳鈔』は文章に対する詳しい評注を特色とするが、それ以外の注釈内容は杜注と林注を越えるものではない。一方、『會箋』は安井息軒や亀井昭陽および清朝考証学者などの説を広く取り入れて、訓詁、校勘、地理・人物・事物の考証など極めて詳細な注釈を施している。その中心にあるのは、第四章で述べたように『左傳輯釋』と『左傳續考』である。『左傳鈔』（およびその種本たる『左傳叢鈔』は『會箋』成本には一部が取り入れられただけであって、『會箋』成本との関係は限定的である。つまり、『會箋』を『左傳鈔』の直接的発展と見なすことはできないのである。だが少なくとも稿本のある段階で、竹添は『左傳鈔』を利用した「文法」の解説を頭注の形で加えようとしていたと考えられる。

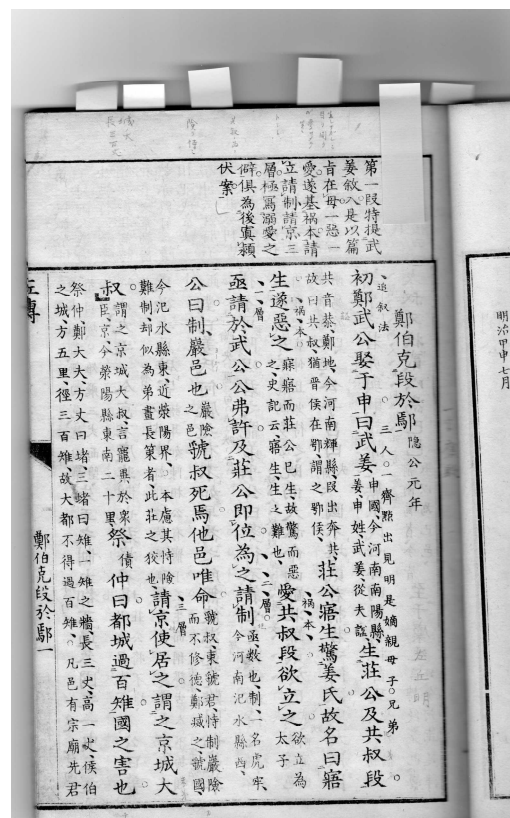


圖 1
『左傳鈔』隱公元年

「鄭伯克段于鄆」

〔筆者藏本〕



圖 2
『春秋左傳補解（稿本）』八卷

（『左氏會箋』第二稿）隱公元年

〔靜嘉堂文藏〕

おわりに

本章の内容を簡単にまとめておこう。竹添進一郎は明治十七年に『左傳鈔』を初めとする『左傳』評注書を刊行しているが、これらは高塘『左傳叢鈔』の抄録である。『左傳鈔』を含む『歷代古文鈔』は種本である高塘『高梅亭讀書叢鈔』を、内容のみならず体裁までほぼそのまま襲っているが、「文法」の教科書という側面を強調して刊行された。『會箋』は、『左傳鈔』を直接発展させた注釈書ではない。だが竹添は第二稿の段階まで、『左傳鈔』を意識した頭注の形で「文法」の解説を行うことを考えていた可能性がある。

第一章、第二章において『會箋』の注釈内容を分類し、その一つとして『左傳』の文章表現に関する解説」を挙げた。本章で取り上げた言葉を用いてこれを言い換えれば、「『左傳』の文法に関する注」ということになる。第二章で述べた通り、このような観点から『會箋』の研究が行われたことはほとんどなかった。だが、『左傳』の「文法」を解説するということは竹添にとってかなり大きな課題であったと、本章で論じた内容から判断することができる。

『左傳』の「文法」解説書としての『左傳鈔』と『左氏會箋』について、次章にて具体的な比較を行ってみたい。

注

① 『(民国) 沁源県志』巻三によれば、高嶂は字を梅亭といい、順徳府南和県(現河北省邢台市)の人。乾隆二十五年(一七六〇)の挙人。高嶂については章暉「高嶂《史記鈔》研究」(『西安社会科学』二〇〇九年第三期)に言及がある。

② 未刊。早稲田大学図書館に自筆本が残る。早稲田大学古典籍総合データベースにて閲覧可能。

③ 『清代文学評論史』(『青木正児全集』第一巻 春秋社、一九六九年)。

第七章 「文法」解説書としての『左傳鈔』と『左氏會箋』

はじめに

前章において、竹添進一郎『左傳鈔』が「文法」を学ぶための教科書として刊行されたこと、『左氏會箋』が第二稿まで『左傳鈔』を意識した体裁を取っていたことを明らかにした。

本章では、『左傳鈔』『會箋』それぞれに付された注について具体的に比較してみたい。『會箋』の注釈内容は『左傳鈔』よりも多岐に渡るのだが、訓詁、事物の考証などは措き、「文法」に関わる注と判断できるもののみ取り上げる。『會箋』は成本のみ参照し、稿本は用いないこととする。

一 『左傳鈔』『左氏會箋』に見える「文法」解説（一）——伝文の分節化——

本節では宣公十二年「邲の戦い」に見える（ぶんしよ）欒書の弁舌を取り上げ、『左傳鈔』と『會箋』に見える伝文の分節化について検討する。邲の戦いは『左傳』の中でも特に著名な戦いの一つであって、竹添は『左傳鈔』を初めとする明治十七年の評注書四種全てにこれを収録している。

邲の戦いは晋と楚が覇権を巡り争ったものであり、晋の盟下にあった鄭に楚が侵攻したことが戦いのきっかけとなった。晋は鄭を救援せんと出兵するが、鄭がすでに楚に降伏したとの知らせを受ける。晋の元帥たる荀林父（じゆんりんぽ）らは撤退を唱えるが、軍中の主戦論者に引きずられる形で進軍を続行する。滞陣

中の晋軍を鄭の使者として皇戌こうじゆつが訪れ、口上を述べる。

鄭の楚に従ふは、社稷の故なり。未だ貳心じしん有らず。楚師驟しばしば勝ちて驕る。其の師老いたり。而して備へを設けず。子之を撃たば、鄭師承（後続）と爲らん。楚師必ず敗れん。

晋が楚を攻めれば、鄭は再び晋の側に付こうという提案である。晋の欒書はこの提案を拒絶せんと弁舌をふるう。

楚は庸に克ちてより以来、其の君日として國人を討めて之に訓おしへ、『民生は之れ易からず、禍の至るは之れ日無し。之を戒懼して以て怠るべからず』と于いはざるは無し。軍に在れば、日として軍實を討めて之を申しん徹し、『勝は之れ保つべからず。紂は之れ百たび克ちて卒つひに後無し』と于いはざるは無し。之に訓ふるに若敖・蚘冒の竄路藍縷ひつろらんるにて以て山林を啓ひらくを以てし、之を箴いめて曰く『民生は勤むるに在り。勤むれば則ち置とほしからず』と。驕と謂ふべからず。先大夫子犯しはん言へる有りて曰く『師は直を壯と爲し、曲を老と爲す』と。我は則ち不徳にして、怨みを楚に徹もむ。我は曲、楚は直。老と謂ふべからず。其の君の戎は分れて二廣と爲る。廣に一卒有り、卒は偏の兩。右廣初めて駕し、數へて日中に及び、左則ち之を受け、以て昏こんに至る。内官は序もて其の夜に当たり、以て不虞ふぐを待つ。備へ無しと謂ふべからず。子良は、鄭の良なり。師叔は、楚の崇なり。師叔は入りて盟ひ、子良は楚に在り。楚鄭は親しきのみ。来りて我に戦を勸むるは、我克たば則ち来り、克たざらば遂に往かん。我を以て卜するなり。鄭は従ふべからず。

樂書の判断では、楚は王が日頃から国人・軍隊を戒めており、現段階では晋が不徳で楚に道義があり、さらに楚は割当を決めて防備を固めているのであって、皇戌がいう「驕」「老（疲弊）」「無備」には当たらない。そして、鄭は楚との関係を固めつつあり、楚を攻撃するという約束も信用ならないと考えるのである。

では、樂書の言葉に対する『左傳鈔』の旁注を引いてみよう。「楚は庸に克ちてより以来く驕と謂ふべからず」には、「此の層 他^かの驕字を破る。詳に従ふ」とある。また、「先大夫子犯 言へる有りく老と謂ふべからず」には「此の層 他^かの老字を破る。簡に従ふ」と、「其の君の戎は分れて二廣と爲るく備へ無しと謂ふべからず」には「此の層 他^かの無備を破る。又た詳に従ふ」と、「子良は、鄭の良なりく我を以て卜するなり」には「此の層 他^かの鄭師爲承を破る。又た簡に従ふ」とそれぞれ注が付けられている。これは樂書の弁舌を四節に分け、それぞれの節が皇戌の口上にみえる四つの問題への反論になっていると解説するものである。また「詳に従ふ」「簡に従ふ」として、文字数の多い詳細な表現と、文字数の少ない簡略な表現が交互に用いられることに注意を促している。高嶮が『左傳』を段落分けした上で文評を加えていることはすでに述べたが、ここで見たように段落内部でさらに分節化を行って解説を施すのが、高嶮の注釈方法である。

では次に、この部分に『會箋』がいかなる注をつけているか見てみよう「①」。「驕と謂ふべからず」に対しては、『左傳續考』に拠り「皇戌曰く『楚師驟^{しば}し勝ちて驕る』と。故に武子（樂書）勝ちて驕らざるの實を言ふ」と注する。「老と謂ふべからず」「備へ無しと謂ふべからず」については、特に皇戌の言葉と対応させて説明することはしていない。そして「子良は、鄭の良なり」には「此の節 他^かの鄭師爲承を破る」（傍点引用者）と注されるが、これは『左傳鈔』に拠ったものであり、『會箋』

成本が高嶮の注を採用する少数の例の一つである。竹添も、欒書の弁舌が皇戌の提案に対しいかに反論しているかを説明する必要を認め、『左傳續考』に拠って注を付けたのであろう。とはいえ、欒書の言葉「驕と謂ふべからず」「老と謂ふべからず」「備へ無しと謂ふべからず」には、皇戌の提案にみえる「驕」「老」「無備」と明らかに対応する文字が用いられており、一例目のみ説明されれば後の二例も同様だと読者が判断するのは容易である。高嶮のように説明を繰り返すことを竹添がしなかったのは、煩瑣になるのを避けるためと考えられる。しかし「子良は、鄭の良なり」以下については、皇戌と欒書の言葉に直接対応する文字が使われているわけではないので、これも皇戌の提案への反論であると読者が直ちに気づくとは限らない。だからこそ竹添は『左傳鈔』に拠って特に注を付けたのであろう。なお、『左傳鈔』の「此の層」が、『會箋』では「此の節」に直されているが、これは用語の統一を図ったものと考えられる。『左傳續考』も伝文を「節」と称して分節化する場合がある。亀井の用語に合わせるため、「層」を「節」に書き換えたのであろう。

二 『左傳鈔』『左氏會箋』に見える「文法」解説（二）―伏線の指摘―

『左傳』注釈者が「文法」を解説するための方法の一つとして、伏線の指摘がある。『左傳』の中には前後が照応する記述、いわゆる伏線が多いとされており、その指摘を行うことは『左傳』評注書の重要な課題であった。『左傳鈔』では主に旁注により、伏線が張られる箇所「伏」、伏線が回収される箇所に「応」と記されている。「伏」「応」という用語は『左傳鈔』独自のものではなく、『左

傳』評注書に広く使われているものである〔②〕。

まずは『左傳鈔』が行う伏線の指摘を、桓公六年「楚子侵隨」にて確認してみよう。以下に伝文を引き、「伏」「応」の注を（ ）に入れて示す。

楚武王侵隨、使薳章求成焉、軍於瑕以待之。隨人使少師董成。鬬伯比言于楚子曰「吾不得志於漢東也、我則使然。我張吾三軍而被吾甲兵、以武臨之。彼則懼（A…懼字伏）而協、以謀我。故難間也。漢東之國、隨爲大。隨張必棄小國（B…伏兄弟之國）。小國離、楚之利也。少師侈。請羸師以張之」。熊率且比曰「季梁在（C…先伏一筆）、何益」。鬬伯比曰「以爲後圖（D…伏八年案）。少師得其君」。王毀軍而納少師。

少師歸、請追楚師。隨侯將許之。季梁止之、曰「天方授楚。楚之羸、其誘我也。君何急焉。臣聞、小之能敵大也、小道大淫。所謂道、忠於民而信於神也。上思利民、忠也。祝史正辭、信也。今民餒而君逞欲、祝史矯舉以祭。臣不知其可也」。公曰「吾牲牷肥腍、粢盛豐備。何則不信」。對曰「夫民、神之主也。是以聖王先成民而後致力於神。故奉牲以告曰『博碩肥腍』、謂民力之普存也。謂其畜之碩大蕃滋也。謂其不疾癘蠱也。謂其備腍咸有也。奉盛以告曰『絜粢豐盛』、謂其三時不害而民和年豐也。奉酒醴以告曰『嘉栗旨酒』、謂其上下皆有嘉德而無違心也。所謂馨香無譌慝也。故務其三時脩其五教、親其九族、以致其禋祀。於是乎民和而神降之福。故動則有成。今民各有心而鬼神乏主（E…應神之主句）。君雖獨豐、其何福之有。君姑脩政而親兄弟之國（F…與伯比語暗應）、庶免於難」。隨侯懼（G…應懼字）而脩政。楚不敢伐。

この篇の概要を説明しておく。楚が隨に進入したので、隨は少師を派遣し和議の交渉に当たらせた。楚の鬬伯比は、隨を含めた漢東（漢水の東）の諸国を服属させるための策を楚王に進言する。これまでは楚が武力を以て迫っていたので、諸国は懼れ、協同して楚に対処してきた。隨は漢東諸国の中で最大の国だが、これが驕りたかぶれば必ず味方の小国たちを見捨て、楚にとつては有利になる。隨の少師にわざと軍の弱みを見せ、驕らせてやろうというのが、その内容である。熊率且比が「隨には季梁という切れ者がいるので、やつても無駄だろう」というと、鬬伯比は「後々の布石なのだ。少師はいずれ隨侯の寵愛を得る」と答え、楚は少師に乱れた陣容を見せた。少師の報告を受けた隨侯は果たして楚に追撃をかけようとするが、季梁がそれを制止した。楚の策を見通して彼我の状況を説明する季梁の諫言を受け、隨侯は懼れて内政を整えたので、楚は隨を攻めることを中止したのである。

『左傳鈔』は桓公六年の伝文を収録するだけだが、桓公八年にはこの事件の後日談というべき記載がある。隨の少師が隨侯の寵愛を得るようになったので、鬬伯比は「可矣。讐有讐、不可失也」（もうよろしい。敵に隙ができた。この機を逃してはならぬ）と述べた。果たして楚が主催する会盟に隨が加わらず、楚は再び隨を攻めることになる。

ここに挙げた『左傳鈔』の注のうち、AとG、BとFは対応する「伏」「応」双方が揃っている。鬬伯比の言葉「彼則ち懼れて協ひ、以て我を謀る」に対して、「A…『懼』字は伏なり」と注し、これが伏線であることを指摘する。楚の工作は季梁が隨侯を諫めたことにより奏功せず、「隨侯懼れて政を脩む。楚敢へて伐たず」という結果に終わるのだが、ここに「G…『懼』字に應ず」と注している。「隨侯懼」という表現は「彼則懼而協」に対応するものであり、張られた伏線がここで回収されたと説明しているのである。

同様に、鬬伯比「隨張^はらば、必ず小國を棄^すてん」には「B…『兄弟の國』を伏す」と注し、季梁「君姑^{しばら}く政を脩めて兄弟の國に親^{した}めば」に繋がる伏線であるとする。そして「F…伯比の語と暗に應ず」と注し、伏線が回収されたことを示している。「暗に應ず」としているのは、「懼」という同一表現が繰り返されるA、Gの例とは違い、「小國」「兄弟の國」という異なる表現が前後で使われているためである。

C・D・Eは、「伏」「応」のうち片方のみを示す注である。「C…先づ伏するの一筆なり」は「伏」の指摘。熊率且比「季梁在り、何ぞ益あらん」が伏線であることを示す。「応」が何かを示していないが、季梁の諫めによって楚の目論見が外れることを伏線の回収と見なしていると考えられる。「D…八年の案を伏す」も「伏」の指摘。鬬伯比「以て後圖^{こうと}と爲^なさん」が、桓公八年伝「楚鬬伯比曰く「可なり」」の伏線であることを示す。ただし『左傳鈔』は八年伝を収録していないので、伏線がいに回収されたかは読者自身が別途確認する必要がある。「E…『神の主なり』の句に應ず」は、「応」の指摘である。季梁の言葉「鬼神 主に乏^{とほ}し」が伏線の回収であることを指摘し、彼のいう「民は、神の主なり」がここに繋がる伏線であることを示す。

さほどに長くないこの伝文の中で、『左傳鈔』は五つの伏線を指摘する。その五つの「伏」「応」を以下に抜き出してみよう。

- 1 伏「彼則懼而協」……応「隨侯懼而脩政」
- 2 伏「隨張必棄小國」……応「親兄弟之國」
- 3 伏「季梁在、何益」……応（六年伝文の結末）

4 伏「以爲後圖」……応「楚鬬伯比曰「可矣」」

5 伏「民、神之主也」……応「鬼神乏主」

さて、『左傳鈔』が伏線の存在をかくも細かく指摘したこの篇について、『會箋』はいかに取り組んでいるのであろうか。『會箋』の中にも伏線の指摘と見なせる条が三つある。そのうち一つは、『左傳鈔』が収録しない桓公八年の伝文に付けられたもの。それらを以下に引用してみよう。数字は『左傳鈔』と同様の指摘と見なせるものについて、右の五つの番号に対応して付けた。

② 六年伝「親兄弟之國」

箋「此語正與伯比「隨張必棄小國」語暗對」

③ 六年伝「隨侯懼而脩政。楚不敢伐」

箋「季梁在何益」一語、方有結案」

④ 八年伝「楚鬬伯比曰「可矣」」

箋「可矣」受六年傳「以爲後圖」

② 「此の語 正に伯比「隨張らば必ず小國を棄てん」の語と暗に對す」は、『左傳鈔』「F…與伯比語暗應」に拠ったものと考えられる。ただし『左傳鈔』では「伏」「応」それぞれの箇所^に注があったのに対し、『會箋』は「応」のみに注する。「伏」の部分を明らかにするため、「隨張必棄小國」を箋文に書き込んだものと考えられる。また、『左傳鈔』の「暗應」を「暗對」に改めている。

③ 「季梁在り、何ぞ益あらん」の一語、方に結案^{まさ}有り」も「応」の部分に付されたもので、「伏」に当たる「季梁在何益」を箋文に加えている。

④ 「「可なり」は六年傳「以て後圖と為さん」を受く」も②③と同様である。六年伝文「以爲後圖」

に対して、『左傳鈔』のように「伏」の指摘を行うことはしていない。

そもそも伏線を示すに当たって「伏」「応」二つに分けた注を付ける必要は必ずしもなく、どちらか一つにまとめることも可能である。実際、『左傳鈔』にあってもC・Dは「伏」のみに、Eは「応」のみに付けられた注であった。だが『左傳鈔』はAとG、BとFのように、二カ所に分けて伏線を指摘する場合がなお目立つ。それに対して、『會箋』は伏線の指摘を一カ所のみで行うことがほとんどである。そして、『會箋』は「応」の部分で注を付ける例が多く、「伏」の部分での指摘はそれに比べて少ない。

『會箋』が「応」の部分で伏線の指摘を行うことが多い理由は、竹添が取り入れた先行注釈書にある。ここに挙げた桓公六年、八年の例でいえば、④「「可矣」受六年傳「以爲後圖」は亀井昭陽『左傳續考』に拠ったものである。③「「季梁在何益」一語、方有結案」は、上野賢知『左氏會箋溯源』によれば周大璋『左翼』に拠るそうだが、筆者は同書を未見。

『續考』が文字のレベルで『左傳』の文章表現を解説し、「○○應□□」「○○受□□」という形式を多用していることは、第五章で述べたところである。『續考』のそのような注のいくつかは、『左傳鈔』に見える「伏応」の指摘に相当するものであるといえる。『續考』は「應」「受」という表現を用い、主に伏線が回収された箇所において伏線の指摘を行っている。『會箋』の中心に『續考』が存在していることはこれまで述べてきたことであり、『會箋』が伏線を指摘する方法は『續考』のそれを受け継いでいる。隠公元年「鄭伯克段於鄆」篇について、『續考』が「○○應□□」式の注を複数付けていることは第五章で確認した。「鄭伯克段於鄆」篇は『左傳鈔』にも取られているのだが、意外なことに同書が指摘する伏線は一カ所のみである。

前節で比較を行った鄆の戦いについて、伏線の指摘に着目し再度取り上げておこう。鄆の戦いにつ

いて、『左傳鈔』は十四の伏線を指摘する。そのうち、「伏」「応」ともに指摘する例が一、「伏」のみが九、「応」のみが四となっている。それに対し、『會箋』は五つの伏線を指摘する。邲の戦いは直接関係しない後年の事件との対応を説明する注が一条見えるが、それは除いて数えた。そのうち、「伏」のみ指摘する例が一、「応」のみが四である。『會箋』に見える五つの出処を調べたところ、全て『續考』から取られていることが判明した。以下に伝文と箋を引用する。

① 伝「若之何敵之」

箋「副上「不可敵也」」

② 伝「郤獻子曰二憾往矣」

箋「憾」應上文「求未得」

③ 伝「楚人乘我、喪師無日矣」

箋「乘我」與下文「車馳卒奔乘晉軍」相照

④ 伝「潘黨望其塵」

箋「應既逐魏錡」

⑤ 伝「以他馬反」

箋「反」字應上文「命而往」

③のみは「伏」の部分で下文の「車馳卒奔乘晉軍」に繋がる表現であることを指摘するが、それ以外は全て「応」の部分で注を付けている。この中で、①については『左傳鈔』にも「明應「不可敵」」と見える。また④についても『左傳鈔』に見えるが、「遙接逐魏錡」とあつて「應」字が用いられていないので、伏線の指摘とは区別されるものと考えた。よって、先に挙げた『左傳鈔』の十四例を数える際には除外している。②③⑤は、『左傳鈔』に同様の注が見えない。邲の戦いについても、『會箋』は伏線の指摘を『續考』の引用によって行っている。『續考』は邲の戦いに関しても「応」のみで伏線を示す場合が多く、それが『會箋』に受け継がれているのである。

おわりに

以上、「文法」解説のうち「伝文の分節化」と「伏線の指摘」を取り上げ、『左氏會箋』が『左傳 續考』に多くを拠っていることを明らかにした。『會箋』に見える注釈内容のうち、『左傳』の「文法」に関する解説、すなわち『左傳』の文章表現に関する解説については、『續考』の受容がその形成に大きな役割を果たしている。『會箋』は『續考』が「文法」解説のために用いた方法を主に受け継いでいるのであり、場合によっては『左傳鈔』など他の先行注釈書を補助的に用いている。

竹添は『左傳鈔』を『會箋』稿本の途中まで多く取っていないながらそれを削っている。それは、やや煩雑に流れがちな高塘の評注に全面的に依拠することを避け、より簡要な注釈を作ることを目指したためと考えられる。

注

① 本論文付録参照。

② 李衛軍『《左傳》評点研究』（中国社会科学出版社、二〇一四年）第二章参照。

結語

本論文では、『左氏會箋』の稿本や『左傳鈔』を検討することで『左氏會箋』成立に至る過程を明らかにした。

第一章では、竹添進一郎および島田翰と『左氏會箋』に関する情報をまとめ、『左氏會箋』の注釈内容を例示した。また、『會箋』の刊本について整理し、現在広く普及する漢文大系本に見える誤植および小圈点の脱落について指摘した。

第二章では『會箋』に関する先行研究をまとめ、残された問題点について指摘した。『會箋』の中に「何某曰」として引用される注釈書は、上野賢知氏の書目によれば中国のもので八十八家百五部、日本のもので十二家十二部に及ぶ。筆者が『會箋』の注釈内容として注目する文章表現に関する注を論じるためには、これら先行注釈書のうち何が取り入れられているかを明らかにすべきであると確認した。

第三章では、上野賢知氏の先行研究に基づき静嘉堂文庫および東京都立図書館諸橋文庫に残る『會箋』稿本について論じた。その結果、これらの稿本が残された経緯には諸橋轍次が深く関わっていたことが判明した。また、稿本の作成順序が『左傳集説』↓二十五冊本↓八冊本↓三十一冊本↓二冊本であることが判明した。『會箋』は卷子本『春秋經傳集解』を底本としているが、第二稿までは卷子本の内容と一致しない部分があり、卷子本は稿が進んでから底本に定められたという可能性がある。また、竹添は稿が進むごとに単に新しい注を追加していったわけではなく、注を刈り込み整理する作業も行っていたと確認できた。

第四章では『會箋』の準備稿たる『左傳集說』について論じ、竹添が稿本初期の段階で主に依拠していたのは『左傳輯釋』『左傳續考』の二つを筆頭として、『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』『春秋大事表』『春秋左氏傳校本』『左繡』などであると明らかにした。

第五章では『會箋』の中心というべき先行注釈書『左傳輯釋』『左傳續考』を特に取り上げ、『會箋』に取り入れられた両者の特徴について論じた。『輯釋』は清朝考証学者の説を受容して訓詁に詳しい。『會箋』の訓詁は主に『輯釋』に拠りつつ、安井息軒が参照できなかった先行注釈書をも参照してそれを補っている。また、『續考』には『左傳』の文章表現について文字のレベルで解説する注が多く見える。それらは『會箋』の稿が進むにつれて取り込まれ、『會箋』の特徴を形作っているということが判明した。

第六章では、竹添が『會箋』以前に刊行した『左傳』評注書である『左傳鈔』について論じた。『左傳鈔』は「文法」を学ぶための教科書として刊行されたものであり、『會箋』には第二稿まで『左傳鈔』の体裁を意識したと考えられる「文法」説明が施されていたことが確認できた。

第七章では、「文法」解説の例として「伝文の分節化」「伏線の指摘」に着目し、『左傳鈔』と『會箋』を比較し、『會箋』に見える「文法」解説が『左傳續考』に多くを拠っていることを明らかにした。

『會箋』よりも約二十年前に刊行された『左傳鈔』は、『左傳』の「文法」すなわち文章表現に関する解説書として編集された。文章表現に関する解説は竹添にとつて大きな課題であったと考えられる。『會箋』は『左傳鈔』を直接発展させた注釈書ではないが、『左傳鈔』を意識したであろう「文法」の解説が、『會箋』の初期稿本に頭注の形で施されている。

『會箋』は『左傳鈔』とは別個の注釈書として、膨大な先行注釈を集める作業を経て完成した。『會箋』の準備稿である『左傳集説』を作成した時点で、竹添が自らの注釈書の基礎に位置づける基本文献はほぼ定まっていたと考えられる。その基本文献とは、『左傳輯釋』『左傳續考』を初めとして、『左補義』『左傳經世鈔』『左傳彫題略』『春秋大事表』『春秋左氏傳校本』『左繡』があり、さらに『左通補釋』『春秋三傳雜案』『讀春秋存稿』『左翼』『春秋左傳詁』『群經平議』が加わる。これら十数種類の注釈書が『會箋』の基礎にあり、『會箋』の注釈内容を論じるためにはこれらの調査をまず行う必要がある。

『會箋』は『左傳輯釋』を媒介として清朝考証学者が残した訓詁の成果を受容している。また、『左傳續考』を取り入れることで注釈内容の膨らみを有することとなった。たとえば『左傳續考』には「文法」解説とすべき注が存在しており、それらは『會箋』の稿が進むにつれて取り入れられている。竹添は煩雑に流れがちな『左傳鈔』の評注を稿本の途中で削り、「文法」に関してもより簡要な注を作ろうとしたと考えられる。その際に主として依拠したものが『左傳續考』であった。

本論文は以上の内容を明らかにしたが、「序」で述べたようにこれは『會箋』の注釈内容をより詳しく論じるための基礎的研究である。今後は本論文を土台として、竹添が依拠した先行注釈をより詳細に検討し、『會箋』の中にいかに受容されているかを突き止めることが求められる。『左傳續考』に見える「文法」解説について論じた内容もいまだ断片的な指摘に止まっていることは否めず、『會箋』全体に渡って『續考』受容の例をより広く検討する必要がある。また、文章表現に関する解説を行うものとして『讀左補義』『左傳經世鈔』『左傳義法舉要』を取り上げたものの、これらに関する検討はほとんどできなかった。『會箋』研究を進めるに当たって精査すべき先行注釈が判明した所

で本論文を終えるが、『會箋』が諸々の先行注釈より文章表現に関する解説をいかに受容しているか詳細に明らかにすることを、今後の課題としたい。

付録 『左氏會箋溯源』補義

本付録は、上野賢知『左氏會箋溯源』（以下、『溯源』）に基づき『會箋』の出処の一部を明らかにするものである。『溯源』関する詳細は本論文第二章第三節を参照のこと。宣公十二年と成公十六年を対象として『溯源』に残された上野氏の書き込みを紹介し、それに基づいて『會箋』が利用した先行注釈の出処を示す。上野氏は注釈者の名前のみを記すことが多いので、本付録では書名に加え巻数・葉数などを必要に応じて補い、検索の便を図った。

凡例

一、『溯源』は箋に括弧を付して他書からの引用部分を示し、括弧ごとに人名もしくは書名を記している。上野の施した括弧が『會箋』のどこにあるかを示す。短いものは全て、長いものは冒頭と末尾を適宜記す。上野は明治三十六年刊行の明治講学会十五冊本を用いているが、本稿では利便性のため現在広く流布する増補版漢文大系本を用いる。引用は漢文大系本に原則従うが、フォントの関係上一部に新字体を用いる場合がある。漢文大系本は巻ごとに頁数が振られ、一頁十二行で組まれている。該当部分を頁数と行数で示す。たとえば「三五—一〇」とあれば、三十五頁の十行目に該当部分の冒頭があることを意味する。長いものについては末尾も同じく記す。便宜のため上野が括弧を付していない部分も含めて記すことがあるが、その際は【】を付ける。

二、**上野**として個々の括弧に付された上野の書き込みを示す。その際、上野が記した字体をできる限り用いる。

三、【補】として上野が指摘する先行注釈の書名を記し、該当部分の見える巻数と葉数などを適宜付記する。たとえば「卷三十・十四表」とあれば卷三十の十四葉表に該当箇所があることを示す。上野が用いた先行注釈のテキストは詳らかではなく、本稿では筆者が目睹しえたテキストによるが、その情報は個々の書名が現れる際に記す。

四、目立って多く引かれる先行注釈については一括して初めに置き、それ以外の注釈は箋の順に従って配列する。

宣言十二年箋の出处

亀井昭陽『左傳續考』・安井息軒『左傳輯釋』
・梁履繩『左通補釋』を一括する。

【補】三九五下。

一一五「哀十一年く互鼓者乎」
一一九「傳稱蕭潰く故不言滅」
【補】三九六上。

『左傳續考』より引用された箋

(特記しない限り上野が「亀井」と書き込みをしたものである。『亀井南冥昭陽全集』第三・四巻を参照。
全集での頁数と段を記す。断らない限り全集第三巻)

一一二「討貳く唯薄乎云爾」

【補】三九六下。

一一二「宋曰師、衛曰人、貶衛之意見矣」
【補】上野は指摘せず。三九七上。

一一三「昭十三年く傳曰禮也」

一一七「陣字从卑、短垣之義」

一一四「初圍之く義在此也」

一一八「又二十七年く短垣也」

二―九「釋名云々似非古義」「釋名又云々女墻附城」

【補】三九七上。

二―一「杜特言其非季春耳」

二―二「隱十一年は是也」

三―一「肉袒去楊く執割烹也」

【補】三九七下。

三―九「徼福者く東徙新鄭」

四―八「兄弟之叙く曰獵也」

【補】三九八上。

五―四「易者反常之謂也」

【補】三九八下。

五―五「六者く以分覆之」

【補】『續考補』。全集第四卷五五九上。

五―八「征伐之事く不敗其業」

【上野】「正義、亀井引」。

【補】三九八下。『春秋正義』卷二十三。以下、『春秋正義』については【補】を省略する。

五―九「商農工賈く四者也」

【補】三九八下。

五―一〇「從他國く伯州犂是也」

【上野】「亀井引正義」。

【補】三九八下。

五―一二「蓋楚分其軍く豈不可分而爲五乎」

【上野】「亀井引辨誤」。

【補】三九八下。傳遜^{ふそん}『春秋左傳注解辨誤』卷上・三十四表（四庫全書存目叢書）。

六―二「公羊宣十二年く此茅亦茅旌也」「謂以

茅旌く視於無形也」

六―五「物、物官之物也く故曰擇」

六―七「所謂篇く此本意也」

六―八「老有加惠者く失之」

六―一一「物即服物也く采章」

七―一「上文事く互相發矣」

七―一「上文能く字法相同」

七―二「副上不可敵也」

七―三「政、正也く似序卦」

【補】三九九上。

七―五「仲虺（はたかなえ）斷語也」

【補】三九九上。上野は指摘しないが、亀井は秦鼎（はたかなえ）『春秋左氏傳校本』を引用している。後述する増註校本では卷十一・四表に見える。

七―六「遵、循也（はたかなえ）任自然也」

七―七「耆底古通作（はたかなえ）毛傳耆致也」

七―一〇「言周邦（はたかなえ）亦同句法」

七―一一「猶昭十五年民知義所之所」

【補】三九九下。

八―五「在師之初（はたかなえ）失律凶也」

八―九「衆散爲弱（はたかなえ）就彘子之事言之」

八―一一「此承上（はたかなえ）兌澤言之」「壅必涸渴（はたかなえ）亦遂滅盡也」

【補】四〇〇上。

九―一「盈而以竭（はたかなえ）不整即散也」

九―三「澤上有（はたかなえ）下文發之」

九―三「不從即不行也」

九―四「是句總上文（はたかなえ）而繫之」

【補】四〇〇下。

九―四「之字直指（はたかなえ）職、主也」

一〇―八「僖三十三年（はたかなえ）一意」

【補】四〇一上。

一〇―一〇「去年秋（はたかなえ）可知」

一〇―一〇「邲之役（はたかなえ）可知」

一一―三「晉師遂進（はたかなえ）情狀如畫」

一一―六「承者所謂（はたかなえ）元帥之佐也」

一一―八「庸是莊王即位第一戰也」

【補】四〇一下。

一一―一一「在軍申儆之（はたかなえ）又訓之箴之」

一二―五「皇戌曰（はたかなえ）而三字講」

一二―七「此節簡短、與上節相變」

一三―六「知莊子論（はたかなえ）咎之徒也」

一三―七「成八年（はたかなえ）遙相照應」

一三―七「莊子趙盾之子」

【補】四〇二上。

一三―一〇「欒書（はたかなえ）愛於民矣」

一三―一二「出入此行（はたかなえ）與晉出入」

一四—二「以不帥王命言之也」

一四—四「隨季々吞晉矣」

一四—五「大國々羣臣遷之」

一四—六「此莊王々過時日也」

一四—七「趙旃々不可謂致晉師矣」

【補】四〇二下。

一四—九「靡旌摩壘」「是驅馳々是也」

一五—二「掉、搖也。振也。搖而整之也」

一五—六「鮑癸逐之々不得迫以退」

一五—九「前云者見楚人之方退也」

一五—一「周六月々獻禽未至也」

【補】四〇三上。

一五—二「兩角々不復逐」

一六—一「下文々前後肯綮」

一六—三「見魏錡之怒楚也」

一六—四「不給於鮮々與給鮮有別」

一六—六「不復逐也々以候晉人」

【補】四〇三下。

一六—八「憾應上文求未得」

一六—九「弗敢猶弗能也。是忿辭」

一六—一「乘猶掩也々晉軍相照」

【補】四〇四上。

一六—一「惡、惡意也」

上野「龜井引秦」。

【補】四〇四上。增註校本卷十一・九裏。

一六—一「楚氛甚惡之惡」

一六—二「軍衛不徹々有武備也」

一七—一「上軍將使々其謀協矣」

一七—三「言其出而在外、以伏望塵騁告」

一七—四「戰之前夕也々天明矣」

一七—五「使衆從者犯突之」「敵人犯突々躍如也」

一七—一〇「典路職々注稅駕猶解駕」

【補】四〇四上。

一八—一「乙卯々以逐之」

一八—二「戎右下而與之搏也」

一八—五「二子經宿不反、故迎之」

一八—六「應旣逐魏錡々王所也」

一八—七「晉人懼々及之也」

一八—一〇「元、首也々詩之本義」

【補】四〇四下。

一八—一〇「叔孫之意之先字」

一九—一「遂字顧眄遂出陳句」

一九—四「魏志注之不堪讀矣」

一九—六「楚之右拒之豈爲此乎」

一九—八「楚軍直之逐之也」

【補】四〇五上。

一九—九「改乘轅之亦如之」

二〇—三「與以逐下軍之故曰從」

二〇—七「觀士會之誤事矣」

【補】四〇五下。

二一—一「禮扛鼎之橫木有礙」

二一—五「此跨馬之用騎馬之證」

【補】四〇六上。

二一—六「趙旃之反之異矣」

二一—七「纔能反自林之鼠態可笑」

【補】『續考補』。全集第四卷五五九上。

二一—九「卽林中之木也」

二一—一〇「以其所目記之求其尸也」

【補】四〇六上。

二三—一「爲成三年求知營張本」

二三—三「蔽前後之始至於邲也」

【補】四〇六下。

二四—九「武王以干戈之偃武收兵」

二四—一〇「又作武之僭亦甚矣」

【補】四〇七上。

二五—一「此周頌賡之篇也」「此句受文王之莫定也」

二五—三「此周頌桓之篇也之分爲三什。此其所以不同也」

【補】四〇七下。

二五—一〇「先用干戈之止戈之武也」

二五—一二「屢豐年之吁亦難哉」

二六—四「爭諸侯是綏萬邦之反」

二六—五「利字榮字之豈豐財之道邪」

【補】四〇八上。

二六―六「上曰く蓋成穆也」

【補】四〇八下。

二六―一二「石制引楚師く其寵也」

上野「正義 亀井引」。

【補】四〇八下。

二七―三「家語く歸於誰身乎」

【補】四〇八下。

二八―四「有熊率且比く本人名敷」

二八―五「申公く高唐之後」

【補】四〇九上。

二八―九「楚有令尹く皆同」

【補】『續考』に該当箇所が発見できず。

二九―一二「目於智井則茅經存於井中也」

三〇―一「此號即く解作哭」

三〇―三「穀爲先軫子。先軫又曰原軫」

【補】四〇九下。

『左傳輯釋』より引用された箋

（特記しない限り上野が「安井」と書き込みをしたものである。明治十六年内藤傳衛門翻刻本を参照）

二―七「出車於巷く必死耳」

【補】卷十一・一裏。以下、『輯釋』については全て卷十一。

三―一〇「夷、等也」

【補】二表。

四―一「言必得鄭國無赦其罪」

【補】上野は指摘せず。二表。

四―二「釋文云く得之乎」

上野 文中の「何可冀」より文末までを括り、「正義」。

【補】二表。『輯釋』は『春秋正義』卷二十三を引く。

五―三「言觀敵く發師也」

【補】二裏。

五―一二「左右與く非車左右」「轅謂將車く北之是也」

【補】三表。

六―六「内姓同徳く選取故舊」

【補】三裏。

七―八「下言處く作者粗矣」

【上野】文中の「是養晦也」を括る。

【補】四表。「是養晦也」は『輯釋』の表現を変えている。

八―六「傳單言く臧省文」

八―一一「渴、涸也」

【補】四裏。

一二―一二「説文曰く謂之檻樓耳」

【補】六表。

一二―一二「數者數漏刻也。言其謹嚴」

【補】六裏。

一四―九「靡旌與敵壘相切摩」

【補】七裏。

一八―六「輶車屯守之車く輶車逆之」

一八―一一「與詩本義自別」

一八―一一「此節孫叔く薄人之意也」

【補】九表。

一九―四「先乘舟く其多也」

【上野】文中の「指墮舟中、身墮邲水中而死。可掬者言其多也」を括り、「以下公羊何注」。

【補】九裏。上野が括った部分は『公羊傳』何休注。『輯釋』に直接引用はされていない。

二〇―五「待即接待く字自通」

【補】九裏。

二〇―九「小爾雅廣詁戸止也」

二〇―一二「張衡く楚人爲舉之」

二一―三「馬出坑く主力哉」

【補】十表。

二四―八「夏毛傳く時は也」

【補】上野は指摘せず。十一表。

二四―九「求美徳く有之也」

【補】十一表。

二五―一「鋪詩作敷」

【補】十一裏。

二六―九「所者處所也く可指處所也」

【補】十二表。

二七―七「如若通、猶言或」

【補】上野は指摘せず。十二裏。

二八―八「傳著也く城之堞也」

【補】十三表。

二九―一〇「若女也く而出之」

二九―一一「夫城陷く全之道」

【補】十三裏。

『左通補釋』より引用された箋

（特記しない限り上野が「左通」と書き込みをしたものである。皇清經解續編参照）

一―八「今河南く今湮」

【上野】「大事表八上、九、左通引」。

【補】『左通』卷十二・十三表。以下、同書は全て卷十二。顧棟高『春秋大事表』卷八上・二十裏、卷九下・五表（皇清經解續編）。

二―一「時鄭石く克鄭也」

【上野】「惠氏補注二、左通引」。

【補】一表。惠棟『春秋左傳補注』卷二・二十表（皇清經解）。

二―一二「皇門鄭城門。蓋皇爲大義」

【補】一表。

三―四「楚初都く此屬耳」

【上野】「地名攷畧八 左通引」。

【補】一裏。高士奇『春秋地名考略』卷八（四庫全書）。

四―三「潘厖即く是其後」

【上野】文中「文元年」の下に「以上引萬氏氏族畧」。

【補】二表。「萬氏氏族畧」は未詳。

四―一〇「僖十五く玄孫無疑」

【補】二裏。

五―七「讎痛怨之言也」

【上野】「漢五行志上注、左通引」。

【補】二裏。『漢書』五行志上・顔師古注。

七―一一「先穀族滅く十四年」

【補】四表。

八―三「智氏即く山西解州」

【上野】「左通引通志氏族畧三、沈氏小疏」。

【補】四表。『通志』氏族略三。沈彤^{しんとう}『春秋左傳小疏』卷三・六裏（皇清經解）。

八―一〇「晉書く舊説也」

【上野】「邵氏爾雅正義三、左通引」。

【補】四裏。邵晉涵^{しやうしんかん}『爾雅正義』卷三・十四表

（皇清經解）。上野が指摘する部分よりも前にある「釋言云」以下も『爾雅正義』に基づく。

九―一〇「邲即三年傳之邲也」

【補】四裏。

九―一一く一〇―一二「沈作寢者く莫能定也」

【補】五表。

一〇―九「新謂任未久」

【補】上野は指摘せず。五裏。『左通』は『困學紀聞』卷六・何焯注を引く。

一一―三「管在今く所封之國」

【上野】「大事表七之二 左通引」。

【補】六表。『春秋大事表』七之二・四表。

一一―三「敖者史記く可以證焉」

【補】六表。

一一―一二「紂之百克く保之耳」

【上野】「周宣武左傳附論、左通引」。

【補】六裏。「周宣武左傳附論」は未詳。

清經解）。

一二—五「生如生於憂患之生」

【上野】「困學紀聞六、左通引」。

一七—一〇—一八—一「昭三十年—不可據依」

【補】九裏。

【補】七表。王應麟『困學紀聞』卷六。

一四—九「軍壁日壘」

【上野】「夏官量人注」。

一八—四「考工記—故言旅」

【上野】「左通引礼書百十六」。

【補】上野は『周禮』鄭注を指摘するのみだが、

『左通』がそれを引く。八表。

【補】十表。陳祥道『禮書』卷百十六（四庫全書）。

一四—一〇「凡兵車—戈盾在右」

【上野】「左通引夏官環人疏」。

一九—一〇「唐侯祁姓—楚之唐是已」

【補】十表。

【補】八裏。『周禮注疏』卷三十。

二〇—一「游闕者—闕車之倅」

【上野】「左通引惠氏補注二」。

一四—一〇「既夕禮—其音同耳」

【上野】「惠氏補注二 左通引」。

【補】十裏。『春秋左傳補注』卷二・二十一表。

【補】八表。『春秋左傳補注』卷二・二十裏、
ただしそのままの表現ではない。

二〇—二「總之三—奇軍也」

【上野】「左通引慎朝正左氏傳闡義、慎氏引宋氏測要」
「明宋徵璧作左氏兵法測要」。

一六—五「今開封府—能言之」

【上野】「左通引禹貢錐指八」。

【補】十一表。「慎朝正左氏傳闡義」は未詳。

【補】八裏。胡渭『禹貢錐指』卷八・十三裏（皇

宋徵璧『左氏兵法測要』、筆者未見。

二〇一四「卻錡字く文子于軍」

【上野】「左通 恵氏補注」。

【補】十一表。『春秋左傳補注』卷二・二十一表。

二〇一九「古人以く不敢前」

【上野】「左通引顧氏補正中」。

【補】十一表。顧炎武『左傳杜解補正』卷中・九表（皇清經解）。

二一八「倂與叟同く通呼耳」

【補】十一裏。

二一一〇「表標也」

【補】上野は指摘せず。十二表。「左傳附論」より引く。

二二一七「既夕禮く亦爲矢幹」

【補】十二表。

二二一八「陸機疏く爲箭幹」

【上野】「王風揚之水正義、左通引」。

【補】十二表。『毛詩正義』卷四之四。

二二一九「古矢箭く故無貢」

【上野】「禹貢錐指七左通引」。また、文中の「董澤詳文六年」を括る。

【補】十二表。「董澤詳文六年」は『左通』になし。『禹貢錐指』卷七・三十三表。

二二一一「晉語注く之遺制」

【補】十二裏。

二三一三「兵法曰く輦以人」

【上野】「礼書百三十九左通引」。

【補】十三表。『禮書』卷百三十九。

二三一四く二三一二「【呂祖謙曰】晉楚軍制く楚戰之法」

【上野】「春秋左氏傳說六、左通引」。

【補】十三裏。呂祖謙^{りよそけん}『春秋左氏傳說』卷六（四庫全書）。

二四一一「漢書く高丘也」

【補】十五表。

二八―三「華椒者、襄九年」

【上野】「春秋分記世譜三、左通引」。

【補】十六表。程公說『春秋分記』卷十二・世譜三（四庫全書）。

二八―三「熊相氏、即其後」

【補】十六表。

二八―六「巫臣、縣公之稱」

【補】十六表。

二八―一二「臣蹇案、名芎藭」

【上野】「左通引」。

【補】十六裏。『左通』が引く徐蹇『說文解字繫傳』。

二九―九「胥、廢井也、無精也」

【上野】「依左通所引」。

【補】十六裏。

その他より引用された箋

一―八「邲、泌水旁地也、陳鄭之閒矣」

【上野】「趙佑」「讀春秋存稿、五戰」。

【補】趙佑『讀春秋存稿』。

一―一〇「莊二十三年、與此無涉也」

【上野】「毛氏傳」。

【補】毛奇齡『春秋毛氏傳』卷二十一（四庫全書）。

二―三「俞樾曰、臨即、於義不通矣」

【上野】「左傳平議」。

【補】俞樾『群經平議』卷二十六・三裏（皇清經解續編）。

二―七「下言師退鄭人修城」

【上野】「惠棟」。

【補】惠棟『春秋左傳補注』卷二・二十表。

二―一一「楚子退師者待其降也」

【上野】「依姜氏補義」。

【補】姜炳璋『讀左補義』卷十八・十一裏（四庫全書存目叢書）。

三一〇「言服事恭謹く滅國計數」

【上野】「傳遜」。

【補】『春秋左傳注解辨誤』卷上・三十四表。

二一一「三月三閱月也。不必九十日」

【上野】「中井」。

【補】中井履軒『左傳雕題略』卷三・一表（弘化三年廓然堂藏版）。

三一〇「以滅國爲比。與上文又不合矣」

【上野】「左繡」。

【補】馮李驊・陸浩評輯、貫名苞校訂『翻刻左繡』卷十一・二裏（嘉永七年須静堂課本）。

三一三「【魏禧曰】一命字く文法祖此」

【上野】「經世鈔 行間」。

【補】魏禧『左傳經世鈔』卷八・十七裏（聯墨堂藏板）。

三一三「書傳凡稱九者く（上野は括弧を閉じていない）」

【上野】「楊慎盒丹錄」。

【補】楊慎『丹鉛餘錄』か。卷三に該当箇所あり（四庫全書）。

三一九「杜以宣爲く自封也」

【上野】「齊召南攷証」。

【補】齊召南『春秋左傳注疏考証』卷一・二十表（皇清經解）。

四一一「必能誠信以用其國之民矣」

【上野】「林注」。

【補】林堯叟『左傳句讀直解』。林注は奥田元繼『春秋左氏傳評林』に採られ、同書では卷二

十三・二裏（寛政五年有文堂）。以下、林注は同書を参照。全て卷二十三。

評語を加えたものである。明治十七年奎文堂。

四―二「列子く可幾乎」

五―二「未爲後時也」

上野「沈氏補注」。

上野「林注」。

【補】沈欽韓^{しんきんかん}『春秋左氏傳補注』卷五・十四裏

【補】三表。

（皇清經解續編）。

五―三「罅是間隙之名。故謂瓦裂龜裂皆爲罅」

四―四「楚在鄭く不及事矣」

上野「正義」。

上野「趙佑存稿」。

五―七「民不怨讟其君」

四―五「傳文皆く是彘季」

上野「林注」。

上野「沈氏補注」。

【補】三裏。

【補】『春秋左氏傳補注』卷五・十五表。

六―二「楚江淮く以代旄」

四―一「【方苞曰】四大戦く職司亦見矣」

上野「姜補義有此説」。

上野「左傳文法舉要」。

【補】『讀左補義』卷十八・十三表。

【補】方苞^{ほうぼう}に『左傳義法舉要』あり。『左傳文法舉要』は竹添が『左傳』を抄録し、方苞の

六―二「雜記御柩以茅」

上野「沈氏補注」。

【補】『春秋左氏傳補注』卷五・十五表。

六一九「施舍有二義、分施舍爲二、非也」

上野「經義述聞」。

【補】王引之『經義述聞』卷十八・五裏（皇清經解）。

七一六「養、長養也、解其意耳」

上野「古賀」。

【補】古賀煜『左氏探蹟』卷四（国立国会図書館所蔵稿本）。

八一九「今雖有律、各從己意也」

上野「本茶香室經說」。

【補】俞樾『茶香室經說』。筆者未見。

八一二「蓋人人、不是」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

九一八「捷、勝也、參看自明」

上野「古賀探蹟、近藤増注引」。

【補】『左氏探蹟』卷四。近藤元粹『増註春秋左氏傳校本』卷十一・六表（明治十五年大阪合書房）。宣公十二年について上野が指摘する『左氏探蹟』は全て『増註春秋左氏傳校本』に引かれている。

一〇一五「北師次郕、不飲馬矣」

上野「周大璋著左翼」。

【補】周大璋『左翼』。筆者未見。以下、同書については【補】を省く。

一〇一二「此言衆欲聽命令」「而彘子、所適從」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

一〇——一二「元帥既不能行令、三帥固不得專行」

上野「魏禧之意」。

【補】『左傳經世鈔』卷八・二十二表。

一一——「深中楚王之忌。王病爲此」

上野「左翼」。

一一——「楚軍政專制于孫叔。人莫敢參」

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷十八・十五表。

一一——「令尹不欲如此」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷八・二十二表。

一一——九「于、於也。猶以也」

上野「宇野氏考」。

【補】宇野鼎うのかねえ（明霞めいか）『左傳考』。筆者未見。

一一——一〇「其君く作一句讀」

上野「趙佑存稿」。

一一——一〇「討軍實く戎士也」

上野「章句文字」。

【補】伊藤鳳山いとうほうざん『左傳章句文字さでんしょうくもんじ』。筆者未見。

以下、同書については【補】を省く。

一一——一一「在軍句く古文長句法」

上野「趙佑存稿」。

一一——一一「以荊竹く以荊竹編車也」

上野「正義」。

一二——二く五「藍縷與檻縷不同」「藍縷則與此

異く亦可以證」

上野「増島固讀左筆記」。

【補】増島蘭園ますじまらんえん『讀左筆記とくさひつぎ』卷六・十一表（崇

文叢書第二輯）。

一二—八「廣、兵車名、名二廣」

上野「辨誤」。

【補】『春秋左傳注解辨誤』卷上・三十五裏。

一三—一「内官、淮南書」

上野「沈氏補注」。

【補】『春秋左氏傳補注』卷五・十七表。

一三—一「序當其夜、持更也」

上野「正義」。

一三—二「待亦備也、待猶備也」

上野「章句文字」。

一三—二「此節破他鄭師爲承」

【補】竹添井井鈔錄、竹添利鎌訓点『左傳鈔』
(奎文堂、明治十七年) 卷三

一三—四「以我卜也、不可從」

上野「依林注」。

【補】八裏。

一三—八「實其言者、其的證矣」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

一三—一「子犯曰、咸在其中」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

一四—三「候人、非斥候」

上野「中井」。

【補】『左傳雕題略』卷三・三表。

一四—一二「俞樾曰」兩者、驂與驂耦也」

上野「左傳平議」。

【補】『群經平議』卷二十六・四裏。

一五—四「折猶短折之通稱」

上野「章句文字」。

一五—五「【方苞曰】致師之無閒」

上野「左傳文法舉要」。

一五—七「此射法也、以少其敵」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷八・二十四表。

一五—九「樂伯矢盡、僅存其一」

上野「林注」。

【補】十表。

一五—一〇「鮑癸當樂伯之後追之」

上野「林注」。

【補】十表。

一五—一二「下一既字之絲連法也」

上野「周氏左翼」。

一六—四「六麋取一之注謬」

上野「中井」。

【補】『左傳雕題略』卷三・三裏。

一六—七「召楚而盟也」

上野「林注」。

【補】十一表。

一六—八「許之何耶」

上野「經世鈔 左翼」。

【補】『左傳經世鈔』卷八・二十五表。

一六—一〇「不能決和戰之成命」

上野「林注」。

【補】十一表。

一七―一七「鷄鳴有三、則指寅時明矣」

上野「章句文字」。

一八―一八「潘黨一告、于此可見」

上野「左翼」。

一九―一九「此八字、而至」

上野「左翼」。

一九―一九「唐久屬楚、楚滅唐不書」

上野「姜氏補義引陳傳」。

【補】『讀左補義』卷十八・十八表。趙汸『春秋左氏傳補註』卷五に引く陳傳良（四庫全書）。

一九―一九「今湖廣、唐城鎮」

上野「大事表五」。

【補】『春秋大事表』。卷五ではなく、卷六・二十二表。

二〇―一七「此分謗義高。與韓厥之論不同」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷八・二十六裏。

二〇―一七「右廣、鳴而駕也」

上野「左翼」。

二一―一四「晉人既出險、乃顧楚人而慢之也」

上野「林注」。

【補】十四表。

二一―一七「馬鈍車遲、故遇敵不能疾驅而去」

上野「林注」。

【補】十四表。

二一―一七「春秋之世、逆臣忍心如此」

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷十八・十九表。

二二―二二【俞樾曰】族者部屬也、誤解族字矣」

上野「左傳平議」。

【補】『群經平議』卷二十六・五表。

二二―一一「言欲以、得吾子也」

上野「正義之意」。

二三―二「終夜、喧囂之状」

上野「左翼」。

二五―六、一〇【胡承珙】朱氏通義、亦未必然」

上野「毛詩後箋二十七武篇」。

【補】胡承珙『毛詩後箋』卷二十七・十九表（皇清經解續編）。

二五―一一「戢干戈、和衆也」

上野「正義」。

二五―一二「凡功之顯著、非謂篇章也」

上野「經義述聞」。

【補】『經義述聞』卷十八・九裏。

二六―七「以上駁武功、以下駁京觀」

上野「左翼」。

二六―八「鯨鯢大魚、吞食小國言」

上野「文中の「巨魁耳」までを括り、「増島」。それ以下に「中井」。

【補】増島蘭園が中井履軒の説を利用したもの。

『讀左筆記』卷六・五表。『左傳雕題略』卷三・四表。

二六―一一「告服鄭、先君也」

上野「林注」。

【補】十六裏。

二六―一一「曾子問、告成事」

上野「正義」。

二六一二「此追敘ゝ至于此者也」

上野「趙佑存稿」。

二七一三「亂離瘼矣ゝ奚、何也」「見其必ゝ支離」

上野「古賀」。

補『左氏探蹟』卷四。

二七一五「此經所不書ゝ不可不志」

上野「姜氏補義」。

補『讀左補義』卷十八・二十裏。

二七一六「晉師食楚穀三日也」

上野「林注」。

補十七表。

二七一九「公喜而ゝ活活如見」

上野「經世鈔」。

補『左傳經世鈔』卷八・二十九表。

二七一〇「既勝其軍ゝ是再克也」

上野「林注」。

補十七裏。

二七一二「過只宜作ゝ該之矣」

上野「趙佑雜案」。

補趙佑『春秋三傳雜案』。前述の静嘉堂文庫藏竹添旧藏『讀春秋存稿』には同書が附されてゐる。

二八一「林父ゝ可謂無法」

上野「經世鈔」。

補『左傳經世鈔』卷八・二十九表。

二九一一「愈樾曰」此二物ゝ令其拯救也」

上野「左傳平議」。文中の「愈説是也」を括る。

【補】『群經平議』卷二十六・五裏。

二九——「此二句亦無社語」

上野「中井」。

【補】『左傳雕題略』卷三・四裏。

三〇——「傳著楚師之殘暴也」

三〇——「傳但叙還々莫可訴焉」

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷十八・二十五裏。

三〇——「如此寫滅字。眞覺神號鬼哭也」

上野「左翼」。

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷十八・二十五裏。

三〇——「楚子以蕭人々抒其憤不止」

上野「左翼」。

成公十六年箋の出处

『左傳續考』・『左傳輯釋』を一括する。

亀井昭陽『左傳續考』より引用された箋

三二―九 「楚子宵々此理乎」

三三―一 「昭十三々之意矣」

【補】四七七上。

三三―五 「王卿士々變例也」

三三―七 「歸于某々揆一也」

【補】四七七下。

三三―一 一 「昭十三々之理矣」

三四―二 「上曰公々父見矣」

【補】四七八上。

三四―六 「滕子不書葬。故釋滕子之爲文公也」

三四―八 「侵伐之々侵故也」

三五―七 「蓋有所々言之也」

【補】四七九上。

三五―八 「四月戊々國皆後」

三五―九 「邲之戰々每相變」

三五―一〇 「問其利不利所在也」

三六―二 「德以施々舉三事」

三六―三 「義以建々事故也」

三六―四 「禮以順々德刑詳義禮信之効也」

【補】四七九下。

三六―五 「上下以下三句德之効也生厚則然」

三六―七 「洪範云々皆一意」

三六―八 「二句詳之効也」

三六―九 「二句義之効也々不佻也」

三六―一〇 「盡力禮之効也能從軍令也」

三六―一〇 「致死信之効也死長上死伍乘也」

三六―一一 「棄不可々刑德也」

【補】四八〇上。「〇之効也」の上にある「上

下以下三句」「二句」は竹添が加えたものと思われる。

三六―六「此刑之効果也徳正則然（此極亦當訓中）と則自知其中」

【補】四八〇上。○内は『續考』になく、『左傳輯釋』に見える（後述）。

三六―一二「瀆盟慢と和同矣」

三七―一「二句無禮信也と場言之」

三七―二「二句盡力從命之反也と信者上之信也」

【補】四八〇下。「二句」は竹添が加えたもの。

三七―三「二句致死補闕之反也（恤憂也）人心不競と靡所底至」

上野 ○で括った部分の横には「左翼」。

【補】四八〇下。○内は『續考』になし。「左翼」は後述。

三七―七「蓋欒黶と可通矣」

【補】四八〇下。

三七―一一「社稷と所願也」

【補】四八一上。注文の順序は『續考』と異なる。

三七―一二「既遇而不欲戰欲收師而還也」

三八―三「卻至以箕與韓邲比之可謂暴論矣」

【補】四八一上。

三八―七「弱言爲其所弱也と顔遇王子弱焉皆同」

【補】四八一上。ただし『續考』に「皆同」はなし。

三九―六「舊舊家也と外姓選於舊」

【補】四八一下。

三九―一〇「晉語曰と而六閒皆具焉」

上野 「依亀井」。

【補】四八一下。

四〇―七「牧誓稱爾戈々右戈若矛」

四〇―八「言其未直進也果又乘又下矣」

四〇―一一「皆字與皆左右相遠於淖皆字相映射」

【補】四八一下。

【補】四八二下。

四二―三「晉之良亦々夾公以其族也」

四二―五「凡國所々故曰焉得專之」

【補】四八二下。

四一―二「中軍之中々四字連讀」

【上野】文中の「族部屬也」に「楚語上韋注」。

【補】四八二上。『續考』が引くのは『國語』
卷十七・楚語上韋昭注。

四二―六「侵人之官此爲觸犯」

四二―六「失己之官此爲悞慢」

四二―八「說文掀々出於淖也」

四二―九「癸巳戰之前日也」

【補】四八三上。

四一―四「襄二十六年々必大敗之」

【上野】「亀井（王引之）」。

【補】四八二上。『續考』が引くのは王引之
『經義述聞』けいぎじゆつぶん卷十八・十五表（皇清經解）。

四三―五「此三軍萃於王卒之時也」

四三―六「言其即死也」

四三―六「晉軍合々楚恭王卒」

四三―八「晉語々事之敘也」

【補】四八三下。

四一―七「筮苗賁皇之謀何如也」

【補】四八二上欄外。

四三―九「方事之殷也々有傷乎否也」

【補】四八四上。

四一―一一「從苗賁皇々龍眼也」

四五―五「退言不送也蓋軍中之禮爲然（此爲十七年樂書譜卻至張本）ゝ爲知禮也」

【上野】○で括った部分には「恵士奇」。

【補】四八四上。○内は『續考』ではなく、恵棟けいと『春秋左傳補注』の引用（後述）。

四五―九「桓十二ゝ逆距也」

【上野】「安井」。

【補】「安井」は上野の書き間違いと思われる。実際は『續考』の引用。四八四下。

四五―一一「韓厥卻ゝ收旌也」

【補】四八四下。

四六―一「子在君ゝ隨君也」

【上野】「校本、亀井引」。

【補】四八四下。「校本」とは秦鼎はたかなえ『春秋左氏傳校本』のこと。卷十三・二十三表に見える（嘉永三年須原屋茂兵衛ら再刻）。

四六―一「鄭伯之ゝ字斷了」

四六―二「晉愈進ゝ於此句」

四六―五「楚師迫ゝ於子重」

四六―八「好惡之ゝ聽讒焉」

四六―八「臨事不ゝ日月也」

【補】四八五上。

四六―九「整是形ゝ包括七書」

【上野】「秦校本、亀井引」。

【補】四八五上。『春秋左氏傳校本』卷十三・二十三裏。

四七―一「乏任使之材也」

【補】四八五下。

四七―四ゝ八「此因楚ゝ而戰也」

【上野】文中の「而子反ゝ不撓也」には「古賀」。

【補】『續考補』。『全集』第四卷五六八頁上。「而子反ゝ不撓也」は『續考』になく、『左

氏探蹟』（後述）。

四七―九「穀梁郊く審也視也」

上野 文中の「周禮大く省閱也」には「左通引陸氏附注二」。

【補】四八五下。『續考』は『左通補釋』卷十四・十三表を引く（皇清經解續編）。陸燾^{りくさん}『左傳附注』卷二（四庫全書）。

四七―一〇「甲午之く者壹大」

四七―一二「賁皇子く緩急耳」

四八―二「呂氏云く絶於口」

四八―六「所謂無く亂之本」

【補】四八五下。

四八―一一「子反之く不聞耳」

四八―一二「子反將く實一也」

四九―一一「衛侯出く壞蹟出也」

【補】四八六上。

五〇―五「此一句く鄭時同」

五〇―六「宣伯稱く之辭也」

五〇―九「憂猶未く未寧耳」

五一―一く三「宣公立く是免討」

【補】四八六下。

五一―四「杜此注く矛盾乎」

【補】四八七上。

五一―五「**龜井**昱曰」七月當く可言耳」

上野 「左傳續考十三補」。

【補】『續考補』。『全集』第四卷五六七頁上。

五一―八「申勅公く申之申」

五一―一〇く五二―一「昭四年く之日也」

【補】四八七下。

五二―二「聲伯爲食く師之食也」

【補】四八八上。

五二―二「此二句是く孫之辭」

【補】四八七下。

五二―六「鄢陵之く師於此」

【補】四八八上。

五二―八「既稱諸く制田也」

【補】四八八上。欄外の追加も含む。

五二―九「諸侯總く不與也」

五三―二「子臧句く省日字」

【補】四八八上。

五三―八「還自伐く友亦同」

五三―一〇「聲伯從く奔命也」

五三―一一「聲伯外く情醜甚」

五三―一一「通於穆く此情也」

五四―二「二人亡則國亦滅也」

【補】四八八下。

五四―三「亡而爲く屬齊楚」

【上野】 文中の「當時之勢魯未必遽亡」には「安井」。

【補】四八八下。括弧で括った部分は『左傳輯釋』（後述）。

五四―四「愈出而愈醜」

五四―五「子孫豐厚之厚厚祿也」

【補】四八八下。

五四―七「其爲國く祈死矣」

五四―九「以下三く命以請」

【補】四八九上。

五四―一一「圖其身く其身也」

五五―二「襄二十く子之辭」

五五―六「然閒三く立之亦同」

【補】四八九下。

五五―一二「納女於く二十五年」

【補】四九〇上。欄外の追加も含む。

五六―一「閒字自高國之閒來」

【補】四九〇上。

五六―四「卻至以く上功也」

【補】四九〇下。

安井息軒『左傳輯釋』より引用された箋

三三―二「此傳曰く故云恥輕於執止粗矣」

【補】卷十三・三十表（以下、『輯釋』については全て卷十三）。

三四―七「五年經く而伐宋哉」

【補】三十裏。

三四―一一「覆掩也掩其不備」

【補】三十裏。

三六―六「此極亦當訓中」

【補】上野はこの部分を括弧に入れるだけで名を記していないが、『輯釋』三十一裏に見えるものである。

三六―一〇「補闕謂兵力有闕致死以補之」

【補】三十一裏。

三六―一二「齊肅也」

【補】三十一裏。

三八―四「從猶就也く故云不復從也」

【補】三十二表。

三九―一「行首猶云行前く即爲行列也」

【補】三十二裏。

三九―四「窺佻通佻偷也」

【補】三十二裏。

三九―五「閒隙也隙可乘者有六」

【補】三十三表。

四〇―一一「國士猶撰士下文云楚之良良即撰士矣」

【補】三十三裏。

四一―四「晉分良以擊楚く必大敗之（襄二十六年く吾必大敗之）此役晉亦四軍く言各有當也」

【上野】○内は「亀井（王引之）」。

【補】三十三裏。○は『輯釋』ではなく、『續考』所引『經義述聞』（先述）。

四二―三「族者屬也く非謂宗族之兵上文王族亦謂屬楚王之兵非楚子宗族也」

【上野】「非謂宗族之兵」の横に「以上劉炫」。

【補】三十四表。「非謂宗族之兵」までは『春秋正義』に引く劉炫^{りゅうげん}。それ以下は安井の案語。

四三―二「爾若射必く子必射」

【補】三十四裏。

四四―八「若作近く知其本亦作與矣」

【補】三十五表。

四四―九「楚子問無乃傷乎故以此答之」

【補】三十五表。

四四―一〇「君命之辱く敢肅使者也」

【補】三十五表。

四六―一「言敗者く禦敵也」

【補】三十五裏。

四八―二「晉楚世家く上似長」

【上野】文中の「豎未冠者く陽穀其名」に括弧。

【補】三十六裏。括弧の部分は『輯釋』になし。

四八―五「軍屯也此謂營壘」

【補】三十六裏。

五〇―八「戰之明く見公也」

【補】三十七裏。

五一―四「釋經所以書歸也」

【補】三十八表。

五二―二「聲伯欲く孫之辭」

【上野】文中の「聲伯爲食く犒師之食」「此二句く

孫之辭」に括弧し、「亀井」。

【補】三十八表。括弧の部分は『輯釋』にはなく、『續考』（先述）。

五四―四「當時之勢魯未必遽亡」

【補】三十九表。

五四―五「戰國策く反語辭也」

【補】三十九表。

五五―五「豹先去く傳甚明」

【補】四十表。

その他から引用された箋

三二―二「公羊云雨而木冰也」

【補】『春秋公羊傳注疏』卷十八・成公十六年。

三二―二「唐會要開元二十九年く吾其死矣」

【補】『唐會要』卷四十四・木冰。

三二―三「漢天文志又曰く甲兵象也」

【上野】「錦城引」。

【補】上野『年表』「左傳研究著述年表」および「書目」によれば大田錦城おおたきんじょうの著書として『春

秋左氏傳とくさいきゅうびよう杜解糾謬』（隠公より閔公に至る）

と『左氏傳標注』がある。上野は『溯源』隠

公元年の書込みで前者の書名を記している。

上野がここで指摘するのは後者か。筆者はともに見。

三二―五「十八年悼公く以攝卿故書」

上野「正義」。

【補】『春秋正義』卷二十八・成公十六年。なお、『續考』（四七七上）が『正義』の同文を引く。

三三―一「沙隨在く縣西六里」

上野「春秋輿図・左通引」。

【補】梁履繩『左通補釋』卷十四・十四表（皇清經解續編）。以下、同書を『左通』と略称、全て卷十四。顧棟高『春秋大事表』附録の春秋輿図・七表（皇清經解）。以下、同書を『大事表』と略称。

三三―四「尹氏周尹佚之後以邑爲氏」

上野「左通引萬氏族畧」。

【補】『左通』十四表。「萬氏氏族畧」は未詳。

三三―四「公卿大夫く不獨尹氏爲然」

上野「沈氏補注」。

【補】沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十一裏（皇清經解續編）。

三四―三「不曰殺而曰刺別於外大夫也」

上野「宇野考」。

【補】宇野鼎（明霞）『左傳考』。筆者未見。同書については上野『雜考』「宇野明霞の左伝考と大田錦城の左伝考補について」参照。

三四―四「楚文王く葉縣間」

上野「左通引大事表七之四」。

【補】『左通』九裏。『大事表』卷七之四・七表。

三四―九「洧陂即く壽州境」

上野「周氏附論左通引」。

【補】『左通』十表。「周氏附論」は未詳。

三四―九「夫渠疑卽渠水也、則夫渠當是近水地名」

上野「左通」。

【補】『左通』十表。

三四―一一「汧陵在、二十五里」

上野「左通引春秋輿図」。

【補】『左通』十裏。春秋輿圖・七表。

三五―一「此言如欲逞吾願、其慮遠知深故也」

上野「古賀」。

【補】古賀煜こがいく（侗庵とうあん）『左氏探蹟』卷四（国立国会図書館所蔵稿本）。

三五―五「三年作六軍、餘皆罷」

上野「正義、秦氏引」

【補】『春秋正義』卷二十八。秦鼎『春秋左氏傳校本』卷十三・十八表。

三五―一一「有此六者則可以戰如器用之不可闕」

上野「林注」。

【補】林堯叟りんぎょうそう『左傳句讀直解』。林注は奥田元繼おくだげんけい『春秋左氏傳評林』に採られ、同書では卷三十・七表（寛政五年有文堂）。以下、林注は同書を参照する。

三五―一一「説文詳審也荀子楊諒注審於事也（公羊宣十二年傳注、無敢疎略之意）凡詳審於事、竟爲不成語」

上野「増島筆記」。また、○で括った部分の横には「沈氏補注」。

【補】増島蘭園ますじまらんえん『讀左筆記』卷七・十四裏（崇文叢書第二輯）。沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十二表。

三六―一二「崔憬易注云瀆古贖字傳皆以瀆爲贖」

上野「惠棟補注」。

【補】惠棟『春秋左傳補注』卷三・五裏（皇清經解）。

三六一二「話言善言也」

上野「秦校本」。

【補】『春秋左氏傳校本』卷十三・十八表に「話、善言也」。

三七一三「恤憂也」

上野「左翼」。

【補】「書目」に周大璋『左翼』の書名あり。
筆者未見。以下、同書に関しては【補】を省く。

三七一五「吾不復得見子矣」

上野「林注」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・八表。

三七一五「申叔時知く文子見尤高」

上野「経世鈔」。

【補】魏禧ぎき『左傳經世鈔さでんけいせいしやう』卷十・十表（聯墨堂藏板）。

三七一七「又決楚敗與申叔時論俱用實筆」

上野「左翼」。

三七一八「晉師起而く俱于此卜之」

上野「周氏左翼」。

三七一九「我詐爲畏怯く晉國之憂也」

上野「林注」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・八裏。

三七一九「邲之戰桓子く前後作比照處」

上野「趙佑」。また、欄外に「讀春秋存稿、五戰」。

【補】趙佑ちやうゆう『讀春秋存稿どくしゆんじゆうそんこう』卷四・五戰。静嘉堂文庫に竹添旧蔵の清刊本が殘されており、そこでは二十四葉表に該当箇所あり。

三七一〇「對不可以當吾世而失諸侯」

上野「左翼」。

三七―一一「語有含蓄く多少事體」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十表。

三七―一二「此篇全以く曲直之法」

上野「趙佑存稿」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十五表。

三八―一二「出曰治兵く別自一義」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

三八―七「時勢與く藉口矣」

上野「左翼」。

三八―九「無敵國外患者國恒亡已先孟子言之矣」

上野「左翼」。

三八―九「玩此一語く正在勝敵哉」

上野「經世鈔魏世倣」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十裏に「世倣曰」として引かれる。なお、『春秋左氏傳評林』も同文を引く。

三八―一〇「邲之役く爭退必亂也」

上野「何義門讀書記」。

【補】何焯^{かしやく}『義門讀書記^{ぎもんどくしよき}』卷十（四庫全書）。

三八―一〇「注笮同窄く迕即此窄字」

上野「趙佑存稿」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十六表。

三八―一一「爲楚所壓く故患」

上野「左翼」。

三九―一二「文子受父之杖今即教子以戈」（漢文大系本には「弋」とあるが、明治講学会本に「戈」とあるのが正しい）

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十一表。

三九―一二「觀後變書、其識遠矣」

上野「何義門」。

【補】『義門讀書記』卷十。

三九―三「說到存亡、精神命脈」

上野「左翼」。

三九―七「兵尚殺、故以晦爲忌」

上野「正義」。

【補】『春秋正義』卷二十八。

三九―九「特複說上文、六間盡於此矣」

上野「古賀」。

【補】『左氏探賾』卷四。

三九―一二「壓壘故可望、皆在目也」

上野「何義門讀書記」。

【補】『義門讀書記』卷十。

三九―一二「李衛公兵法、即今之板屋也」

上野「沈欽韓補注」。

【補】『春秋左氏傳補注』卷六・十二裏。

四〇―一「據說文、今作巢省文也」

上野「臧琳經義雜記」。

【補】臧琳^{ぞうりん}『經義雜記^{けいぎざつき}』卷四・十五表（皇清經解）。

四〇―二「以爲車上爲櫓、加樓矣」

上野「臧氏」。

【補】『經義雜記』卷四・十五表。

四〇―四「聚中軍張幕徹幕甚囂、皆乘皆下、並是敘事、非問辭、唯騁而左右何也、及戰乎二語爲王之間辭、中間數語皆省之」

上野「増島」。

【補】『讀左筆記』卷七・一五裏に「皆聚中軍

矣、張幕矣、徹幕矣、甚囂且塵上矣、皆乘、左右執兵而下、皆是敘事。但張而左右何也、及戰乎二語、王問之之辭。中間數語皆省之。林皆以爲問辭、誤甚」とあり。ただし、増島は中井履軒『左傳雕題略』卷三・一五裏（弘化三年廓然堂藏版）「聚中軍、張幕、徹幕、甚囂、皆乘、皆下、並是敘事矣。非問辭。唯騁而左右何也及戰乎二語爲王之問辭而已。林註有謬解、故詳焉」を、中井の名を出さずに引用している。竹添は『左傳雕題略』と『讀左筆記』の双方に拠ったと思われる。なお、竹添の第一稿本では「…爲王之問辭而已」とあり、「而已」を朱で抹消し欄外に「中間數語皆省之」と追加してある。

四〇―五 「邲之戰く以行」

上野 「左通引讀左日鈔六」。

【補】『左通』十一裏。朱鶴齡『讀左日鈔』卷六・四表（四庫全書）。

四〇―九 「東上爲下苗賁皇句作陪」

上野 「左翼」。

四〇―一〇 「即從上句跌還晉軍」

上野 「左翼」。

四〇―一一―四一―一 「自楚子登巢車く服說非也」

上野 「趙佑」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十六表。

四一―五く七 「楚師之敗く所以專美賁皇也」

上野 「周大璋 左翼」。

四一―九 「此實筮也而注言卜者卜筮通言耳」

上野 「正義」。

【補】『春秋正義』卷二十八。

四一―九「是三句繇辭、筮者之辭（緘縮也）元大也元王猶云巨帥也」

上野「中井」。

【補】中井履軒『左傳雕題略』卷三・十五裏。

○の中は同書になし。

四一―一〇「此與僖十五年、不可強解也」

上野「左通引惠氏補注三」。

【補】『左通』十一裏。惠棟『春秋左傳補注』卷三・六表。

四一―一〇「復卦無離象、皆不可從」

上野「中井」。

【補】『左傳雕題略』卷三・十六表。

四二―一「晉師乃皆左右行相避于前」

上野「林注」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・十一裏。

四二―四「公行公左右親軍也」

上野「趙佑」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十六裏。

四二―五「元帥有元帥之大任戎右有戎右之大任」

上野「趙佑」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十六裏。

四二―七「數語法家之言、用法如此」

上野「鍾伯敬 奥田評林引」

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・十二表に引く鍾伯敬。

四二―九「忽插在後、以斷爲聯也」

上野「趙佑」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十七表。

四二―一〇「釋文、不得有子字（蓋當時有同名者故舉其父以別之）不言子者、傳摯是也」

【上野】「正義」。また、○で括った部分には「秦

校本引周亮工^マハ看左傳評林」。

【補】「釋文く不得有子字」「不言子者く傳摯是也」は『春秋正義』卷二十八の疏と『經典釋文』に拠ったもの。「蓋當時有同名者故舉其父以別之」は、『春秋左氏傳評林』卷三十・十二表が引く周亮工。『春秋左氏傳校本』卷十三・二十二表にも同文が見えるが、同書は周亮工の名を記さない。

四二―一二く四三―一「太玄曰く韓詩外傳八」

【上野】「左通引」。

【補】『左通』十二表。

四三―二「此就目前く大辱國也」

【上野】「古賀」。

【補】『左氏探賾』卷四。

四三―七「此當是く已敗後事」

【上野】「趙佑存稿」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十七表。

四三―七「皆致恭也」

【上野】「林注」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・十三表。

四三―八「劉向新序く」（上野の書き込みでは括弧が閉じられていない）

【上野】「章句文字」。

【補】伊藤鳳山^{いとうほうざん}『左傳章句文字^{さでんしょうくもんじ}』。筆者未見。

四三―九「在軍故く鉞是也」

【上野】「左通」。

【補】『左通』十二裏。

四四―七「注閒猶近也釋文近如字一本作與莊九年昭二十六年注並云閒與也則此傳亦宜訓與爲是」

【上野】「經義述聞」。

【補】『經義述聞』卷十八・十五裏。ただし、竹添は『經義述聞』の他に『輯釋』三十五表にも拠っている。「莊九年昭二十六年」以下は『經義述聞』の節略（「莊九年」は誤りで、『經義述聞』では「莊十年」となっている）。「則此傳亦宜訓與爲是」は竹添の付記と思われる。

四四―九「詩文王く言身得安寧也」「杜注敢告不寧く敢告之言矣」

【上野】それぞれ、「臧氏經義雜記」「臧氏」。

【補】『經義雜記』卷七・三十四。

四四―一二く四五―二「鄉飲酒禮く曲身下手名肅之義也」

【上野】「豬飼彦博 西河折妄上」

【補】「豬飼敬所『西河折妄』卷之上。静嘉堂文庫に竹添旧蔵の文政十二年刊本あり。その六

葉表に該當箇所があり、引用された部分には傍点が打たれている。

四五―二く五「肅拜與但言肅者く非確詰也」

【上野】「朱大韶實事求是齋經義一、肅與肅拜辨」。

【補】朱大韶『實事求是齋經義』卷一・十八表（皇清經解續編）。

四五―五「此爲十七年樂書譜卻至張本」

【上野】「惠士奇」。

【補】惠士奇の子である惠棟『春秋左傳補注』

卷三・七表に「子惠子曰爲十七年樂書譜卻至張本」とある。

四五―七「彭士望曰」見此際く不悞事者」

【上野】「經世鈔十」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十三裏に引く彭士望。

四五—一一「鄉射記注旌總名也」

上野「沈氏補注」。

【補】沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十四裏。

四六—一「韓厥卻至、勢可想」

上野「左翼」。

四六—四「以手搏、折其軼」

上野「林注」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・十四表。

四六—五「魏禧曰」此處忽、整暇之妙」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十四表。

四六—六「楚之俘囚、之軍靡」

上野「沈氏補注」。

【補】沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十四裏。

四六—九「用衆最難、論勇尤佳」

上野「經世鈔、魏世倣」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十四裏に引く魏世倣。

四六—一一「攝之言代、其義甚明」

上野「俞氏群經平議」。

【補】俞樾『群經平議』卷二十六・十表（皇清經解續編）。

四六—一二「說文、尚飲十榼」

上野「沈氏補注」。

【補】沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十四裏。

四七—一「承貯也、而進獻」

上野「求闕齋讀書記二」。

【補】曾國藩『求闕齋讀書錄』卷二（近代中国史料叢刊続集第一輯）。

四七—三「識記也く暇之言也」

上野「顧氏補正」。

【補】顧炎武『左傳杜解補正』卷二・十四表（皇清經解）。

四七—三「一種雅度開羊陸之風」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十五表。

四七—五「而子反便く不撓也」

上野「古賀」。

【補】『左氏探賾』卷四。

四七—八「金創爲夷く金瘡痼疾」

上野「沈氏補注」。

【補】沈欽韓『春秋左氏傳補注』卷六・十四裏。

四八—五「晉君戎馬之前也」

上野「依晉語六注、左通引」。

【補】『左通』十三裏。『國語』卷十二・晉語六

韋昭注。

四八—五「以文子起以文子結」

上野「趙佑」。

【補】『讀春秋存稿』卷四・二十八表。

四八—七「文子至此く情詞俱盡」

上野「經世鈔、謝文存」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・十五裏に引く謝文洊。

四八—八「水經陰溝水注く即此城也」

上野「左通引大事表七之四」。

【補】『左通』十三裏。『大事表』卷七之四・七表。

四八—一一「楚共寬厚く失於大深」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

四九—三「此敬子重く可遵依乎」

上野「古賀」。

【補】『左氏探蹟』卷四。

四九—四—一〇【姜炳璋曰】此篇分く於此知之」

上野「讀左補義二十三」。

【補】姜炳璋『讀左補義』卷二十三・七裏（四庫全書存目叢書）。

四九—一二「壞隕未詳く曲阜縣境内」

上野「左通引大事表七之一」。

【補】『左通』十三裏。『大事表』卷七之一・十八表。

五〇—三「傳曰趨く不知謀」

上野「姜氏補義引趙汭補注」。

【補】『讀左補義』卷二十三・九裏。趙汭『春秋左氏傳補注』卷五・十表（通志堂經解）。

五〇—四「姜不過く刺爲冤」

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷二十三・九裏。

五〇—一〇「未遽説及子臧事也」

上野「陸粲」。

【補】『左傳附注』卷二。

五〇—一一「曹人之請く重在子臧」

上野「左翼」。

五一—九「襄十九年く此督揚也」

上野「左通引地名攷畧六」。

【補】『左通』十四表。高士奇『春秋地名考略』卷六・十五裏（四庫全書）。

五二―五「鄭之制、得斯稱耳」

【上野】「左通」。

【補】『左通』十四裏。

五二―六「今制城、鄭縣東北」

【上野】「以下引日講春秋解義三十五」。

【補】前項と同じく『左通』十四裏。

『日講春秋解義』にっこうしゅんじゅうかいぎ卷三十五（四庫全書）。

五二―七「今河南、鹿邑城」

【上野】「左通引大事表七之四」。

【補】『左通』十四裏。『大事表』卷七之四・二十四表。

五二―一〇「潁上潁水之上也、有潁上縣」

【上野】「高岱春秋地名攷補、左通引」。

【補】『左通』十四裏。「高岱春秋地名攷補」は未詳。

五二―一一、五三―一二【兪樾曰】如杜解、軍字之義」

【上野】「左傳平議」。

【補】兪樾『群經平議』卷二十六・十裏。

五三―四「有欒范、卻氏左腹」

【上野】「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・二十表。

五三―五「晉政多門語、尤切於時故」

【上野】「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・二十表。

五三―八「魯西鄆、四達之衝矣」

【上野】「左通引大事表六之上及九」。

【補】『左通』十五表。「以居公者」までは『大事表』卷六之上・十九表、それ以下は卷九・一表。

五四―二「社稷之々安危者」

上野「章句文字」。

【補】『左傳章句文字』。

五四―二【魏禧曰】妙在説く類是也」

上野「經世鈔十」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・二十裏（参照したテキストは二十葉が二枚重複している。その二枚目）。

五四―七「范文子く不合于道」

上野「經世鈔」。

【補】『左傳經世鈔』卷十・二十一表。

五五―二「出逐也く命逐之也」

上野「林注之意」。

【補】『春秋左氏傳評林』卷三十・二十表。

五五―三「公子偃年未及冠（雖爲穆姜所指く有

今將之心也）乃徒以穆姜く一何忍乎」

上野「客難」。また、○で括った部分には「吳

激」「元吳激、春秋傳說彙纂引」。

【補】龔きよう元げん玠かい『春秋客難』か。未詳。
『欽定春秋傳說彙纂』卷二十四（四庫全書）。

五五―四「不殺鉏者鉏幼公不忌耳」

上野「趙汭補注姜氏引」。

【補】『讀左補義』卷二十三・十二裏。趙汭『春秋左氏傳補注』卷五・十表。

五五―七く一一【全祖望曰】司徒爲上く而輕之也」

上野「經史問答 論語」。

【補】全祖望『經史問答』卷六・九表（皇清經解）。

五六―二「郤至稱伐く驟數也」

上野「秦校本」。

【補】『春秋左氏傳校本』卷十三・二十八表。

五六―三「此時變書〽七人之下」

上野「正義」。

【補】『春秋正義』卷二十八。

五六―七「鄢陵之役〽頸者此也」

上野「姜氏補義」。

【補】『讀左補義』卷二十三・十三表。

本文初出

序

未発表

第一章 『左氏會箋』の概略

未発表

第二章 『左氏會箋』に関する先行研究

未発表

第三章 『左氏會箋』の稿本

「『左氏會箋』の五つの稿本」（『名古屋大學中國語學文學論輯』第二十八輯、二〇一四年八月）を元に改稿。

第四章 『左氏會箋』の準備稿

「静嘉堂文庫蔵『左傳集説』について——『左氏會箋』の準備稿——」（『東洋古典學研究』第三十七集、二〇一四年五月）より抜粋、改稿。

第五章 『左傳輯釋』『左傳續考』と『左氏會箋』

「静嘉堂文庫藏『左傳集説』について―『左氏會箋』の準備稿―」（『東洋古典學研究』第三十七集、二〇一四年五月）および「『左氏會箋』隱公における『左伝續考』の受容―稿本より成本に至る過程―」（『日本漢文学研究』第9号、二〇一四年三月）より抜粋、改稿。

第六章 『左氏會箋』以前における竹添進一郎の『左傳』評注書

未発表。

第七章 「文法」解説書としての『左傳鈔』と『左氏會箋』

未発表。第六章と第七章の内容は、平成二十六年七月十二日開催の中部地区中文交流会における研究発表「『左氏會箋』以前における竹添井井と『左伝』を元にまとめた」。

結語

未発表

附録 『左氏會箋溯源』補義

「『左氏會箋』成公十六年箋の考証―『左氏會箋溯源』補義―」（『名古屋大學中國語學文學論輯』第二十五輯、二〇一三年九月）および「『左氏會箋』宣公十二年箋の考証―『左氏會箋溯源』補義―」（『名古屋大學中國語學文學論輯』第二十六輯、二〇一三年十二月）を元に改稿。